

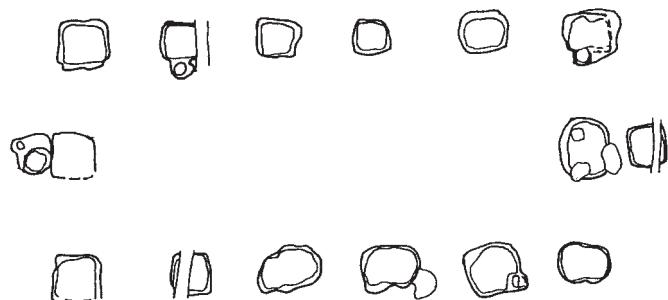
推定 上野國府

～平成27年度調査報告～



推定上野国府

～平成27年度調査報告～



元総社小学校校庭遺跡の1号掘立柱建物跡（1：200）

2017. 3

前橋市教育委員会



1 元総社小学校校庭（41トレンチ）より榛名山を望む（南東から）



2 元総社小校庭遺跡（41トレンチ）（南から）

巻頭図版2



3 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₁全景 (南から)



4 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₂全景 (南から)



5 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₃全景 (南から)



6 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₄全景 (南から)



7 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₅全景 (南から)



8 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₆全景 (南から)



9 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₇全景 (西から)



10 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₈全景 (南から)



11 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₈柱痕 (南から)



12 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₉全景 (南から)



13 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₁₀全景 (南から)



14 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₁₁全景 (南から)



15 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₁₂全景 (南から)



16 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₁₃全景 (南から)



17 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₁₄全景 (南から)



18 41トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₁₅全景 (南から)

巻頭図版4



19 41トレンチ 新発見の柱穴全景（北から）



20 41トレンチ 新発見の柱穴（柱痕）（南から）



21 37トレンチ 1号溝跡全景（南西から）



22 35トレンチ 1号建物跡掘込地業検出状態（東から）



23 35トレンチ 1号建物跡 掘込地業検出状態（西から）



24 35トレンチ 1号建物跡 掘込地業①（南東から）



25 35トレンチ 1号建物跡 掘込地業②（南から）



26 35トレンチ 1号建物跡 掘込地業③（東から）



27 35トレンチ 1号建物跡 掘込地業④（南東から）

巻頭図版6



28 44トレンチ 1号掘立柱建物跡（南から）



29 44トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₅（南から）



30 44トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₂（西から）



31 44トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₂底面（西から）



32 44トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₄（南から）



33 44トレンチ 鉄分の凝集 検出状態（南から）



34 44トレンチ 9号土坑 底面（南から）

はじめに

前橋市の総社・元総社地区周辺は、宝塔山古墳や蛇穴山古墳をはじめ山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺などの諸施設が立ち並ぶ古墳時代から律令期にかけての上野国の中核地域と考えられ、上野国府もその一角にあったと推定されています。

国府とは、律令制の下に各国ごとに置かれた国司の役所で、特に上野国府は平安時代の中頃に起きた平将門の乱の舞台となるなど、記録にも度々その名前が登場します。しかしながら、その中心施設の国庁の位置や、国府域の範囲など、その内容については、詳しいことが分かっていません。

この問題を解決し、後世にわたり保存・活用するための基礎的な資料を得るために文化庁、群馬県教育委員会の指導を受けつつ、「上野国府等調査委員会」において、毎年検討会を開催しながら、平成23年度から5ヵ年計画で継続的な確認調査を行うことになりました。

今回、上梓する報告書は、その5ヵ年目の調査内容をまとめたものです。本年度は、元総社小学校の校庭で昭和37年に群馬大学が調査した掘立柱建物跡を再調査したほか、元総社町内において新たに掘立柱建物跡を発見することができ、上野国府の解明へと一歩づつ着実に成果を挙げることのできた5ヵ年の最終年度にふさわしい調査とすることことができました。

最後に、本事業の推進にあたり、国・県・市の関係各位のご理解とご協力に対して深く感謝する次第です。また、地元の元総社町各自治会をはじめ土地所有者の皆さんからも惜しみない協力をいただくことができましたことを、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

前橋市教育委員会

教育長 佐藤博之

例　　言

1. 本報告書は、上野国府等範囲内容確認調査計に基づき、5ヵ年の調査計画（平成23～27年度）の5年次調査として、平成27年度に実施した発掘調査の報告書とともに過去の調査を総括した報告書である。
2. 遺跡は群馬県前橋市元総社町2110番地1号ほかに所在する。
3. 発掘調査は、上野国府等調査委員会の指導のもと前橋市教育委員会が実施した。調査の要項は以下のとおりである。
 - ①発　掘　調　査　期　間　　平成27年5月25日～平成27年12月22日
 - ②整理・報告書作成期間　　平成27年12月24日～平成28年3月31日
 - ③調査組織（平成27年度）
上野国府等調査委員会
 - (1) 委員会
委員長　松島榮治（元前橋市文化財調査委員）
副委員長　須田　勉（国士館大学文学部教授）
委員　林部　均（国立歴史民俗博物館教授）、梅澤重昭（元前橋市文化財調査委員）、井上唯雄（前橋市文化財調査委員）、前沢和之（館林市史編さんセンター専門指導員・跡見学園女子大学兼任講師）、右島和夫（群馬県文化財保護審議会委員）
幹事　小林　正（群馬県教育委員会文化材保護課文化財活用係副主幹）、新井　仁（同埋蔵文化財係指導主事）、関谷　仁（前橋市教育委員会事務局教育次長）、小島純一（同文化財保護課長）、前原　豊（同文化財保護課専門員）
顧問　佐藤博之（前橋市教育委員会教育長）
指導　文化庁文化財部記念物課文化財調査官、洞口正史（群馬県教育委員会文化課保護課長）
 - (2) 調査部会
幹事　松田　猛（高崎市立多胡小学校長）、田中広明（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団主査）、出浦　崇（伊勢崎市教育部文化財保護課埋蔵文化財担当主査）
 - (3) 事務局（担当課　前橋市教育委員会文化財保護課）
課長（幹事）　小島純一　　文化財保護課専門員　前原　豊
係長　梅澤克典
係員　藤坂和延、並木史一、福田貫之、阿久澤智和、寺内勝彦
 - ④発掘・整理担当者　　阿久澤智和
 4. 本書の編集は阿久澤が行った。
 5. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。
斎藤簡詳、高澤京子、仲野正人、奈良啓子、峰岸あや子、山田哲也
 6. 発掘調査にあたり、伊藤典子氏、木下政義氏、松田清子氏、宮下雅夫氏の土地を借用した。
 7. 調査および報告書作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導・御協力があった。
群馬県教育委員会文化財保護課、（公益財団法人）群馬県埋蔵文化財調査事業団、前橋市立元総社小学校
石田　真、出浦　崇、伊藤典子、井上唯雄、梅澤重昭、大西雅広、大橋泰夫、神谷佳明、木下政義、桜岡正信、須田　勉、高島英之、田中広明、林部　均、前沢和之、松島榮治、松田清子、松田　猛、右島和夫、宮下雅夫
 8. 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡例

1. 挿図中に使用した北は、座標北である。

2. 挿図に建設省国土地理院発行の1:200,000地形図(宇都宮、長野)、1:50,000地形図(前橋)を使用した。

3. 本遺跡の略称は、27A147である。略称の後に枝番を付し、トレンチ番号を示した。

4. 遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳～奈良・平安時代の堅穴住居跡 B…建物跡 W…溝跡 T…堅穴状遺構

I…井戸跡 D…土坑 P…ピット・柱穴・貯蔵穴 O…落ち込み

5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。

遺構 全体図・遺構配置図…1:200などを適宜用いた。

遺構断面図…1:60 住居跡…1:60 (竈…1:30) 溝…1:60 建物跡…1:100

遺物 土器…1/3・1/4

6. 計測値については、()は現存値、[]は復元値を表す。

7. 遺物觀察表については、以下のとおり記述した。

①層位は遺構出土の場合、「床直」・「底面」：遺構底面より10cm未満の層位からの検出、「覆土」：床面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。

②口径、器高の単位はcmである。現存値を()、復元値を[]で示した。

③胎土は、細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0～1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名等を記載した。

④焼成は、基本的に極良・良好・不良の三段階とした。ただし、須恵器について酸化焰焼成によるものは「酸化焰」と記載した。

⑤色調は土器外面で観察し、色名は『新版標準土色帳』(小山・竹原1967)によった。

8. 遺構平面図の――は推定線を表し、-----は堅緻面の範囲を表す。

9. スクリントーンの使用は、次のとおりである。特別な場合は図版ごとに凡例を設けた。

遺構平面図 版築…■ 粘土分布…■ 焼土分布…■ 灰分布…■

遺構断面図 構築面…■ 版築…■ 灰分布…■ 砂質…■

遺物実測図 須恵器断面…■ 陶器・磁器断面…■

煤付着…■ 陶器・磁器表面…■ 黒色処理…■ 摩耗面…■

10. 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B (浅間B軽石：供給火山・浅間山、1108年)

Hr-FP (榛名二ッ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、6世紀中葉)

Hr-FA (榛名二ッ岳渋川テフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭)

As-C (浅間C軽石：供給火山・浅間山、4世紀前半)

目 次

第1部 平成27年度範囲内容確認調査報告

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
1 遺跡の立地	2
2 歴史的環境	4
III 調査方法と経過	7
1 調査方法	7
2 調査経過	8
IV 基本層序	11
V 遺構と遺物	13
1 各トレンチの概要	13
2 各トレンチの検出遺構	18
VI まとめ	64
1 元総社小学校とその周辺について	64
2 国庁推定地B・C案周辺について	68

第2部 上野国府等範囲内容確認調査 第1期調査について

I 上野国府等調査委員会5年間のまとめ	71
1 上野国府等調査委員会の設立と経緯	71
2 委員会の活動経過	71
II 調査成果のまとめ	75
1 各年度の調査概要	75
2 各国庁推定地案における調査結果について	75
3 まとめ	79

挿図目次

Fig. 1	推定上野国府位置図	3
Fig. 2	周辺遺跡	5
Fig. 3	2 m 小グリッドの呼称	7
Fig. 4	グリッド設定図と平成27年度調査区	10
Fig. 5	基本層序模式図と各トレンチ土層柱状図	12
Fig. 6	トレンチ全体図(1)	15
Fig. 7	トレンチ全体図(2)	16
Fig. 8	トレンチ全体図(3)	17
Fig. 9	35トレンチ各遺構	29
Fig. 10	35・36トレンチ各遺構	30
Fig. 11	36・37トレンチ各遺構	31
Fig. 12	37トレンチ各遺構	32
Fig. 13	37トレンチ各遺構	33
Fig. 14	38トレンチ各遺構	34
Fig. 15	38トレンチ各遺構	35
Fig. 16	38・39トレンチ各遺構	36
Fig. 17	40・41トレンチ各遺構	37
Fig. 18	41トレンチ各遺構	38
Fig. 19	41トレンチ各遺構	39
Fig. 20	42トレンチ各遺構	40
Fig. 21	42トレンチ各遺構	41
Fig. 22	43トレンチ各遺構	42
Fig. 23	44トレンチ各遺構	43
Fig. 24	44トレンチ各遺構	44
Fig. 25	国府推定地C案周辺の遺物(1)	45
Fig. 26	国府推定地C案周辺の遺物(2)	46
Fig. 27	国府推定地C案周辺の遺物(3)	47
Fig. 28	国府推定地C案周辺の遺物(4)	48
Fig. 29	区画溝・元総社小学校周辺の遺物	49
Fig. 30	元総社小学校周辺の遺物(2)	50
Fig. 31	元総社小学校周辺の遺物(3)	51
Fig. 32	元総社小学校周辺の遺物(4)	52
Fig. 33	元総社小校庭遺跡(41トレンチ) 1号掘立柱建物跡の模式図	65
Fig. 34	44トレンチの1号掘立柱建物跡模式図	65
Fig. 35	国府推定地4案と元総社小学校周辺の状況 (6・7世紀)	76
Fig. 36	国府推定地4案と元総社小学校周辺の状況 (8・9世紀)	77
Fig. 37	国府推定地4案と元総社小学校周辺の状況 (10・11世紀)	78

表目次

Tab. 1	各トレンチの面積と調査目的	7
Tab. 2	調査経過表	8
Tab. 3	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表	53
Tab. 4	遺物観察表	59
Tab. 5	各トレンチにおける瓦の出土状態	70

図版目次

【巻頭図版】

1	元総社小学校校庭(41トレンチ)より榛名山を望む(南東から)	
2	元総社小校庭遺跡(41トレンチ)(南から)	
3	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₁ 全景(南から)	
4	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₂ 全景(南から)	
5	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₃ 全景(南から)	
6	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₄ 全景(南から)	
7	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₅ 全景(南から)	
8	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₆ 全景(南から)	
9	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₇ 全景(西から)	
10	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₈ 全景(南から)	
11	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₈ 柱痕(南から)	
12	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₉ 全景(南から)	
13	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₁₀ 全景(南から)	
14	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₁₁ 全景(南から)	
15	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₁₂ 全景(南から)	
16	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₁₃ 全景(南から)	
17	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₁₄ 全景(南から)	
18	41トレンチ 1号掘立柱建物跡P ₁₅ 全景(南から)	
19	41トレンチ 新発見の柱穴全景(北から)	
20	41トレンチ 新発見の柱穴(柱痕)(南から)	
21	37トレンチ 1号溝跡全景(南西から)	
22	35トレンチ 1号建物跡掘込地業検出状態(東から)	
23	35トレンチ 1号建物跡掘込地業検出状態(西から)	
24	35トレンチ 1号建物跡 堀込地業①(南東から)	
25	35トレンチ 1号建物跡 堀込地業②(南から)	
26	35トレンチ 1号建物跡 堀込地業③(東から)	
27	35トレンチ 1号建物跡 堀込地業④(南東から)	

- 28 44トレンチ 1号掘立柱建物跡（南から）
 29 44トレンチ 1号掘立柱建物跡P₅（南から）
 30 44トレンチ 1号掘立柱建物跡P₂（西から）
 31 44トレンチ 1号掘立柱建物跡P₂底面（西から）

- 32 44トレンチ 1号掘立柱建物跡P₄（南から）
 33 44トレンチ 鉄分の凝集 検出状態（南から）
 34 44トレンチ 9号土坑 底面（南から）

【遺構写真】

- PL. 1 - 1 35トレンチ全景（東から）
 2 35トレンチ 1号土坑全景（南から）
 3 35トレンチ 1号竪穴状遺構全景（南から）
 4 36トレンチ全景（東から）
 5 36トレンチ遺構集中部付近全景（西から）
 6 36トレンチ 1号住居跡・1号落ち込み全景（南から）
 7 36トレンチ 2号住居跡全景（南から）
 8 36トレンチ 3号住居跡全景（西から）
 PL. 2 - 1 36トレンチ 1号溝跡全景（北から）
 2 37トレンチ全景（北から）
 3 37トレンチ 1号住居跡全景（南から）
 4 37トレンチ 3号住居跡全景（西から）
 5 37トレンチ 1号竪穴状遺全景（南から）
 6 37トレンチ 2号住居跡および1号溝跡全景（南西から）
 PL. 3 - 1 37トレンチ 1号溝跡土層堆積状態（南西から）
 2 37トレンチ 1号井戸跡全景（西から）
 3 38トレンチ全景（北西から）
 4 38トレンチ 1号住居跡全景（南から）
 5 38トレンチ 2号住居跡全景（北から）
 PL. 4 - 1 38トレンチ 3・4・5・6号住居跡全景（南から）
 2 38トレンチ 7号住居跡全景（西から）
 3 38トレンチピット群（1号・2号掘立柱建物跡）全景（西から）
 4 38トレンチB-1 P₆・P-5全景（北から）
 5 38トレンチB-1 P₆土層堆積（北から）
 PL. 5 - 1 38トレンチB-1 P₄, P₅全景（北から）
 2 38トレンチB-1 P₅土層堆積（南から）
 3 38トレンチB-1 P₇全景（東から）
 4 38トレンチB-1 P₇土層堆積（南から）
 5 38トレンチP-1全景（西から）
 6 38トレンチB-1 P₁・P-10・11全景（北から）
 7 38トレンチB-1 P₁土層堆積（北東から）
 8 38トレンチP-11土層堆積（南西から）
 PL. 6 - 1 38トレンチB-1 P₃, B-2 P₂全景（南から）
 2 38トレンチB-1 P₃, B-2 P₂土層堆積（北から）
 3 38トレンチB-1 P₂, P-18全景（西から）
 4 38トレンチB-1 P₂土層堆積（南から）
 5 38トレンチ 1号溝跡全景（南から）
 6 38トレンチ 2・3号溝跡全景（南から）
 PL. 7 - 1 38トレンチ 2号溝跡土層堆積（南から）
 2 38トレンチ 3号溝跡土層堆積（南から）
 3 38トレンチ 4号溝跡全景（西から）
 4 38トレンチP-7全景（西から）
 5 38トレンチP-7土層堆積（西から）
 6 38トレンチB-2 P₁, P-8全景（北から）
 7 38トレンチB-2 P₁, P-8土層堆積（北から）
 PL. 8 - 1 38トレンチ 1号・3号土坑全景（南から）
 2 38トレンチ硬化面検出状態①（南から）
 3 38トレンチ浅間B軽石堆積状態（南から）
 4 38トレンチ硬化面検出状態②（北から）
 5 39トレンチ遠景（南から）
 6 39トレンチ全景（西から）
 7 40トレンチ 1号溝跡全景（南から）
 8 40トレンチ 1号土坑（北東から）
 PL. 9 - 1 40トレンチより北を望む
 2 41トレンチ表土除去状態（東から）
 3 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₁埋め戻し状態
 4 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₁埋土除去状態（南から）
 5 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₂埋土除去状態（南から）
 6 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₃埋土除去状態（南から）
 7 41トレンチ 1号建物跡P₄埋土除去状態（南から）
 PL. 10 - 1 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₅埋土除去状態（南から）
 2 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₆埋土除去状態（南から）
 3 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₇埋土除去状態（西から）
 4 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₈埋土除去状態（南から）
 5 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₉埋土除去状態（南から）
 6 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₁₀埋土除去状態（南から）
 7 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₁₁埋土除去状態（南から）
 8 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₁₂埋土除去状態（南から）
 PL. 11 - 1 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₁₃埋土除去状態（南から）
 2 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₁₄埋土除去状態（南から）
 3 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₁₅埋土除去状態（南から）
 4 41トレンチ 1号掘立柱建物跡P₁₆埋土除去状態（南から）

- から)
- 5 41トレンチ南辺西拡張部全景（南から）
 6 41トレンチ南辺東拡張部全景（南から）
 7 41トレンチ2号住居跡全景（西から）
 8 41トレンチ風倒木痕？全景（南東から）
- PL.12-1 42トレンチ全景（西から）
 2 42トレンチから41トレンチを望む
 3 42トレンチから21aトレンチを望む
 4 42トレンチ1・2号住居・1号井戸跡全景（西から）
 5 42トレンチ土坑・ピット群付近全景（南から）
 6 42トレンチ2号井戸・1号溝跡全景（南から）
 7 42トレンチ3号井戸跡全景（南から）
- PL.13-1 43トレンチ全景（北から）
 2 43トレンチ1号溝跡付近全景（西から）
 3 43トレンチ2号溝跡付近全景（西から）
 4 43トレンチ2号土坑全景（東から）
 5 43トレンチIII層上面遺構検出状態（北から）
 6 43トレンチIV層上面遺構検出状態（北から）
 7 44トレンチ遠景（北西から）
- PL.14-1 44トレンチ全景①（南から）
 2 44トレンチ全景②西拡張部（南から）
 3 44トレンチ全景③東拡張部（南から）
 4 44トレンチ1号掘立柱建物跡P₁全景（東から）
 5 44トレンチ1号掘立柱建物跡P₂全景（東から）
 6 44トレンチ1号掘立柱建物跡P₃全景（東から）
 7 44トレンチ1号掘立柱建物跡P₄全景（東から）
- PL.15-1 44トレンチ1号P₄遺物出土状態①（南から）
 2 44トレンチP₄遺物出土状態②（東から）
 3 44トレンチ1号溝跡検出状態（南から）
 4 44トレンチ1・3号土坑全景（南から）
 5 44トレンチ4号土坑全景（東から）
 6 44トレンチ5号土坑全景（東から）
 7 44トレンチ2・7・8号土坑全景（東から）
 8 44トレンチ6号土坑全景（東から）
- PL.16-1 44トレンチ9号土坑全景（東から）
 2 44トレンチ10号土坑全景（北東から）
 3 44トレンチ11号土坑全景（北西から）
 4 44トレンチ1・2号ピット全景（東から）
 5 44トレンチ3・4号ピット全景（南から）
 6 44トレンチ1・2・3号落ち込み全景（南東から）
 7 44トレンチ7号落ち込み全景（北から）
 8 作業風景（35トレンチ）

【遺物写真】

- PL.17 国府推定地C案周辺の出土遺物(1)
 PL.18 国府推定地C案周辺の出土遺物(2)
 PL.19 元総社小学校とその周辺の出土遺物(1)

PL.20 元総社小学校とその周辺の出土遺物(2)

PL.21 元総社小学校とその周辺の出土遺物(3)

第1部 平成27年度範囲内容確認調査報告

I 調査に至る経緯

前橋市の元総社・総社地区は総社古墳群、山王廃寺、国分僧寺・尼寺などの古代の遺跡が多く存在し、上野国を中心地として栄えた地域である。上野国府についても、これまでの研究から元総社町付近に設置されたと考えられている。こうした歴史的な環境をふまえて、前橋市教育委員会では元総社・総社地区の歴史遺産を有機的に関連付けた保存・活用を目指し、平成18年度から22年度までの5年間山王廃寺の範囲内容確認調査を実施し、伽藍配置の解明等の成果を収めることができた。その一方で元総社町では元総社蒼海土地区画整理事業の進行とともにない発掘調査を継続してきたが、存在が推定される上野国府に関連する遺構の確認は至っていなかった。区画整理事業が進行していく中で上野国府の実態について早急な解明が急務となったことから、平成23年度から5ヵ年計画で上野国府等範囲内容確認調査が計画され実施されるに至った。本調査は、上野国府の解明を目的として、平成23年度から5ヵ年計画で実施している上野国府等範囲内容確認調査の5年次調査である。

平成23年度の調査は、国府推定地A案（「宅地」等の地名が残る100m四方の区域）の範囲内において9ヶ所にトレンチを設定し309m²の範囲で行った。国府関連遺構は検出されなかったものの、6トレンチにおいて、国府域を考える上で重要な要素と考えられる古代の大溝が検出された。平成24年度の調査は、国府推定地C案（宮鍋神社の南に広がる100m四方の区域）の範囲内における調査を中心としながら、1年次調査6トレンチ検出の大溝の延長の確認や、国府推定地4案以外の地点として総社神社西方における範囲確認調査もあわせて実施し、合計で9ヶ所にトレンチを設定し705m²の面積を調査した。結果としては宮鍋神社の北で国府存在期に掘削されたと推定される南北方向の溝が確認された程度で国府に関連する遺構は検出されなかった。平成25年度は①国府関連遺構の存在が推定される総社神社および元総社小学校周辺の調査、②元総社町で検出されている大溝（区画溝）の解明、③東山道駅路国府ルートの解明の3点を目的として調査を実施した。結果としては、区画溝および東山道駅路国府ルートについては、解明に至る発見はなかったものの、元総社小学校の校庭における調査で、古代の溝から8世紀から9世紀にかけて国府関連施設で使用されたと考えられる土器群が出土した。平成26年度は、前年度の成果を踏まえながら、①大溝（区画溝）の解明、②元総社小学校とその周辺の調査、③国府推定地C案付近の調査を実施した。その結果、国府推定地C案付近では元総社蒼海遺跡群（蒼海（95）・（99））の調査も含めて、掘込地業建物2棟・掘立柱建物2棟、古代の溝3条が検出され、元総社小学校とその周辺では、校庭で建物跡1棟、古代の大溝1条が、学校の西で古代の大溝1条がそれぞれ検出された。国府推定地C案周辺では建物跡が合計4棟、区画溝と考えられる大溝が3条確認され、何らかの施設が存在していた可能性が高くなり、また、元総社小学校校庭の成果は、元総社小校庭遺跡の調査で検出された2棟の建物跡に続く3例目の建物跡の検出であり、その西側で古代の区画溝と考えられる大溝が検出されたことも大きな成果であった。

本年度は、昨年度の調査結果を踏まえながら、下記の3つの点に関して範囲内容確認調査を実施し、国府解明に資することとした。

(1) 国府推定地C案周辺における範囲内容確認調査

平成26年度に国府推定地C案周辺で実施された発掘調査で、掘込地業建物2棟、掘立柱建物2棟、区画溝3条が検出された。これらの遺構は、南で掘立柱建物2棟が重複して検出され、その北側では、区画溝2条が新旧関係をもちながら建物とほぼ同じ方向（ほぼ東西方向）に、そして掘立柱建物の東でも南北方向の区画溝が1条検出された。さらに、これら掘立柱建物や区画溝の北では2棟の掘込地業建物がやや距離をおいてそれぞれ検出さ

れた。この付近は、区画整理事業の進捗に伴ってここ数年で発掘調査が実施されているが、この他に掘立柱建物や掘込地業建物は検出されていない。付近には、未だ未調査の地点も存在することから、未調査区域に掘立柱建物跡や掘込地業建物跡が存在するか確認するものである。

また、28トレンチ（平成26年度調査）において検出された掘込地業建物であるが、調査を進めていく過程でこの遺構が建物の掘込地業であることが判明したために、建物の構造を考える上で必要な情報が十分に得られたのかどうか疑問が持たれる状況が発生した。この掘込地業は枠形を呈しており、その南辺は未調査であることから、南辺の精査を行い、その成果から平成26年度調査の成果を検証することとした。

（2）大溝（区画溝）の解明

区画溝と考えられる大溝の確認調査については、平成25年度実施の第3次調査以来実施しているが、平成25年度に区画整理事業にともない実施された元総社蒼海遺跡群（58）で、N-75°-Eの区画溝が検出された。この区画溝は、平成25年度調査に先立ち想定した「方形の区画」の西辺に当たる区画溝とほぼ垂直に交わるものであった。この蒼海（58）の区画溝の検出は想定外であり、想定した「方形の区画」を根底から搖さぶるものであった。また、この区画溝と西辺の溝との交点と推定される地点で行った29トレンチの調査（平成26年度調査）では、区画溝の交点は明確に確認できなかった。また、29トレンチで検出された溝と、それより北で過去に検出された大溝では規模や断面形状が異なっていた。しかしながら、29トレンチにおいて溝が検出されたことにより、それらが南に位置する元総社蒼海遺跡群（21）・（23）で検出されていた溝が規模を変えながらも連続するものであることが判明し、溝はさらに南へ続いていると考えられることから、この溝がどこまで続くのか範囲確認を行う必要が生じたため、蒼海（21）・（23）よりも南で溝の存在が推定される地点での範囲確認調査を行うこととした。

（3）元総社小学校およびその周辺について

元総社小学校周辺における上野国府等範囲内容確認調査は平成25年度から実施している。付近でそれ以前に実施された元総社小校庭遺跡、元総社寺田遺跡、元総社明神遺跡の成果を加えると、元総社小校庭で建物跡3棟分、区画溝2条が検出されたほか、校庭から西へ約100mの地点（31aトレンチ）でも区画溝が検出されている。出土遺物でも、元総社寺田遺跡から出土した人形を代表格として、国府関連施設名の墨書き土器や硯等が多く出土している。こうした調査成果が蓄積されていく中で、上野国府の発掘調査の原点とも言える元総社小校庭遺跡については、元総社小学校の度重なる改修のために、正確な調査地点が判然としない状態となってしまっていた。しかしながら、当時の関係者の証言や、平成26年度調査（30トレンチ）で、元総社小校庭遺跡の調査トレンチの一部が確認できたことなどから、その存在が推定できる地点の位置が絞りめしたことと、校庭における調査を進める中で掘立柱建物の位置が重要となることから、その位置を確定させるための確認調査を実施することとした。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地の利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。

本遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前の浅間山噴火によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。台地の東部は、広瀬川低地帯と直線的な崖で区切られていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かっ



Fig. 1 推定上野国府位置図

推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高3m～5mを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑畠を主とした畑地として利用されてきた。

本遺跡は、前橋市街地から利根川を隔て、西へ約3kmの地点、前橋市元総社町地内に所在している。南東へ約1kmの所に上野国総社神社があり、すぐ西には関越自動車道が南北に走っている。さらに、主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に走り、東側には市道大友・石倉線が南北に走り、これらの幹線道路を中心にオフィスビルや大規模小売店が進出している。本遺跡はこれらの幹線道路から奥に入ったところに位置し、周囲には田畠が多い住宅地という静かで落ち着いた環境である。

2 歴史的環境

本遺跡地周辺には、総社古墳群、山王廃寺、上野国分僧寺・尼寺のほか蒼海城跡など多くの遺跡が存在し、歴史的環境に優れている。また継続して実施されている埋蔵文化財発掘調査によって新しい知見が集積されている。

縄文時代 縄文時代の遺跡としては、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡や元総社蒼海遺跡群で前期・中期の集落跡が検出されているほか、元総社蒼海遺跡群（9）で晩期の住居が検出されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、水田・集落跡等が検出された日高遺跡のほか、新保遺跡や新保田中村前遺跡など、染谷川沿いで拠点的な集落が営まれるが、現在前橋市域となっている範囲では、後期住居跡が検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域や桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけ少ない。

古墳時代から奈良・平安時代 古墳時代の集落については4世紀代と6世紀代を中心に展開しており、大屋敷遺跡や元総社蒼海遺跡群で集落が確認されている。元総社蒼海遺跡群では、牛池川沿いの低地で古墳時代の水田も確認されているほか、墓域や祭祀跡も確認されており、同時代の集落・生産域・墓域がそれぞれ展開していたことがうかがえる。

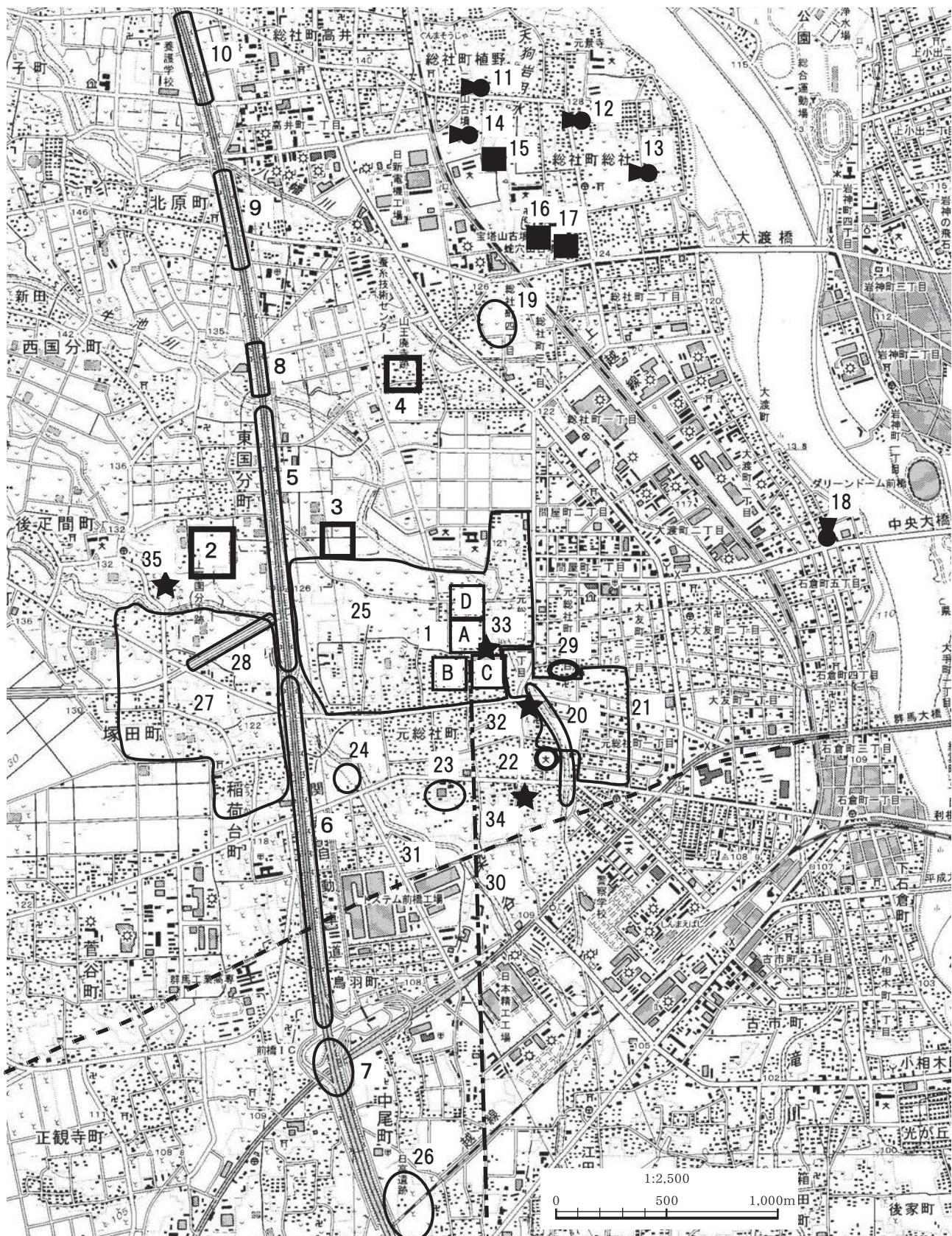
これらの集落を支配した豪族のものと考えられる古墳として、総社古墳群が挙げられる。総社古墳群を構成する主な古墳としては、推定される築造年代の古い順から、大型の前方後円墳である遠見山古墳、川原石を用いた積石塚で、上野国地域でも導入期の横穴式石室をもつ王山古墳、前方部と後円部にそれぞれ横穴式石室が築造されている前方後円墳の総社二子山古墳、横穴式石室と家形石棺をもつ方墳の愛宕山古墳、上野国地域における古墳の終末期に位置づけられている方墳の宝塔山古墳と蛇穴山古墳が存在する。

また、宝塔山古墳の南西約500mには山王廃寺が存在する。山王廃寺については、平成18年度からの5ヵ年計画で実施した範囲内容確認調査の結果、約80m四方を回廊で囲み、講堂・金堂・塔が法起寺様式の伽藍配置であることが判明した。山王廃寺の特徴である石製の塔心礎や石製鷲尾、根巻石等は、宝塔山古墳の石棺や、蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術を駆使して加工されており、このことから、この寺院を建立した氏族と宝塔山古墳・蛇穴山古墳の被葬者は同一の氏族と考えられている。

また、山王廃寺の下層には北西に主軸をもつ基壇建物や掘立柱建物跡が検出されているが、これらの建物群についての評価は「車評家」等諸説あるが、寺院の変遷を考える上で重要なものとなっている。

奈良・平安時代になると、上野国分僧寺、上野国分尼寺が建立されるなど、本地域は古代の政治・経済・文化的中心地としての様相を呈する。大正15年に国指定史跡となった上野国分僧寺は昭和55年から本格的な調査を実施し、主要伽藍の礎石、築垣、堀等が確認された。また上野国分尼寺は、昭和44・45年の調査で伽藍配置が推定できるようになり、さらに平成12年に実施された寺域確認調査によって東南隅と南西隅の築垣とそれに平行する溝跡や道路状遺構が確認された。上野国分僧寺、上野国分尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴い発掘調査、上野国分僧寺、尼寺中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘立柱建物群が検出されている。

II 遺跡の位置と環境



1. 上野国府国序推定地
2. 上野国分僧寺
3. 上野国分尼寺
4. 山王廃寺
5. 上野国分僧寺・尼寺中間
6. 鳥羽遺跡
7. 中尾遺跡
8. 国分境遺跡
9. 北原遺跡
10. 下東西遺跡
11. 稲荷山古墳
12. 大隧道山古墳
13. 遠見山古墳
14. 総社二子山古墳
15. 愛宕山古墳
16. 宝塔山古墳
17. 蛇穴山古墳
18. 王山古墳
19. 大屋敷遺跡
20. 元総社寺田遺跡
21. 元総社明神遺跡
22. 元総社小校庭遺跡
23. 天神II遺跡
24. 弥勒II遺跡
25. 元総社蒼海遺跡群
26. 日高遺跡
27. 国府南部遺跡群
28. 元総社西川・塙田中原遺跡
29. 上野国府調査地点(昭和42年)
30. 通称「日高道」
31. 推定東山道駅路國府ルート
32. 総社神社
33. 宮鍋神社
34. 釈迦尊寺
35. 妙見寺

Fig. 2 周辺遺跡

なお、元総社地域には総社神社が鎮座するほか、上野国府の存在が推定されているが、掘立柱建物跡が元総社蒼海遺跡群、元総社小校庭遺跡で確認されている。これらの建物の性格については不明であるが、元総社町周辺で掘立柱建物が確認された事例が現在少ないとから、特筆される遺構である。また、国府推定域でも西に位置する鳥羽遺跡では、神社遺構とされる周囲に方形の溝をもつ掘立柱建物が存在するほか、大規模な工房跡も確認されている。また、牛池川沿いの元総社明神遺跡VIIIと元総社寺田遺跡IIIでは、それぞれ人形が出土しているほか、元総社寺田遺跡IIIでは「国厨」や「曹司」などの国府関連施設名が墨書きされた須恵器が出土している。その他に国府域の区画溝と考えられているものとして大溝がある。この遺構は閑泉樋遺跡・元総社明神遺跡・元総社蒼海遺跡群等で確認されており、上野国府等範囲内容確認調査の平成23年度調査（1次）でも確認されている。これらの大溝は覆土上部に浅間B軽石が堆積するという時期的な特徴をもち、規模も同様であることや、確認された地点が連続する地点もあることから、一連のものと考えられる大溝も存在する。その他に国府域を推定する上では、天神遺跡・弥勒遺跡・元総社蒼海遺跡群の西寄りの調査地点との染谷川周辺では綠釉陶器が多数出土するほか、銅椀等の遺物が出土する傾向が強いことが指摘されており、こうした点から国府に関連した何らかの施設の存在がうかがえる。また元総社町周辺では至るところで奈良・平安時代の集落が検出されているが、これら集落から「大館」の墨書き土器など特殊な遺物も少なからず出土している。

高崎市内の調査等により、元総社町の南部にN-64°-E方向の東山道駿路国府ルートが存在したことが推定されている。その他に存在が推定される通称「日高道」は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を北方へ延長したもので、これらは当時の交通網を物語る重要な遺構である。

中世以後 中世、元総社には蒼海城が築城され、総社長尾氏の居城となっていた。また元総社を中心としたこの付近一帯は奈良・平安時代から引き続いて上野国の府中として栄える。蒼海城の築城年代については、伝承では鎌倉時代に千葉上総介常胤により築かれたとされているが詳しいことは分かっていない。ただし、何らかの城郭的なものは存在していたと考えられており、室町時代の永享元年（1429）に長尾景行が城の修築を行っている。蒼海城の特徴は、館のような方形の曲輪が碁盤の目のように配置されている点である、これらの曲輪は「〇〇屋敷」という名称で呼ばれている。なお、蒼海城は、江戸時代に秋元氏が現在の総社の地に総社城を築城して城下町等を移転させたことにより、完全に廃城となったと考えられる。蒼海城は、元総社町蒼海地区の区画整理事業に伴う発掘調査で、堀跡や掘立柱建物跡・井戸が検出されているほか、青白磁梅瓶や青磁・白磁片、穀物臼や茶臼などの石製品などが出土している。

その他に、上野国分僧寺、尼寺中間地域では寺院跡や土壙墓が検出されている。元総社蒼海遺跡群（5）でも土壙墓がまとまって検出されており、蒼海城の周囲に寺院や墓地が営まれていたと推定される。

III 調査方法と経過

1 調査方法

上野国府の範囲内容確認調査にあたり、国庁の推定地として4案を提示し、平成23年度はそのうちのA案の範囲内において、平成24年度はC案の範囲内と総社神社西方付近において調査を行った。平成25年度は、国庁推定地4案の範囲外である総社神社・元総社小学校における国府関連施設の確認調査のほか、国府域を推定するまでの参考とするため、区画溝と東山道駅路国府ルートの確認をそれぞれ行った。平成26年度は前年度調査の延長として、区画溝の確認調査と、国庁推定地C案周辺、元総社小学校およびその周辺において国府関連施設の確認調査を実施した。本年度は範囲内容確認調査を実施した。なお、本年度の総調査面積は668m²である（Tab. 1）。

調査は「上野国府等範囲内容確認調査基準」に基づいて行った。以下に調査方法について要点を記す。

グリッド設定 (Fig. 3) 調査区のグリッド設定は以下のとおりである。①単位は4 m四方とする。②国家座標第IX系（日本測地系）を用い、X=+44000、Y=-77200を基点(X 0、Y 0)とする。^{※註(1)} ③西から東へ4 mごとにXの数値が増大し(X157、X158、X159……)、北から南へ4 mごとにYの数値が増大する(Y44、Y45、Y46……)。④各グリッドの呼称基点は北西杭とする。

なお、このグリッド設定は、区画整理に伴い継続的に調査が行われている元総社蒼海遺跡群のグリッド設定と共通するものである。

トレンチ設定 各トレンチの設定幅については、これまで掘立柱建物の柱穴間隔を考慮して原則3 mとしていたが、平成24年度の調査から4 m幅へと拡大した。トレンチ名は、原則として調査順に数字で呼称することとし、23年度からの通し番号とした。

遺構の確認 遺構確認については、基本層序I層およびII層直下で行い、その後、上野国府の遺構面が存在するIII層(Hr-FP・As-C混土層)を細分しながら確認することとした。遺構の確認にあたって、必要な場合はサブトレンチを設定することにし、サブトレンチの規模は遺構保護のため必要最小限とした。

測量 遺構平面図については縮尺1/20を原則とし、必要に応じて1/10～1/50の縮尺を適宜使用することとした。また、土層図についても縮尺1/20とし、遺構毎の図面とは別に、グリッド杭のあるトレンチ壁面すべて作成することとした。

出土遺物の取り上げ 遺構毎を原則とし、遺構に属さない遺物は4 mグリッド単位で記録を作成し取り上げることとした。なお、状況に応じて4 mグリッドをFig. 3のように4分割し、2 mの小グリッド一括で取り上げた遺物もある。小グリッドの呼称は、北西から反時計回りでA～Dとした。なお現位置を保つ礎石等、施設を構成する遺物については、原則として現状保存することとした。

Tab. 1 各トレンチの面積と調査目的

トレンチ	調査面積(m ²)	主な調査目的
35	19	掘込地業建物の精査
36	128	国府関連施設の確認(C案)
37	96	国府関連施設の確認(C案)
38	82	国府関連施設の確認(C案)
39	1	掘込地業建物の範囲確認
40	4	区画溝の範囲確認
41	190	国府関連施設の確認(元小周辺)
42	80	国府関連施設の確認(元小周辺)
43	30	国府関連施設の確認(元小周辺)
44	38	国府関連施設の確認(元小周辺)
計	668	

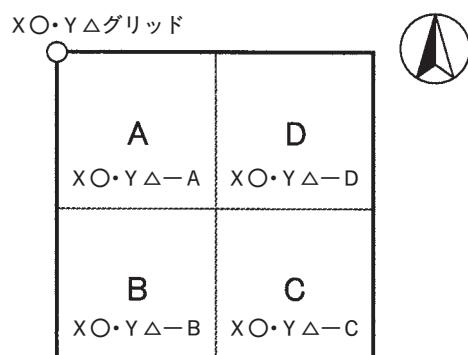


Fig. 3 2 m小グリッドの呼称

写真撮影 遺構の写真撮影については、35mmフィルム（モノクロ、カラーリバーサル）およびデジタルデータを常時使用した。また、必要に応じて6×9サイズフィルムを使用した。空中写真撮影にはデジタルカメラを使用した。

埋め戻し 調査終了後は、今後の調査と区別できるように石灰を散布してから埋め戻しをおこなった。また、掘立柱建物跡や掘込地業をもつ建物跡については、ゴンベ砂を撒いて遺構を保存した上で埋め戻しを行った。

註

(1) 平成23年度調査から平成26年度調査までの報告で、グリッドの基点については「国家座標第IX系（旧日本測地系）を用い、X=+44.800、Y=-77.200を基点（X 0、Y 0）とする。」と記載されているが、上野国府等範囲内容確認調査のグリッドについては、上記のとおり元総社蒼海遺跡群と共通であることから、本文中の基点が正しい。なお、過年度の報告中の基点の表記は誤っているが、現場での座標自体は元総社蒼海遺跡群と共通したものとなっているため、基本的には修正の必要はないと考える。

2 調査経過

平成27年度の発掘調査は5月25日から開始し、12月22日に終了した。調査経過は、以下のとおりである。

5月25日に38トレンチを設定し、26日に掘削した。38トレンチは掘削深度を浅めにしたことと、遺構が複数重複して検出されたことから調査に時間を要した。38トレンチ調査終了間際の7月9日に、36トレンチの設定を行い、13日に36トレンチの掘削と38トレンチの埋め戻しを行った。

7月下旬から8月下旬にかけての小学校の夏休みの期間に元総社小学校校庭の調査を実施する必要があるため、それまでに調査終了とならなかった36トレンチは一度十分に養生して中断し、元総社小学校校庭の41・42トレンチの調査を実施した。7月24日に41・42トレンチの設定を行い、27日に42トレンチを掘削した。42トレンチの調査は作業がお盆休みとなる直前の8月7日に埋め戻し、41トレンチはその前日の6日に掘削してお盆の完全休校期間に備えて十分に養生した。完全休校期間明けの17日に作業を再開し、41トレンチを調査した。

41トレンチでは元総社小学校校庭遺跡の1号掘立柱建物跡が再確認され、その成果を一般に公開するため22日に現地説明会を実施した。当日は約200名の見学者が会場を訪れた。元総社小学校の2学期開始の日も、始業式終了後に5・6年生を対象とした説明会を開催した。その後の8月30日に埋め戻しを行ったが、平成27年は秋雨が8月下旬から降る日が多くなり、雨天により埋め戻しや校庭の本復旧がなかなか進まず9月5日に完全に終了した。なお、埋め戻しに際しては遺構保護および調査箇所の明示のためにゴンベ砂を充填してから埋め戻した。

元総社小学校における調査の終了後、中断していた36トレンチの調査を再開し、9月18日、36トレンチの埋め戻しと37トレンチの掘削を行なった。37トレンチでは、隣接する11トレンチ（平成24年度調査）で検出された1号溝跡の続きを検出された。この溝については、11トレンチ調査時点では中世と判断さ

Tab. 2 調査経過表

現地説明会	トレンチ名称									
	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
5月										
6月										
7月				★						
8月										
9月										
10月		★								
11月										
12月										

★ 表土掘削 ● トレンチ拡張

□ グリッド設定・遺構確認・遺構掘下げ
▨ 写真撮影・図面作成

れたが、37トレンチでの再調査により古代の溝であることが判明した。37トレンチは調査終了後の10月9日に埋め戻した。

37トレンチの調査が終盤を迎えた時点で、35・39・40トレンチの調査を実施した。40トレンチは、10月5日に設定し翌6日に掘削を開始した。この地点は搅乱をかなり受けていたが、溝の存在が想定された地点で、予想どおり溝跡を検出できた。その後精査と記録を行ない、13日に埋め戻した。また39トレンチについても、10月5日に設定し、40トレンチの調査が終了した10月13日に掘削を開始した。ここでは土層の観察を中心に作業を行ったが、版築と考えられる状態は検出されなかったため、記録の後、16日に埋め戻した。35トレンチについても、40トレンチの調査が終了した10月13日に設定し、同日掘削を開始した。調査の結果、平成26年度に調査した掘込地業の未調査部分が比較的良好な保存状態で検出された。精査のためにトレンチ南側を少々拡張しながら調査を進め、記録の後、10月28日に埋め戻した。

その後、数日間の遺物整理を挟んで43・44トレンチの調査を実施した。43トレンチは10月30日に設定し、11月4日に掘削を開始した。43トレンチは小規模な溝とピット中心であったため短期間で精査・記録ともに終了した。その埋め戻しは11月12日に44トレンチの掘削終了後実施した。44トレンチは遺構確認が困難で、遺構確認面を下げながら確認を行った。その結果、土坑、ピット、落ち込みの他に掘立柱建物の柱穴と考えられる遺構が検出された。そのため、その他の柱穴の検出を目的として、トレンチの西と東に柱穴確認のための拡張区を設定して掘り下げた。東側の拡張区では柱穴が検出され、西側の拡張区では中世の溝が検出された。この溝の走行を確認するために、トレンチの北側にも拡張区を設定して掘り下げたところ、溝の延長が確認できた。44トレンチは掘立柱建物や柱穴が検出されたことから、埋め戻しの際にはゴンベ砂で柱穴等の遺構を保護および調査区を明示した後に埋め戻しを行った。埋め戻しは12月22日に実施し、これで本年度の調査は終了した。

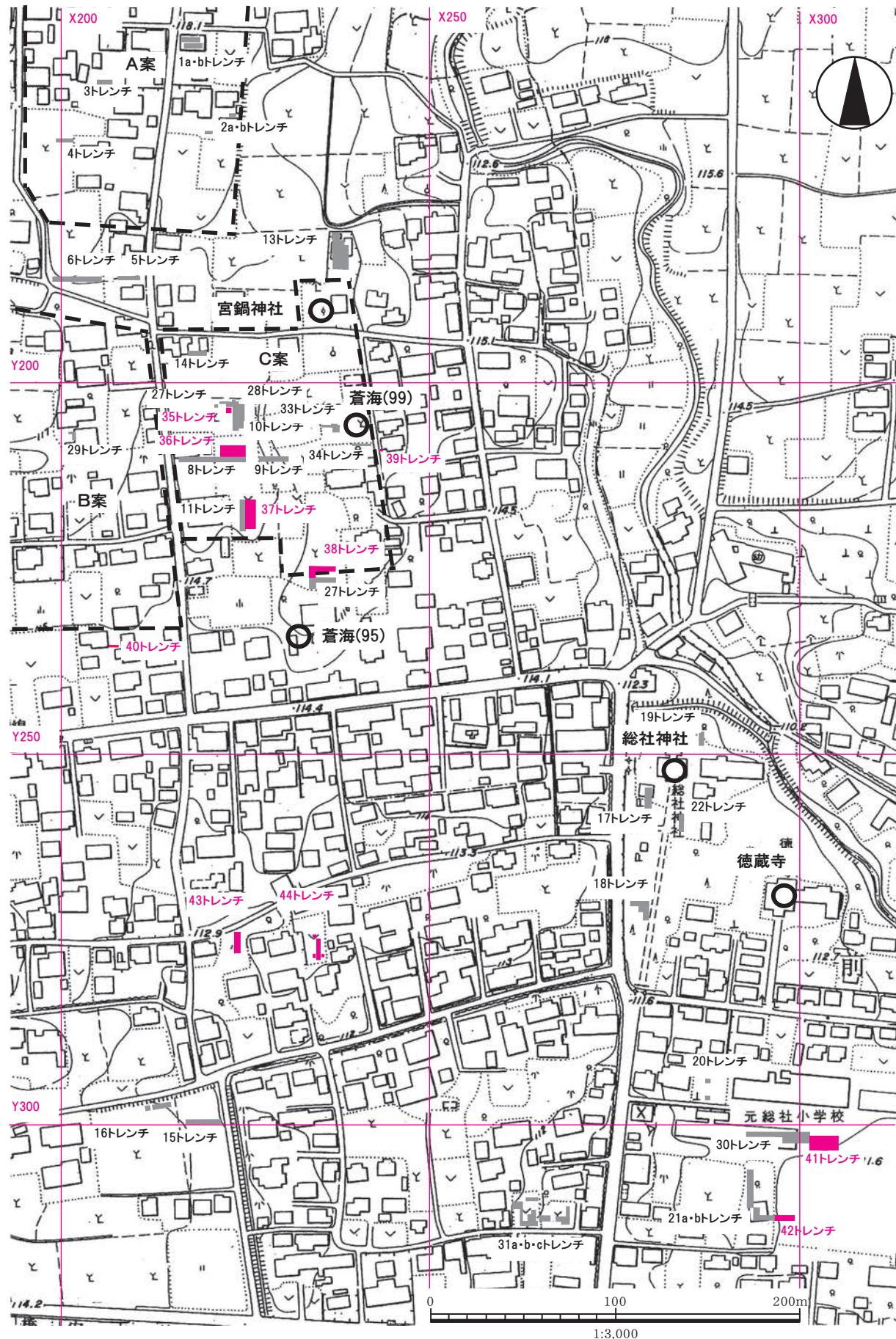


Fig. 4 グリット設定図と平成27年度調査区

IV 基本層序

(1) 国庁推定地B案およびC案周辺

40トレンチは国庁推定地ではB案の南端付近に位置している。国庁推定地B案付近は広範囲に亘って土取りが行われており、表土の下層が地山のVI砂層となっている。40トレンチにおいても同様の状態であった。

35・36・37・38・39トレンチは国庁推定地C案に位置している。国庁推定地C案についても、B案と同様に広範囲に亘って土取りが行われており、36・37トレンチは表土の下層がVI層となっている。35トレンチについては、平成26年度に調査した28トレンチに隣接しており土層の堆積状態も同様で、表土中に浅間B軽石混入土が混ざった状態で存在し、その下層にIII層およびIV層が確認できた。地元の方の証言では、かつて28・35トレンチの位置は桑園であったとのことで、かつて宅地でだった36・37トレンチの土層堆積の状態が良くないことと比較して考えると、こうした土層の残存状態の差は、地目によるところもあるのかもしれない。38・39トレンチについては表土の下層はIV層となっているが、大きく土取りされることなく土層も比較的良好な状態であった。

(2) 元総社小学校校庭

元総社小学校の校庭については、過年度調査の状況も含めると、校庭の一番西に位置する地点では、表土の下位でIV層が確認でき、途中攪乱を挟む為に不明瞭な部分もあるが、校庭の中央やや西付近から表土の下層はV層およびVI層となっていた。41トレンチは、校庭における調査で一番東に位置することとなるが、状況としては表土の下層でV層およびVI層となっていた状況は変わらない。また、本年度は校庭の南（42トレンチ）でも調査を実施したが、そこでは厚く堆積する表土の下層でIV層が確認できた。現在の地形を観察しても、校庭の西では、西に向かって緩く傾斜していることや、学校の敷地の南は現状よりもかなり南に向かって傾斜していたという地元の方の証言から、元総社小学校の校庭は台地の南端部付近に位置し、校庭の中央北付近が台地の頂上付近で、同じく西および南は台地の斜面にあたることが考えられる。

(3) 総社神社西側周辺

総社神社の西に位置する43・44トレンチについては、表土の下層に少なくともIV層は確認されている。なお、44トレンチについては、表土の下層が奈良・平安時代の遺物包含層及び遺構の覆土であった。このトレンチでは古代の段階で土取り（粘質化したV層を採掘か？）を行っている。

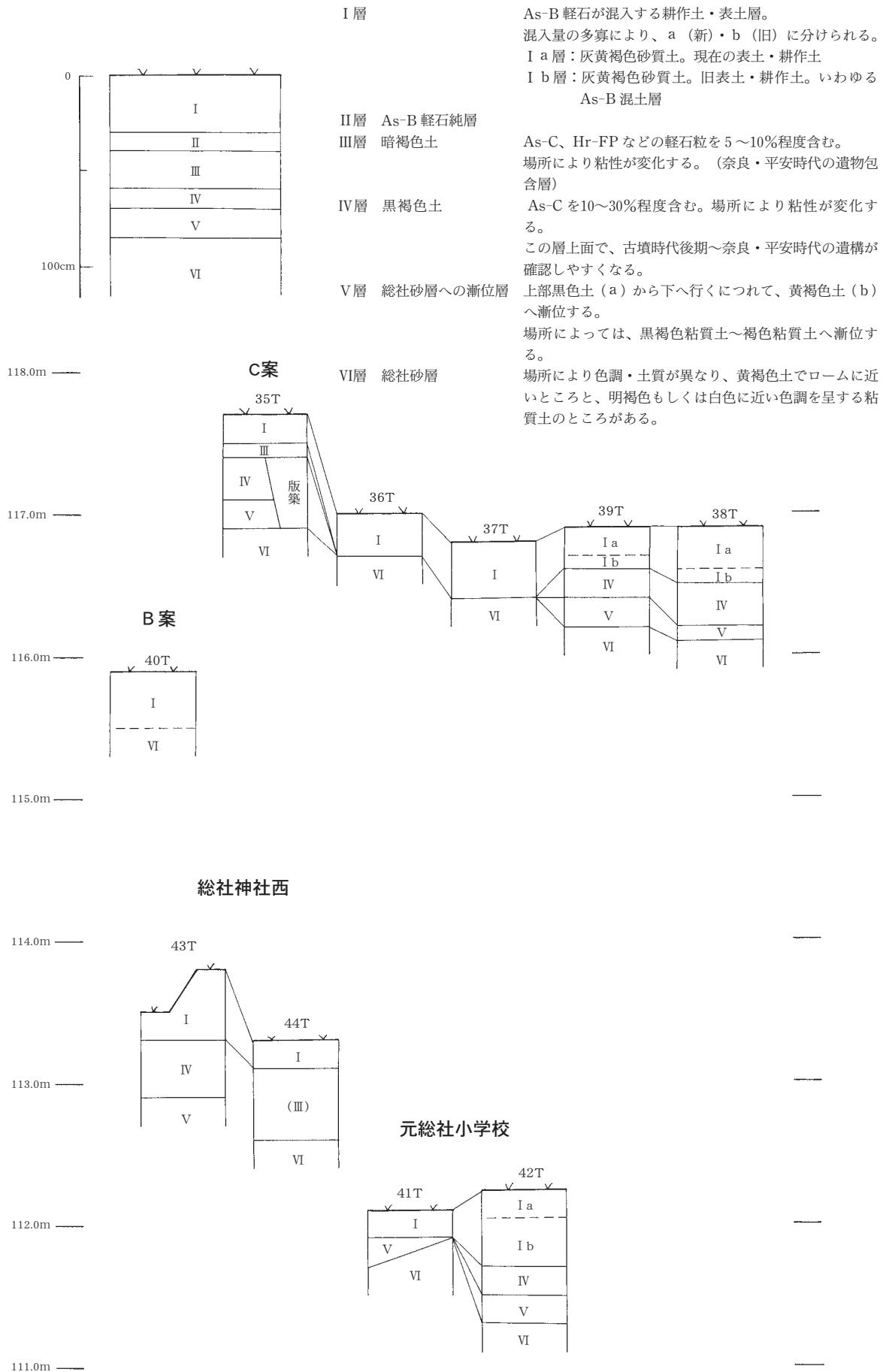


Fig. 5 基本層序模式図と各トレンチ土層柱状図

V 遺構と遺物

1 各トレンチの概要

平成26年度調査にあたり、国府関連施設および区画溝の解明について有益な情報が得られると思われる調査候補地のうち、調査可能な10ヶ所にトレンチを設定した。以下に調査目的別に各トレンチの概要を記す。

(1) 国庁推定地C案周辺の範囲内容確認調査

国庁推定地C案周辺では平成26年度に実施した発掘調査したで、建物跡や区画溝など、官衙との関連が推定される遺構および遺物の出土が相次いだ。上野国府等範囲内容確認調査においても、28トレンチにおいて掘込地業をもつ建物跡が検出された。これらの結果から、国庁推定地C案周辺において官衙関連遺構の存在が推定されることから、範囲内容確認調査を実施することとなった。

また、28トレンチで検出された掘込地業をもつ建物跡についても、平成26年度の調査成果の再検証のために、未調査のままである南辺の調査を行うこととした。

35トレンチ (Fig. 6、PL. 1)

35トレンチは、東西方向に長さ4m、幅3mの規模に設定し、調査の進展とともに南へ拡張した。本トレンチを設定した地点は、平成26年度実施の28トレンチを調査した際に検出された建物跡の南辺付近に当たる。調査の結果、想定した位置で建物跡の掘込地業が検出された他、古代の住居跡1軒、古代の溝1条、中世の堅穴状遺構1基、土坑1基、ピット17基が検出された。

36トレンチ (Fig. 6、PL. 1)

36トレンチは、35トレンチの南側、平成24年度に上野国府等範囲内容確認調査を実施した8トレンチの北側に隣接して東西方向に長さ16m、幅8mの規模に設定した。本トレンチは、28トレンチおよび35トレンチで調査した建物と同様の建物が、複数軒、規則的に配されて建てられているか確認することを目的としている。

調査の結果、古代の住居跡3軒、古代の落ち込み1ヶ所、中世の溝1条、土坑5基、井戸1基が検出された。なお、柱穴や掘込地業等の建物跡は検出されなかった。

37トレンチ (Fig. 6、PL. 2)

37トレンチは、36トレンチより元総社蒼海遺跡群(45)の調査区を挟んだ南に位置し、平成24年度に上野国府等範囲内容確認調査を実施した11トレンチの東側に隣接して南北方向に長さ16m、幅6mの規模に設定した。このトレンチについても、36トレンチと同じ目的で調査を実施している。

調査の結果、古代の住居跡3軒、古代の溝1条、近世以後の土坑4基、同じく井戸1基、ピット8基、時期不明の堅穴状遺構1基が検出された。なお、このトレンチにおいても36トレンチと同様に、柱穴や掘込地業等の建物跡は検出されなかった。

38トレンチ (Fig. 6、PL. 3)

38トレンチは、平成26年度に上野国府等範囲内容確認調査を実施した27トレンチの北側に隣接しており、全体は東西方向に長く規模は16mで、西端はL字に南へ4m曲がっている。

付近は前述のとおり平成26年度上野国府等範囲内容確認調査で調査を実施している(27トレンチ)が、トレンチの位置と中世の溝が重なっていたために中世以前の情報が希薄であったことや、その南側で平成26年度に調査した元総社蒼海遺跡群(95)で古代の掘立柱建物2棟、古代の区画溝が3条検出されるなど、付近に古代の遺構が分布している可能性が高いことから、確認調査を行うためトレンチを設定した。

調査の結果、古代の住居跡7軒、古代の掘立柱建物1棟、古代の溝3条、中世の溝1条、中世の掘立柱建物1

棟、土坑3基、ピット12基が検出された。

39トレンチ (Fig. 7、PL. 8)

39トレンチは、平成26年度に掘込地業建物が検出された元総社蒼海遺跡群（99）の南東付近に位置する。このトレンチは上記の建物の掘込地業の範囲を調査するために設定された1m四方のテストピットである。

調査の結果、掘込地業は検出されず、ピットが6基検出された程度に留まった。

(2) 元総社小学校周辺における国府関連施設の確認調査

元総社小学校の校庭における調査は、昭和36年から41年にかけての群馬大学の調査（元総社小校庭遺跡）以降では、平成25年度から前橋市教育委員会で実施している。群馬大学の調査では掘立柱建物跡2棟が検出され（松島 1989）、前橋市教育委員会実施の上野国府等範囲内容確認調査では、古代の溝2条と建物跡1棟が検出されている（前橋市教育委員会 2015・2016）。元総社小校庭遺跡の調査で検出された掘立柱建物の位置については、現状では推測の域を出ない部分もあったが、平成26年度に実施した上野国府等範囲内容確認調査で群馬大学が調査した際のトレンチの一部が検出されたことや、そのトレンチを基に群馬大学の調査区の平面図をあわせたところ、机上で推定される掘立柱建物跡の位置が、証言で得られていた位置と一致したことから、推定される地点に掘立柱建物が存在する可能性が高まった。このことから、掘立柱建物跡の位置確認のため再度調査をすることとした。この調査を実施したのが41トレンチである。また、平成26年度調査で南北方向に走る古代の溝が検出されたが、その溝の範囲確認を目的として校庭の一番南で調査を実施した。このトレンチは42トレンチである。

さらに平成26年に実施した上野国府等範囲内容確認調査で、元総社小学校の西に位置する31トレンチで、東西方向の区画溝が検出された。これ以外にも官衙関連遺構の分布を確認するために県道足門・前橋線よりも南、総社神社・元総社小学校よりも西の範囲でトレンチを設定して調査した。このトレンチは43・44トレンチである。

41トレンチ (Fig. 8、PL. 9、巻頭図版1)

41トレンチは平成26年度調査の31トレンチの東に隣接し、規模は東西20m、南北9mの長方形で、南側に2ヶ所、西側と東側に1ヶ所ずつ、柱穴の検出を目的としてトレンチを拡張して調査を行った。

調査の結果、群馬大学の調査トレンチとあわせて元総社小学校校庭遺跡の1号掘立柱建物跡が検出されたほか、同遺跡の調査で発掘済みの古代の住居跡が3軒、ピット2基が検出された。なお、4ヶ所の拡張部のうち、東側の拡張部では新たに柱穴が検出された。群馬大学の調査トレンチは、埋め戻しの際に川砂を充填してから元の土で埋め戻していることから、再調査は比較的容易であった。

42トレンチ (Fig. 7、PL.12)

42トレンチは、平成25年度調査の21bトレンチの東に隣接し、規模は長さ20m、幅4mの東西方向のトレンチである。

調査の結果、平成25年度調査31トレンチで検出された古代の溝跡は検出されなかった。主な遺構は、古代の住居跡2軒、古代の井戸2基、中世の井戸1基、近世以後の溝1条、土坑4基、ピット10基、落ち込み1ヶ所が検出された。

43トレンチ (Fig. 7、PL.13)

43トレンチは総社神社から西へ約200mの地点に位置する。南北方向に長さ10m、幅3mの規模に設定した。調査の結果、中世の溝2条、土坑2基、ピット31基が検出された。また、トレンチを設定した場所には土壘状の高まりが存在する所以トレンチで断ち割るように調査したところ、土の堆積状況から、この高まりは土壘の可能性が高いと考えられる。

44トレンチ (Fig. 7、PL.14)

44トレンチは、43トレンチの約50m東の地点に位置する。南北方向に長さ14m、幅2mの規模で設定し、調査

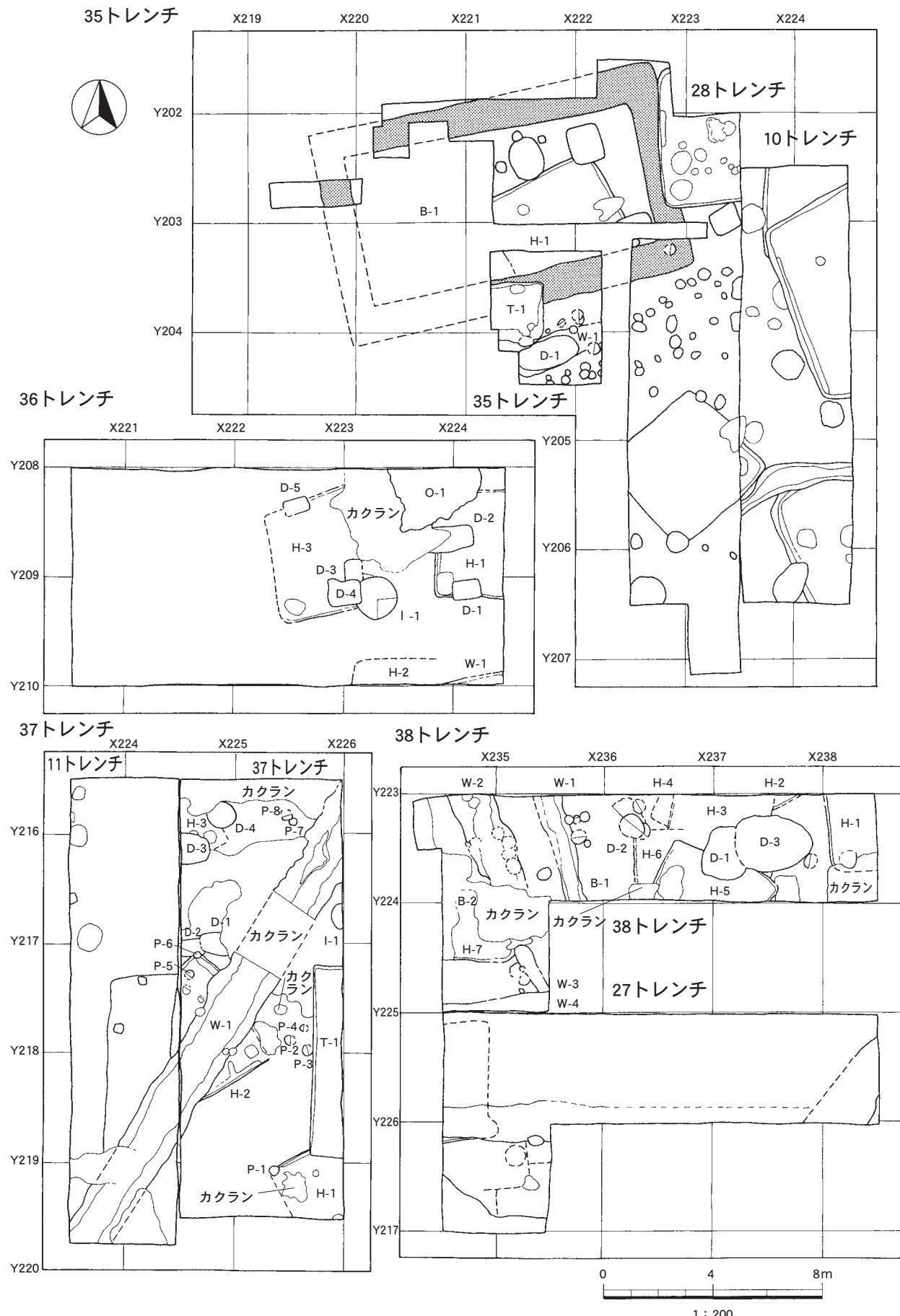
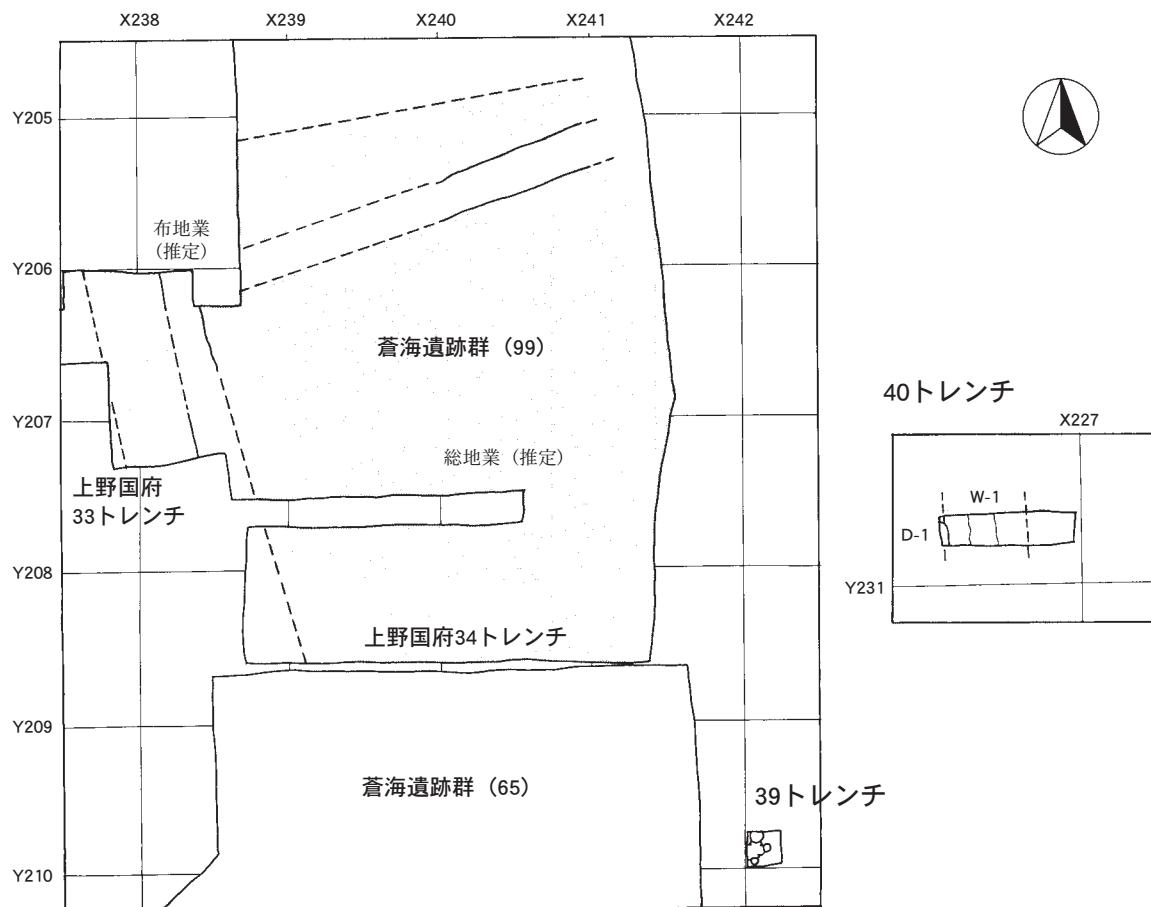


Fig. 6 トレンチ全体図(1)

39トレンチ



40トレンチ

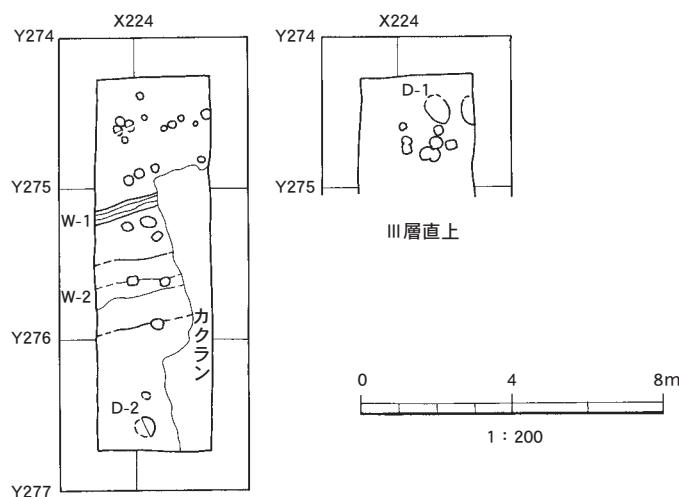
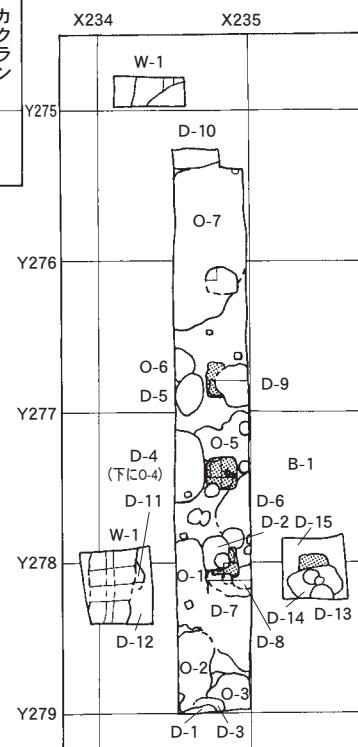
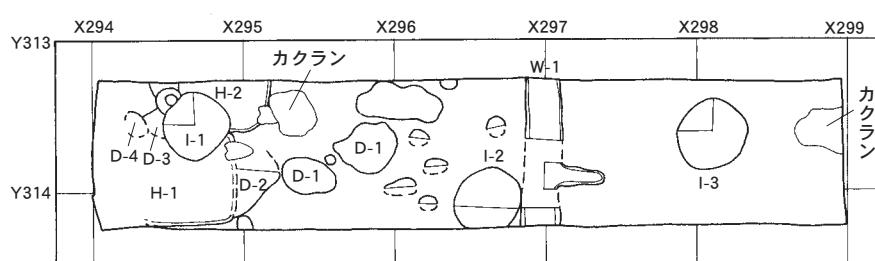
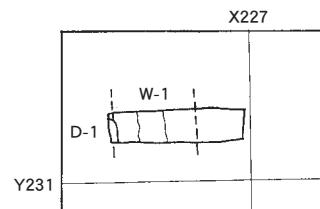


Fig. 7 トレンチ全体図(2)

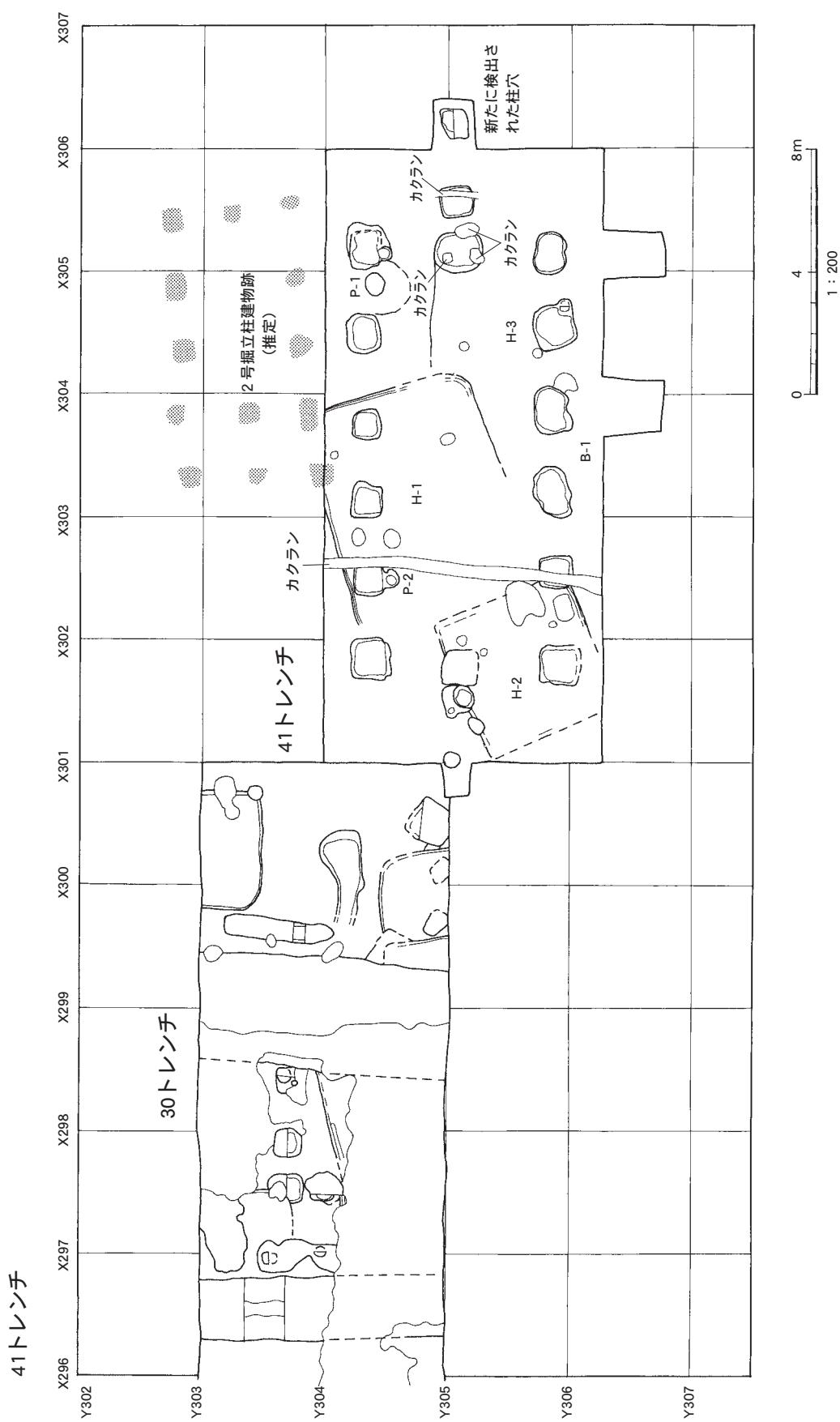


Fig. 8 トレンチ全体図(3)

の進捗にあわせてトレンチから約1m離れた西側に一辺2mの正方形、同じく東に一辺1.5mの正方形にそれぞれ柱穴の有無を確認するための拡張区を設けて掘り下げた。また、西側拡張区で検出された溝の走行を確認するために、トレンチの北西に東西方向に長さ2m、幅1mの拡張区を設けて掘り下げた。これらの調査の結果、古代の掘立柱建物1棟、中世の溝1条、土坑15基、ピット19基、落ち込み7ヶ所が検出された。

(3) 区画溝の範囲内容確認調査

上野国府を解明する上で重要な要素である区画溝の範囲内容確認調査は、平成25年度調査以降、重点的に実施している。その中で、国府推定地A案の西側を、ほぼ南北方向に走る大溝が、元総社蒼海遺跡群と上野国府範囲内容確認調査で検出されている。昨年度実施した上野国府範囲内容確認調査29トレンチの調査結果から、これらの地点で検出されている古代の大溝が連続している可能性が非常に高くなった。そうした成果が得られた中で、この溝がどこまで続くのかということと、どのような目的で掘削されたのかということが、新たな問題点として浮上した。この問題点を解決する上で、まずはどこまで溝が続くのであろうかという範囲確認の意味で、南側への延長を想定し、確認調査が可能な地点でトレンチを設定し調査することとした。そこで設定されたのが40トレンチである。

40トレンチ (Fig. 7、PL. 8)

40トレンチの規模は長さ4m、幅1mで、東西方向のトレンチである。トレンチの位置する付近には人家が存在したため、攪乱の影響をかなり受けているが、遺構を検出することができた。

調査の結果、溝状の掘り込み1条と土坑1基が検出された。この溝状の掘り込みは、上野国府範囲内容確認調査6トレンチ、同29トレンチ、元総社蒼海遺跡群(14)5トレンチ、同(23)、同(21)で検出されているほぼ南北の走行をもつ大溝の一部と推定される。なお、40トレンチの位置は、これまで溝が検出された地点で最南端であった元総社蒼海遺跡群(21)よりも、約40m南に位置する。

2 各トレンチの検出遺構

35トレンチ

(1) 住居跡

1号住居跡 (Fig. 9)

位置 X221・222、Y203グリッド。 主軸方向 N-63°-E。 形状等 方形。東西(3.02)m、南北(1.88)m。壁高(21.0)cm。 面積 (3.4)m²。 床面 総社砂層への漸移層へ造られた地山床。 重複関係 1号建物跡、1号竪穴状遺構と重複する。本遺構が一番古い。 出土遺物 土師器(甕)破片、須恵器小片、竈の支柱と考えられる棒状の礫が出土。 時期 6世紀後半と推定される。 その他 検出された位置から、28トレンチの1号住居跡と同一の住居跡と考えられる。

(2) 建物跡

1号建物跡 (Fig. 9、PL. 1)

位置 X221・222、Y203グリッド。 形状等 本トレンチで検出されたのは、28トレンチで検出された1号建物跡の掘込地業の一部。長方形の枠形に廻る掘込地業の南辺の一部にあたる。調査した掘込地業の範囲の長さは、約4.5m、最大幅(1.20)m、地表面からの掘り込みの深さ85.5cm。 掘込地業 断面は逆台形で、昨年度に調査した各辺の状態と共通する。ただし、底面は多少の凹凸が見られた。今回の調査でも、柱穴や根石等の礎石の据えた痕跡は確認できなかった。掘込地業の土層については、最下層が総社砂層土ブロックを多量に含む暗褐色土、その上位に黒色土、さらにその上位に暗褐色土層と黒褐色土層の互層となっていたが、一定の長さで間仕切

り的に途切れることなく続いていた。 **重複関係** 1号住居跡(28トレンチ1号住居跡と同一)、1号竪穴状遺構と重複する。1号住居は本遺構よりも古く、1号竪穴状遺構は本遺構よりも新しい。なお、1号住居跡との新旧関係については28トレンチの調査結果ど同様であると同時に、本トレンチの調査により明確にすることができた。

出土遺物 掘込地業内から6世紀後半頃の土師器破片が出土している。また、その直上層付近から10世紀代と推定される土師質の土器片が出土している。

(3) 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構 (Fig.10、PL. 1)

位置 X221、Y203・204グリッド。 **主軸方向** ほぼ正方位を向く。 **形状等** 方形であるが、南壁は階段状となっている。東西(2.00)m、南北2.15mで階段状の施設を含めると2.20m。壁高(20.5)cm。 **面積** (3.9)m²。
ピット等 2基のピットが検出された。規模等については、計測表 (Tab. 3) に記載した。 **重複関係** 1号住居跡、1号建物跡と重複する。本遺構が一番新しい。

出土遺物 土師器(壺・甕)破片、須恵器(蓋)破片、陶器破片、緑泥片岩小片が出土。

時期 中世と推定される。

(4) 溝跡

1号溝跡 (Fig. 9)

位置 X221・222、Y203・204グリッド。 **主軸方向** N-73°-E。 **形状等** 長さ(0.50)m、最大上幅(0.70)m。
重複関係 1号土坑、13号ピットと重複する。本遺構が一番古い。

出土遺物 土師器(壺・甕)、須恵器(甕)破片。

時期 出土遺物から7世紀後半と推定される。

(5) 土坑・ピット

土坑が1基、ピットが17基検出された (Fig.10、PL. 1)。各遺構の規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。

36トレンチ

(1) 住居跡

1号住居跡 (Fig.10、PL. 1)

位置 X223・224、Y208・209グリッド。 **主軸方向** N-2°-E。 **形状等** 方形。東西(2.55)m、南北(4.00)m。壁高(14.5)cm。 **面積** (9.8)m²。
床面 総社砂層の地山床。堅緻面が遺構面のほぼ全面で検出された。

ピット等 貯蔵穴状のピットが住居プランの南西隅で1基検出された。規模については計測表 (Tab. 3) に記載した。その他に、西壁で周溝が検出された。周溝の規模は上幅10cm、下幅5cm、深さ4cm。

竪 調査地内では検出されていない。東壁に構築されていると推定されるが調査区外のため不明。

重複関係 2・3号土坑、1号落ち込みと重複する。2・3号土坑よりも本遺構が古い。1号落ち込みについても本遺構が古いと考えられる。

出土遺物 土師器(壺・長胴甕)破片、須恵器(甕)破片、酸化焰焼成須恵器(椀)破片、瓦片。

時期 10世紀後半と推定される。

2号住居跡 (Fig.11、PL. 2)

位置 X223、Y209グリッド。 **主軸方向・形状等** プランが明確に確認できなかったため主軸方向や形状は不明。

床面 総社砂層への漸移層に造られ、堅緻面が調査区南壁寄りで検出された。

竪 調査地内では検出されなかった。東壁に構築されていると推定されるが不明。

重複関係 1号溝跡と重複する。本遺構が古い。

出土遺物 土師器(壺・長胴甕)破片、須恵器(甕)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、羽釜)破片、打製石斧。

その他 南に隣接する8トレンチ(平成24年度調査)の調査地内でも南半分が検出されてしかるべきであるが未検出。

時期 10世紀後半と推定される。

3号住居跡 (Fig.11、PL. 1)

位置 X222・223、Y208・209グリッド。 **主軸方向** N-8°-W。 **形状等** 西壁、北壁および東壁のほとんどを搅乱によって破壊されているが、残る南壁と検出された床面の状況から、プランは方形と推定される。東西(3.30)m、南北4.25m。壁高(11.5)cm。 **面積** (13.3)m²。 **床面** 総社砂層への漸移層に造られ、堅緻面は住居の南側を中心に検出。 **ピット等** 貯蔵穴状のピットが住居プランの南西隅で1基検出された。規模については、計測表 (Tab. 3) に記載した。 **竈** 東壁に構築されている。主軸方向はN-80°-W。3号・4号土坑および1号井戸に破壊されているが一部が残る。残存する規模で長さ62cm、幅36cm。 **重複関係** 3号・4号・5号土坑、1号井戸と重複する。本遺構が最も古い。 **出土遺物** 土師器(壺)破片、須恵器(甕、盤?)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、椀、羽釜)破片、灰釉陶器(皿)破片、石製品(碁石?、磨石状の礫)。 **時期** 10世紀後半と推定される。

(2) 溝跡

1号溝跡 (Fig.11、PL. 2)

位置 X223・224、Y209グリッド。 **主軸方向** N-76°-E。 **形状等** 断面はU字形か。上幅(43.0)cm、下幅(34.0)cm、深さ10.5cm。 **重複関係** 2号住居跡と重複する。本遺構が新しい。 **出土遺物** 土師器(壺、長胴甕)破片、酸化焰焼成須恵器(壺)破片、陶磁器破片。 **その他** 元総社蒼海遺跡群(45)検出の6号溝跡は同一の溝と考えられる。 **時期** 中世以後と推定される。

(3) 井戸、土坑、落ち込み

井戸が1基、土坑が5基、落ち込みが1ヶ所検出された(Fig.10・11)。各遺構の規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。

37トレチ

(1) 住居跡

1号住居跡 (Fig.11、PL. 2)

位置 X225、Y218・219グリッド。 **主軸方向** N-62°-E。 **形状等** 方形と推定される。東西(3.10)m、南北(2.84)m。壁高(11.5)cm。 **面積** (5.9)m²。 **床面** 総社砂層の地山床。堅緻面が一部で検出された。 **ピット等** 住居の北壁で周溝を検出。上幅16cm、下幅7cm、深さ5cm。 **竈** 調査地内では検出されていない。東壁に構築されていると推定されるが不明。 **重複関係** 1号ピットと重複する。1号ピットよりも本遺構が古い。 **出土遺物** 土師器(壺)破片、須恵器(甕)破片、菰編石。 **時期** 6世紀後半と推定される。

2号住居跡 (Fig.12、PL. 2)

位置 X224・225、Y217・218グリッド。 **主軸方向** N-57°-E。 **形状等** 方形と推定される。東西[4.76]m、南北(4.05)m。壁高(11.5)cm。 **面積** (10.9)m²。なお、本遺構は1号溝跡により2つに分断された状況を呈しているが、1号溝跡よりも北側および東壁についてはプランがはっきりとしない。 **床面** 総社砂層の地山床。顕著な堅緻面は検出できなかった。 **ピット等** 住居内で柱穴および貯蔵穴と考えられるピットが6基検出された。これらピットの規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。その他に住居の南壁で周溝および仕切溝を検出。周溝は上幅20cm、下幅10cm、深さ3cm。仕切溝は上幅18cm、下幅10cm、深さ4cm。 **竈** 東壁中央付近に構築されていたと推定されるが、1号溝跡によって破壊されているため検出できなかった。 **重複関係** 1号溝跡と重複する。本遺構が古い。 **出土遺物** 土師器(長胴甕)破片。 **その他** 南に隣接する8トレチ(平成24年度調査)の調査地内でも西半分が検出されてしかるべきであるが、未検出。 **時期** 6世紀後半と推定される。

3号住居跡 (Fig.12、PL. 2)

位置 X224・225、Y215・216グリッド。 **主軸方向・形状等** 壁が検出できなかつたため形状がはっきりと検出できなかつたが、方形と推定される。また、貯蔵穴と推定される方形のピット (P_2) の検出状態から推測すると、主軸方向はN—60°—E程度と考えられる。 **床面** 総社砂層の地山床。堅緻面が推定竈前面付近で検出された。 **ピット等** 柱穴および貯蔵穴と考えられるピットが2基検出された。これらピットの規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。 **竈** 東壁に構築されていると推定されるが、搅乱等の影響により検出できない。
重複関係 3・4号土坑と重複する。本遺構が最も古い。 **出土遺物** 土師器 (坏)。 **時期** 6世紀後半と推定される。

(2) 溝跡

1号溝跡 (Fig.12、PL. 2・3)

位置 X224・225、Y215・216・217・218グリッド。 **主軸方向** N—32°—E。 **形状等** トレンチ内で検出された長さ14.76m、最大上幅2.43m。最大下幅1.30m。最大深さ83.5cm。断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦ではあるが、およそ2m前後の間隔で深くなる部分が存在し、その部分は円形や長い楕円形を呈している。また、覆土の中位付近に硬化面が存在した。 **重複関係** 2号住居跡と重複する。本遺構が新しい。 **出土遺物** 土師器 (坏・甕) 須恵器 (甕) 破片。打製石斧破片、砥石、菰編石と推定される礫。 **その他** 上野国府9トレンチ2号溝跡および元総社蒼海遺跡群(45)の2号溝跡と同一の溝。(上野国府9トレンチ2号溝の軸方向がN—42°—Eとあるのは、32°の誤り。)なお、通水した形跡は確認できなかつた。また、覆土中位付近に硬化面が存在する。 **時期** 重複関係、覆土の状況および出土遺物から古代と推定される。時期を特定できる根拠が少ないが、遺構の重複関係や覆土から出土した遺物から早くとも6世紀末には掘削され、7世紀後半までには廃絶していたと推定される。

(3) 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構 (Fig.12、PL. 2)

位置 X225、Y217・218グリッド。 **主軸方向** N—1°—E。 **形状等** 西壁および北・南壁の一部を検出したのみであるが、南北方向に長軸をとる長方形を呈すると推定される。なお、南壁はスロープ状を呈していた。東西(1.23)m。南北6.95m。壁高(34.0)cm。 **面積** (8.4)m²。 **重複関係** 1号住居跡と重複する。本遺構が新しい。 **出土遺物** 土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (甕) 破片、酸化焰焼成須恵器 (坏) の破片、軟質土器 (焰焰?) の破片、陶磁器の破片、綠泥片岩の破片などが出土。 **その他** 平成24年度に調査した11トレンチの報告中において「道路跡」としたものに平面形状等が酷似している。 **時期** 近世以後と推定される。

(4) 井戸、土坑、ピット

井戸が1基、土坑が4基、ピットが8基検出された (Fig.12・13、PL. 3)。各遺構の規模については計測表 (Tab. 3) に記載した。

38トレンチ

(1) 竪穴式住居

1号住居跡 (Fig.14、PL. 3)

位置 X238、Y223グリッド。 **主軸方向** N—85°—E。 **形状等** 方形と推定される。東西(1.83)m。南北(2.90)m。壁高(26.5)cm。 **面積** (4.9)m²。 **床面** 砂層への漸移層に構築された貼床。ただし一部は砂層への漸移層に造られた地山床。 **竈** 東壁に構築されていたと推定されるが調査区外のため不明。 **ピット等** 住居南西隅で円形のピットが検出された。規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。 **出土遺物** 酸化焰焼成須恵器 (坏・椀・羽釜?) 破片、灰釉陶器破片、瓦破片、磨石が出土。 **時期** 出土遺物から10世紀後半と推

定される。

2号住居跡 (Fig.14、PL. 3)

位置 X236・237、Y223グリッド。 **主軸方向** N—66°—E。 **形状等** 方形と推定される。東西(3.23)m、南北(1.46)m。壁高50cm。 **面積** (2.3)m²。 **床面** 砂層への漸移層に構築された貼床。ただし硬化は顕著ではない。 **竈** 東壁に構築されていると推定されるが調査区外のため未検出。 **重複関係** 3号・4号住居跡、1a・1b土坑と重複する。すべての遺構よりも本遺構が古い。 **出土遺物** 土師器(壺・甕)破片。 **時期** 出土遺物が少なく時期特定が難しいが6世紀後半か。

3号住居跡 (Fig.14、PL. 4)

位置 X236・237、Y223グリッド。 **主軸方向** N—100°—E。 **形状等** 方形。東西3.65m、南北(3.05)m。壁高18cm。 **面積** (9.8)m²。 **床面** 砂層への漸移層に構築された貼床。ただし硬化は顕著ではない。 **竈** 検出できなかった。東壁に構築されていたと推定される。 **重複関係** 2号・4号・5号・6号住居跡、1a号・1b号土坑と重複する。2号・4号住居跡よりも新しく、5号住居跡・1a号・1b号土坑よりも古い。 **出土遺物** 土師器(壺・甕)破片、須恵器(甕)破片、酸化焰焼成須恵器(壺)破片、瓦破片、灰釉陶器破片が出土。 **時期** 重複関係などから10世紀代と推定される。

4号住居跡 (Fig.14、PL. 4)

位置 X236、Y223グリッド。 **主軸方向** N—120°—E。 **形状等** 方形と推定される。東西(0.76)m、南北(0.84)m。壁高(2)cm。 **面積** (0.6)m²。 **床面** 砂層への漸移層に構築された貼床。堅緻面が認められる。 **竈** 検出できなかった。東壁に構築されていたと推定される。 **重複関係** 3号住居跡と重複する。本遺構が古い。平面プランによっては6号住居跡、1a号土坑とも重複する可能性がある。 **出土遺物** 土師器(壺)破片、須恵器(蓋)破片、酸化焰焼成須恵器(壺)破片が出土。 **時期** 出土遺物から10世紀代と推定される。

5号住居跡 (Fig.14、PL. 4)

位置 X236・237、Y223グリッド。 **主軸方向** N—82°—E。 **形状等** 方形。東西(4.35)m、南北(2.40)m。壁高12.5cm。 **面積** (6.7)m²。 **床面** 砂層への漸移層に構築された貼床。堅緻面が認められる。 **竈** 検出できなかった。東壁に構築されていたと推定される。 **重複関係** 3号・6号住居跡、1a号土坑と重複する。3号・6号住居跡よりも本遺構が新しい。1a号土坑よりも本遺構が古い。 **出土遺物** 須恵器(蓋、甕)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、羽釜)破片、羽口破片が出土。 **時期** 出土遺物から10世紀後半と推定される。

6号住居跡 (Fig.14、PL. 4)

位置 X236、Y223グリッド。 **主軸方向** N—1°—W。 **形状等** 方形と推定される。東西(1.25)m、南北は、北および南壁が検出できなかったため不明。壁高20.0cm。 **面積** (1.8)m²。 **床面** 砂層への漸移層に構築された貼床。堅緻面が認められる。 **竈** 検出できなかった。東壁に構築されていたと推定される。 **重複関係** 3号・5号住居跡と重複する。3号住居よりも本遺構が新しい。5号住居よりも本遺構が古い。 **出土遺物** 須恵器(甕)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、鉢)破片、砥石、結晶片岩の礫片が出土。 **時期** 出土遺物から10世紀後半と推定される。

7号住居跡 (Fig.15、PL. 4)

位置 X234・235、Y223・224グリッド。 **主軸方向** N—95°—E。 **形状等** 方形。東西(2.90)m、南北[3.90]m。壁高13.5cm。 **面積** (9.4)m²。 **床面** 砂層の漸移層に構築された貼床。堅緻面が認められる。 **竈** 住居南東隅付近に構築されている。攪乱により右側袖および煙道部の一部を残すのみ。構築材に礫を使用している。 **重複関係** 2号溝跡、1号建物跡と重複する。本遺構が一番新しい。 **出土遺物** 土師器(甕)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、羽釜、土釜)破片、灰釉陶器(椀)破片、転用硯破片、瓦破片が出土。 **時期** 出土遺物から11世紀と推定される。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (Fig.16、PL. 4・5)

位置 X234・235・236、Y223・224グリッド。 **主軸方向** N—5°—W。 **形状等** 建物全体の検出はできず、攪乱により柱穴が検出できなかった部分も存在するが、平面形状はほぼ正方形で、建物の規模は桁行2間、梁行2間の建物と推定される。また、柱穴の検出状態から建物は少なくとも1度建替えられたことが推定される。

柱穴 本掘立柱建物跡に関連する柱穴と認定したピットは7基存在する。各柱穴（ピット）の規模等については計測表（Tab. 3）に記載した。柱穴は基本的に円形を呈し、P₁、P₃、P₄、P₅では柱穴の底面に当たりが確認された。また、P₂、P₃、P₅、P₆は覆土が黒色土と砂層の混入した黄褐色土の互層で、覆土が硬く締まっていた。また柱痕も確認できた。柱間については、桁行方向は推定で2.1m間隔、梁行方向では西からそれぞれ2.2mと2.3mを測る。 **重複関係** 7号住居跡、1号・2号・3号溝跡、2号掘立柱建物跡と重複する。本遺構が一番古い。 **出土遺物** P₅の覆土から古墳時代の土師器（4世紀・6世紀）の小片が数点出土しているほか、酸化焰焼成須恵器の小片が出土している。 **時期** 時期を特定できる要素が少ないが、遺構の重複関係などから8世紀もしくは9世紀に存続していたと推定される。

2号掘立柱建物跡 (Fig.16)

位置 X234・235、Y223・224グリッド。 **主軸方向** N—23°—W。 **形状等** トレンチの遺構を掘り下げている際に、覆土が特徴的なピットが2基検出された。特徴が近似していることから、同一の掘立柱建物の柱穴と認定した。 **柱穴** 2基とも細く深く、覆土は黒色を呈する。2基のピット間は4.90mを測るが、ピットの中間に攪乱が存在し、ここにも柱が存在したことが推定されることから、柱間は約2.5m（約8尺程度）と推定される。また、柱穴の底面は硬く締まっていた。なお、各柱穴（ピット）の規模については計測表（Tab. 3）に記載した。

重複関係 1号掘立柱建物跡、2号・3号溝跡と重複する。本遺構が一番新しい。 **時期** 中世と推定される。

(3) 溝跡

1号溝跡 (Fig.15、PL. 6)

位置 X235、Y223グリッド。 **主軸方向** N—15°—W。 **形状等** トレンチ内で検出された規模は、長さ4.22m、深さ0.32m 最大上幅0.98m、最大下幅0.50m。断面は逆台形。 **重複関係** 1号建物跡と重複する。重複関係ははっきりとしないが、本遺構が新しいと推定される。 **出土遺物** 土師器（石田川式・壺・甕）破片、須恵器（蓋・甕）破片、土師質土器（壺・椀）、転用硯破片、瓦破片。 **時期** 古代と推定される。掘削された時期の特定は難しいが10世紀後半頃には廃絶していたと考えられる。

2号溝跡 (Fig.15、PL. 6)

位置 X234・235、Y223・224グリッド。 **主軸方向** N—23°—W。 **形状等** トレンチ内における南端部は攪乱により不明。確認できる規模では、長さ(4.00m)、深さ0.65m、最大上幅1.56m。最大下幅0.72m。断面はU字形。 **重複関係** 7号住居跡、1号建物跡と重複する。1号建物跡とでは本遺構が新しい。7号住居跡とでは本遺構が古い。 **出土遺物** 繩文土器破片、土師器（壺・甕）破片、須恵器（甕）破片、転用硯破片、酸化焰焼成須恵器（壺）破片、土師質土器（椀）破片が出土。 **時期** 古代と推定される。掘削された時期の特定は難しいが、出土遺物、重複関係および覆土上位に浅間B軽石の堆積が認められたことから10世紀後半頃には廃絶していたと考えられる。

3号溝跡 (Fig.15、PL. 6)

位置 X235、Y224グリッド。 **主軸方向** N—28°—W。 **形状等** トレンチ内で検出された規模は、長さ2.60m、深さ0.42m 最大上幅0.58m、最大下幅0.22m。断面はU字形。 **重複関係** 1号建物跡、4号溝跡と重複する。1号建物跡とでは本遺構が新しい。4号溝跡とでは本遺構が古い。 **出土遺物** 土師器（壺）破片、土師質土器（壺、羽釜）破片、黑色土器（椀）破片、瓦破片、須恵器転用坩埚破片が出土。 **時期** 古代と推定さ

れる。掘削された時期の特定は難しいが11世紀後半頃には機能していなかったと考えられる。

(4) その他

(4) その他

硬化面 (Fig.15、PL. 8)

位置 X234・235、Y224グリッド。 形状等 掘削直後の遺構確認時に、面的な広がりをもつ硬化面が検出された。硬化面は幅約2mで、トレンチを南北方向に縦断するように検出された。層位的には浅間B軽石混入土層の下位で、浅間C軽石混入黒色土層上部付近。少量の土師器や須恵器の破片を包含していたが、遺物の出土は顕著ではなかった。性格としては古代末から中世頃の道路跡の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

(5) 土坑、ピット、落ち込み

土坑が3基、ピットが21基検出された (Fig.14・15・16、PL. 5・6・7・8)。各遺構の規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。なお、ピットのうち9基については、その位置関係や検出状態から2棟の掘立柱建物の柱穴と認定したことから欠番とした。この9基のほかに覆土の状態が掘立柱建物に近似する例も存在するが、掘立柱建物の柱穴として並び立たないことからピットの扱いのままとした。

39トレンチ

(1) 調査結果 (Fig.16、PL. 8)

39トレンチの調査目的については、各トレンチの概要に述べたとおりであるが、その詳細としては、元総社蒼海遺跡群 (99) の南東、座標ではX242・Y209+3を北西隅として一辺1mの正方形の範囲を総社砂層に到達するまで掘り下げた。掘り下げの結果、トレンチの4面において元総社地区における平均的な基本層序が観察できることから、この地点は元総社蒼海遺跡群 (99) で検出された掘込地業の範囲外と考えられる。

(2) ピット

トレンチ内においてピットが6基検出された (Fig.16、PL. 8)。各遺構の規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。

40トレンチ

(1) 溝跡

1号溝跡 (Fig.17、PL. 8・9)

位置 X226、Y230グリッド。 主軸方向 N-10°-W。 形状等 土取りおよび搅乱により削られているおり、特に東側の法面は明確に確認できなかった。トレンチ内で検出された規模は、長さ(1.00)m、深さ0.35m最大下幅[2.15]m。断面は逆台形ではあるが、中央よりやや西に寄った位置で浅いU字形に深くなっている。その部分の規模は、最大上幅1.00m、最大下幅0.20m。 重複関係 1号土坑と重複する。本遺構が新しい。 出土遺物 土師器(壺・甕)破片、須恵器(蓋・壺・甕)破片。転用硯破片。 時期 古代と推定される。 その他 検出された位置から、元総社蒼海遺跡群 (14) 5トレンチ・(21)・(23)、上野国府6・29トレンチ検出の西へ10°傾く古代の溝の一部と推定される。

(2) 土坑

土坑が1基検出された (Fig.17、PL. 8)。重複関係から古代の土坑と推定される。その規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。

41トレント

(1) 竪穴式住居

1号住居跡 (Fig.17)

位置 X301・302・303・304、Y304・305グリッド。 **主軸方向** N—20°—W。 **形状等** 長方形と推定される。東西 [7.65] m、南北(5.85)m。壁高 9 cm。 **面積** [46.8] m²。 **床面** 地山の砂層への漸移層に造られた地山床。 **竈・炉等** 調査した範囲では検出できなかった。 **周溝** 北・南・東壁で検出された。西壁については壁の位置も含めて不明。最大幅11cm、最大深さ5.5cm。 **ピット等** この住居にともなうと考えられるピットが3基検出された。各ピットの規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。 **重複関係** 1号掘立柱建物跡、2号住居跡と重複する。再調査のため、覆土による前後関係は検証できないが、各遺構の検出状態から、本遺構が一番古い。 **出土遺物** 再調査のためなし。 **時期** 4世紀代と推定される。

2号住居跡 (Fig.17、PL.11)

位置 X301・302、Y304・305グリッド。 **主軸方向** N—65°—E。 **形状等** 方形。東西4.15m、南北4.07m。壁高15cm。 **面積** [21.3] m²。 **床面** 地山の砂層に造られた地山床。 **竈** 東壁中央よりやや南寄りで検出された。規模等については右側袖を検出したのみであるため不明。 **周溝** 北壁、南壁、西壁で検出された。最大幅13cm、最大深さ 1 cm。 **ピット等** 柱穴 3 基、貯蔵穴 1 基が検出された。各ピットの規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。その他に、住居北東隅で仕切り溝が検出された。 **重複関係** 1号掘立柱建物跡、1号住居跡と重複する。再調査のため、覆土による前後関係は検証できないが、各遺構の検出状態から、1号住居跡よりも新しく、1号掘立柱建物跡よりも古い。 **出土遺物** 未調査部分から土師器（壺・甕）破片が出土。 **時期** 6世紀初頭と推定される。

3号住居跡 (Fig.18)

位置 X304・305、Y304・305グリッド。 **主軸方向** N—94°—E。 **形状等** 方形と推定される。今回の調査で検出できたのが北壁のみのため規模・面積は不明。 **床面** 地山の砂層に造られた地山床。 **竈** 検出できなかった。東壁に構築されていると推定されるが不明。 **重複関係** 1号掘立柱建物跡、1号住居跡と重複する。再調査のため、覆土による前後関係は検証できないが、各遺構の検出状態から、1号住居跡よりも新しい。1号掘立柱建物跡との前後関係については不詳。 **出土遺物** 再調査のためなし。 **時期** 10世紀代とも推定できるが不詳。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（元総社小校庭遺跡 1号掘立柱建物跡）(Fig.19、PL. 9・10・11)

位置 X301・302・303・304・305、Y304・305グリッド。 **主軸方向** N—90°—E。 **形状等** 東西方向に長軸をとり、桁行 5 間、梁行 2 間。柱の心で東西13.8m、南北 6 m を測る。調査区を部分的に拡張し庇の有無を確認したが、庇の柱穴は検出されなかった。また、雨落ち溝も検出されなかった。 **柱穴等** 柱穴は基本的に隅丸の正方形を呈しているが、長方形や楕円形のものやくびれをもつものも存在する。柱穴の覆土については再調査であるため不明であるが、底面に若干残っていた覆土は、砂層のブロックを含む黒色土で締まった状態で検出された。なお、柱穴の底面は基本的に平らであるが、一部では直径30cm程度の浅い窪みをもつものも見られた。また、柱穴の底面で白色を呈し硬化した部分や、鉄分が直径約30cmの大きさで環状に凝集した状態で観察された。これらはすべて柱穴の中心に位置するのではなく、柱穴内での位置を定めずに観察された。柱間の距離については、環状の鉄分凝集や底面の白色化した部分を中心として、桁行北列で西から2.75m・2.66m・2.60m・2.64m・3.05m、桁行南列で西から2.87m・2.70m・2.80m・2.90m・2.80m、梁行西列は北から3.00m・3.05m、梁行東列は北から3.00m・3.00mを測る。ただし、桁行の一番東の柱については、白色化の部分および環状の鉄分の凝集がもう 1ヶ所確認でき、その場合の桁行北側の一番東の柱間は2.70、桁行南側の一番東の柱間は

2.48mとなる。その際の桁行の全長は13.5mとなる。また、群馬大学が調査した元総社小校庭遺跡1号掘立柱建物の左右の棟持柱も検出された。西側の棟持柱は西の梁の柱穴から西へ1m、東側の棟持柱は東の梁の柱穴から東へ1.5m東に位置する。東の棟持柱は柱穴の中心付近に環状の鉄分の凝集が見られ、その周りの締まる土が掘り残されていた。この土は砂層のブロックを多く含む黒色土で硬く締まる。本掘立柱建物跡に関連する各柱穴の規模等については計測表（Tab. 3）に記載した。**重複関係** 1号・2号・3号住居跡と重複する。1号・2号住居については、本遺構が新しい。3号住居については、本遺構が古いことが推定されるが不詳。**出土遺物** 基本的には再調査のためなし。**時期** 8世紀代に存在していたと考えられるが、詳しい時期を判断する根拠に乏しい。10世紀代には廃絶していたと推定される。

(3) 他の柱穴 (Fig.18、巻頭図版4)

位置 X306、Y304・305グリッド。1号掘立柱建物跡の東側。東の棟持柱の東（ほぼN—90°—E）2.70mに位置している。**形状等** 不定形に近い方形。底面は1号掘立柱建物跡の柱穴のように平坦ではなく、やや凹凸をもつ。覆土には柱痕が認められ、柱痕の周囲の覆土は砂層（シルト質）の大きなブロックを含し締まりが強かつた。また、柱痕の底部には環状の鉄分の凝集が観察できた。なお、規模等については計測表（Tab. 3）に記載した。**出土遺物** なし。**その他** 群馬大学の調査では本柱穴は未検出（調査区外に位置する）。

(4) ピット

ピット2基が検出された（Fig.18）。各遺構の規模等については計測表（Tab. 3）に記載した。

42トレンチ

(1) 穫式住居

1号住居跡 (Fig.20、PL.12)

位置 X294・295、Y313・314グリッド。**主軸方向** N—88°—E。**形状等** 方形。東西3.00m、南北(2.40)m。壁高10cm。**面積** (6.9)m²。**床面** 地山の砂層への漸移層に造られた地山床。**竈** 北東隅に構築されている。主軸方向はN—92°—E、全長68cm、最大幅40cmを測る。**重複関係** 1号井戸と重複する。2号住居跡、3号・4号土坑とも重複するか。本遺構が一番古い。ただし、2号住居跡との関係は不明。**出土遺物** 須恵器（蓋、壺、甕、短頸壺、盤）破片、酸化焰焼成須恵器（壺、椀、羽釜）破片、灰釉陶器（壺）破片、土師質土器（高壺形土器）破片、円礫が出土。**時期** 10世紀前半と推定される。

2号住居跡 (Fig.20、PL.12)

位置 X294・295、Y313グリッド。**主軸方向** N—85°—E。**形状等** 方形。東西(2.45)m、南北(1.25)m。壁高13.5cm。**面積** (3.3)m²。**床面** 地山の砂層への漸移層に造られた地山床。**竈** 南東隅に構築されている。竈と推定される焼土の分布を確認。主軸方向はN—109°—E、全長(45)cm、最大幅38cmを測る。焼土分布の前面に灰の分布が認められた。**重複関係** 1号井戸、2号土坑、9号ピットと重複する。1号住居跡、3号土坑、10号ピットとも重複するか。本遺構が一番古い。ただし、1号住居跡との関係は不明。**出土遺物** 須恵器（蓋、壺）破片、酸化焰焼成須恵器（壺、椀、羽釜）破片、灰釉陶器（壺）破片が出土。**時期** 10世紀前半と推定される。

(2) 溝跡

1号溝跡 (Fig.20、PL.12)

位置 X296・297、Y313・314グリッド。**主軸方向** N—2°—E。**形状等** 長さ(3.89)m、深さ0.20m 最大上幅1.07m、最大下幅0.85m。断面は逆台形。トレンチを縦断している。**重複関係** 2号井戸と重複する。本遺構が新しい。**出土遺物** 須恵器（蓋）破片、酸化焰焼成須恵器（壺、羽釜）破片、瓦（近世以後）、砂岩質の切石（竈の構築材？）破片が出土。**時期** 覆土の堆積状態等から近世以後と推定される。

(3) 井戸・土坑・ピット、落ち込み

井戸が3基、土坑が4基、ピットが10基、落ち込みが1ヶ所検出された(Fig.20・21、PL.12)。各遺構の規模等については計測表(Tab.3)に記載した。特徴として、本トレンチで検出された井戸、土坑、ピットは他のトレンチのものよりも遺物が多い。特に10世紀頃の遺物が多く出土する傾向が強い。

43トレンチ

(1) 溝跡

1号溝跡 (Fig.22、PL.13)

位置 X223・224、Y275グリッド。**主軸方向** N-72°-E。**形状等** 長さ(1.85)m、深さ0.37m 最大上幅1.05m、最大下幅0.15m。断面は深いU字形で2段になっており中心部分が極端に深くなっている。トレンチを斜めに横断していると推定されるが搅乱を受けているため不詳。**重複関係** ピット2基と重複するが、本遺構が古いか。**出土遺物** 土師器小片。**時期** 中世以後と推定される。

2号溝跡 (Fig.22、PL.13)

位置 X223・224、Y275グリッド。**主軸方向** N-81°-E。**形状等** 長さ(2.20)m、深さ0.33m 最大上幅1.82m、最大下幅0.48m。断面は浅い逆台形で、北側法面は緩やかに2段となっている。トレンチを斜めに横断していると推定されるが搅乱を受けているため不詳。**重複関係** ピット3基と重複するが、本遺構が古いか。**出土遺物** 酸化焰焼成須恵器(坏、椀)破片が出土。**時期** 中世以後と推定される。

(2) 土坑・ピット

土坑が2基、ピットが31基検出された(Fig.22、PL.13)。各遺構の規模等については計測表(Tab.3)に記載した。ピットについては、浅間B軽石混入土層の直下で検出されたものと、さらにその下位で検出されたものが存在する。

(3) その他

その他の遺構として、蒼海城に関連する土墨の痕跡と考えられる土の堆積が認められる(Fig.22)。これは現況調査地北側がうす高くなっていることと、表土に総社砂層由来と考えられる細かい砂が多く含まれていることからも、およその察しがつく。土墨の跡と推定される高まりは東への延びており、付近の住宅の北側の垣根等として、部分的には現在も残っている。また、調査地北側を東西方向に走る市道は、道の両側にある住宅の敷地よりも低くなっていることなども含めて考えると、中世の堀の跡の可能性がある。

44トレンチ

(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (Fig.23・24、PL.14)

位置 X234・235、Y276・277・278グリッド。ただし、柱穴の当たりの可能性のある遺構がY275でも検出されている。**主軸方向** 南北方向の柱穴列がN-90°-Eの走行をもつことから、建物は正方位を意識して建てられたことが推定される。**形状等** この掘立柱建物の方向や、側柱建物か総柱建物かについても現時点では不明。柱穴列が南北方向で2間分、東西方向で1間分検出された。**柱穴等** 柱穴は基本的には隅丸の正方形を呈し、底面は平坦である。覆土は砂層のブロックを含む黒褐色土で、縊まりはやや強い。柱痕や当たりはあまり明瞭には観察できなかった。なお、南北方向については、柱穴列の軸上で、柱穴の可能性のあるピットを1基、柱の当たりの可能性がある鉄分の凝集を1ヶ所検出した。柱間の距離については、南北方向の柱穴列は、柱穴の可能性のある遺構を含めると、南から2.40m・2.35m・2.70m・2.60mを測る。東西方向では2.36mを測る。なお、本掘立柱建物跡に係る柱穴および柱穴の可能性のある遺構の規模等については計測表(Tab.3)に記載した。

重複関係 建物のプランが判然としないため個々の遺構との重複関係については不明。ただし、各落ち込みを埋め戻して整地の後に掘立柱建物は建てられたと推定される。 **出土遺物** 土師器小片、須恵器小片、土師器高壙破片。 **時期** 時期を判断する根拠に乏しいため、詳細は不明。8世紀頃に建てられ、10世紀代には廃絶していたことが想定される。

(2) 溝跡

1号溝跡 (Fig.23・24、PL.15)

位置 X234、Y274・275・276・277・278グリッド。 **主軸方向** N—6°—E。 **形状等** 長さ(16.65)m、深さ0.75m 最大上幅[2.20]m、最大下幅0.24m。断面はV字。 **重複関係** 10号・11号・12号土坑と重複する。本遺構が一番新しい。 **出土遺物** 須恵器(甕)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、椀、羽釜)、瓦(古代)破片。内耳鍋、石鉢破片。 **時期** 中世。

(3) 土坑・ピット・落ち込み

土坑が15基、ピットが19基、落ち込みが7ヶ所検出された (Fig.23・24、PL.14・15・16) 各遺構の規模等については計測表 (Tab. 3) に記載した。土坑については覆土から中世と考えられるものも存在した。また、10号土坑については円形で規模も比較的大きいことから井戸跡の可能性も考えられる。ピットについては大きく①円形のピット②方形のピット③底面に礎石をともなうピットに分類することができる。形状や覆土からの出土品から円形のピットは古代、方形のピットは中世以後に属する傾向を指摘できる。また、底面に礎石をともなうピット近世以後の可能性が高く、同軸上に位置することから、同一の構造物に属する可能性がある。落ち込みについては、不定形がほとんどで、覆土には総社砂層のブロックを含む。時期としては古墳時代後期以後の古代と推定されるが、総社砂層面に達した深さで掘削を終了し、粘性の強い漸移層の土を掘り取っていることが考えられるところから、粘土採掘坑の可能性が指摘できる。また、これらの落ち込みは埋没後に上面を整地されている。

(4) その他

44トレンチ内において、鉄分の凝集・沈着が確認されている (Fig.23・24、巻頭図版6)。状態としては、土坑、落ち込み、ピットの底部に円形もしくは不定形を呈して鉄分が凝集して検出されるものである。特に1号掘立柱建物跡の柱穴列の軸上に位置するものは、直径が約30cmの凝集した状態を呈していることや、元総社小校庭遺跡の1号掘立柱建物の柱穴の底面に状態の良く似た鉄分の凝集が柱痕や当たりに観察できたことから、何かしらの痕跡として注意が必要と思われる。

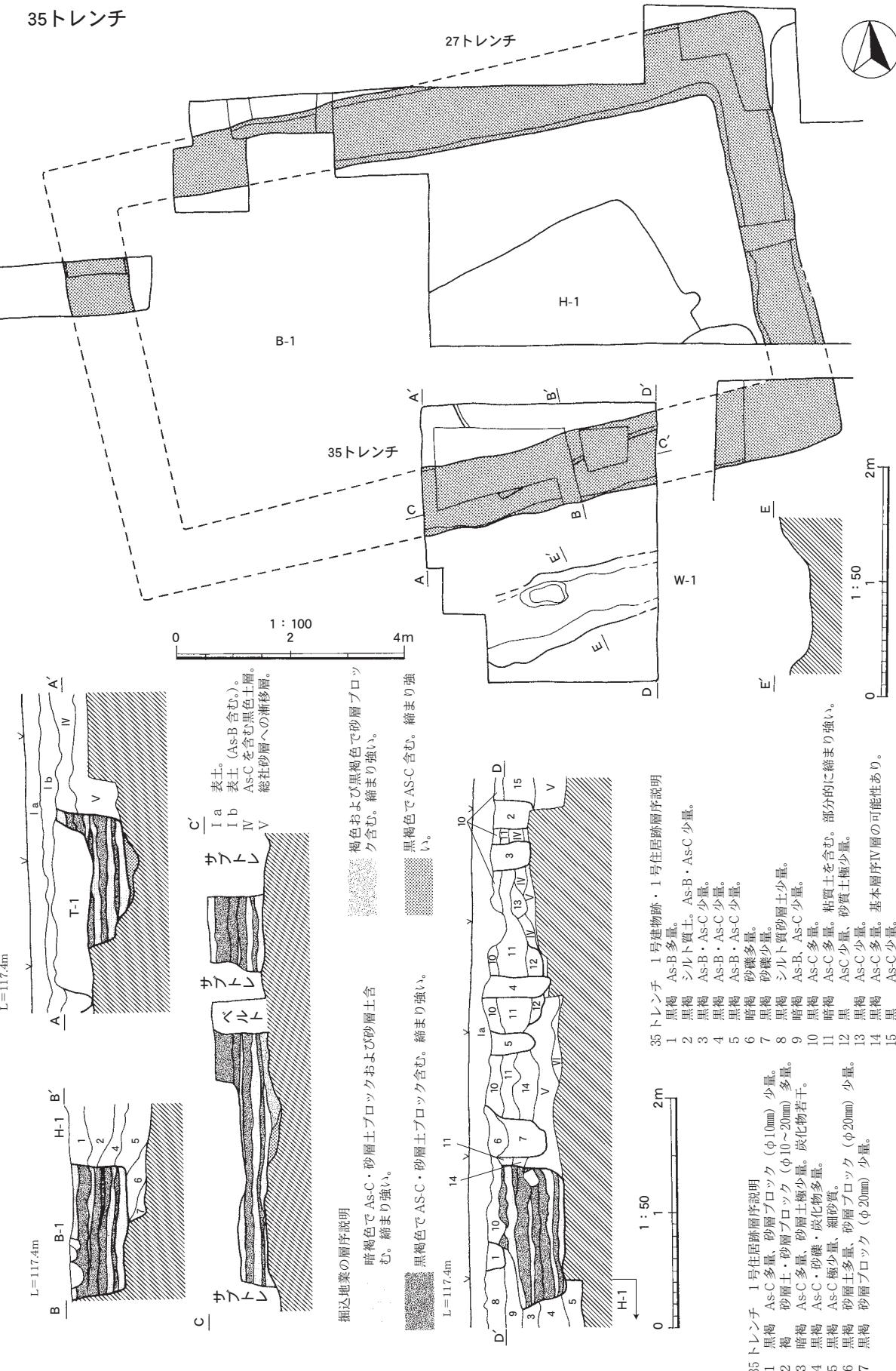


Fig. 9 35トレンチ各遺構

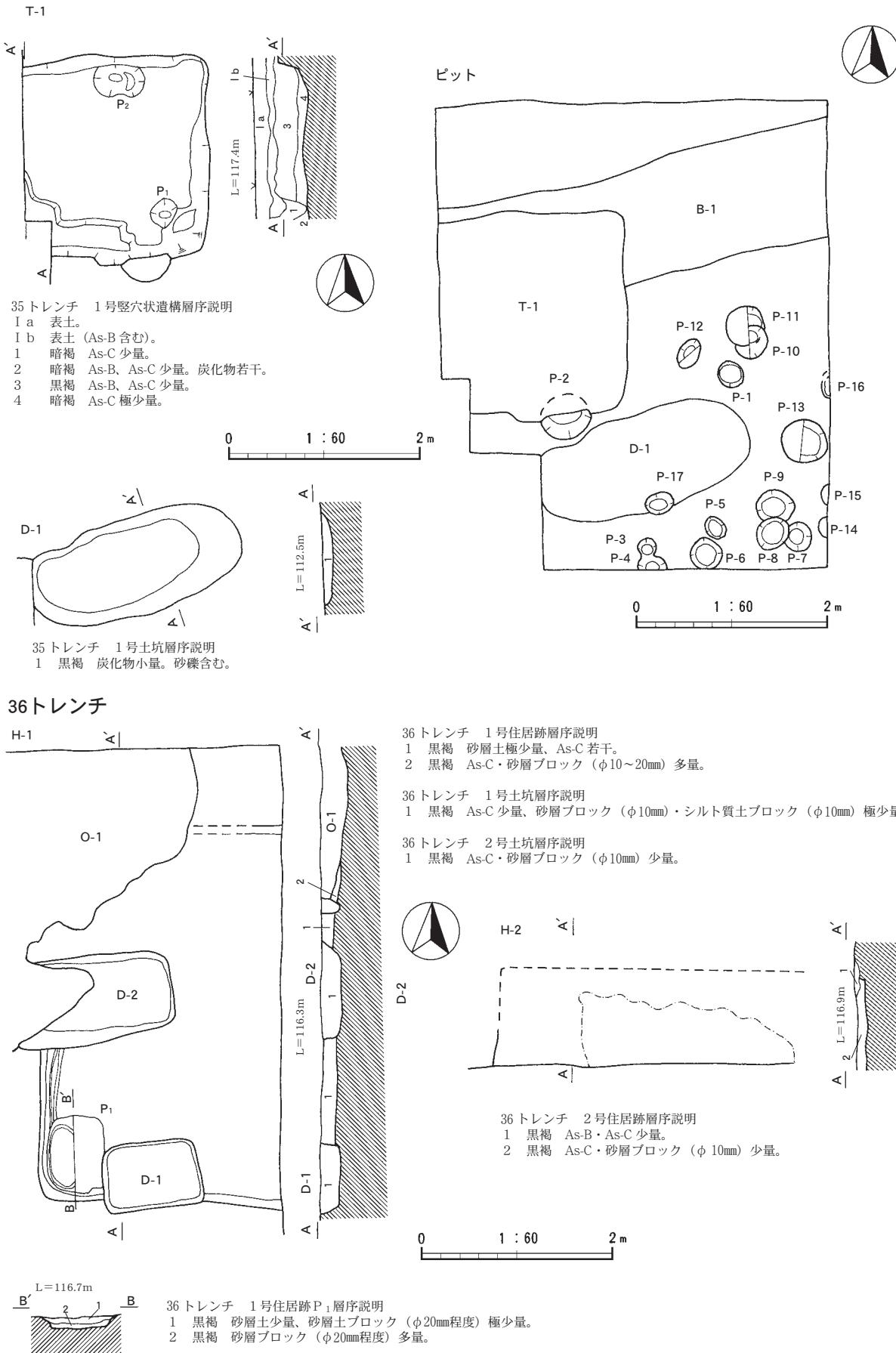
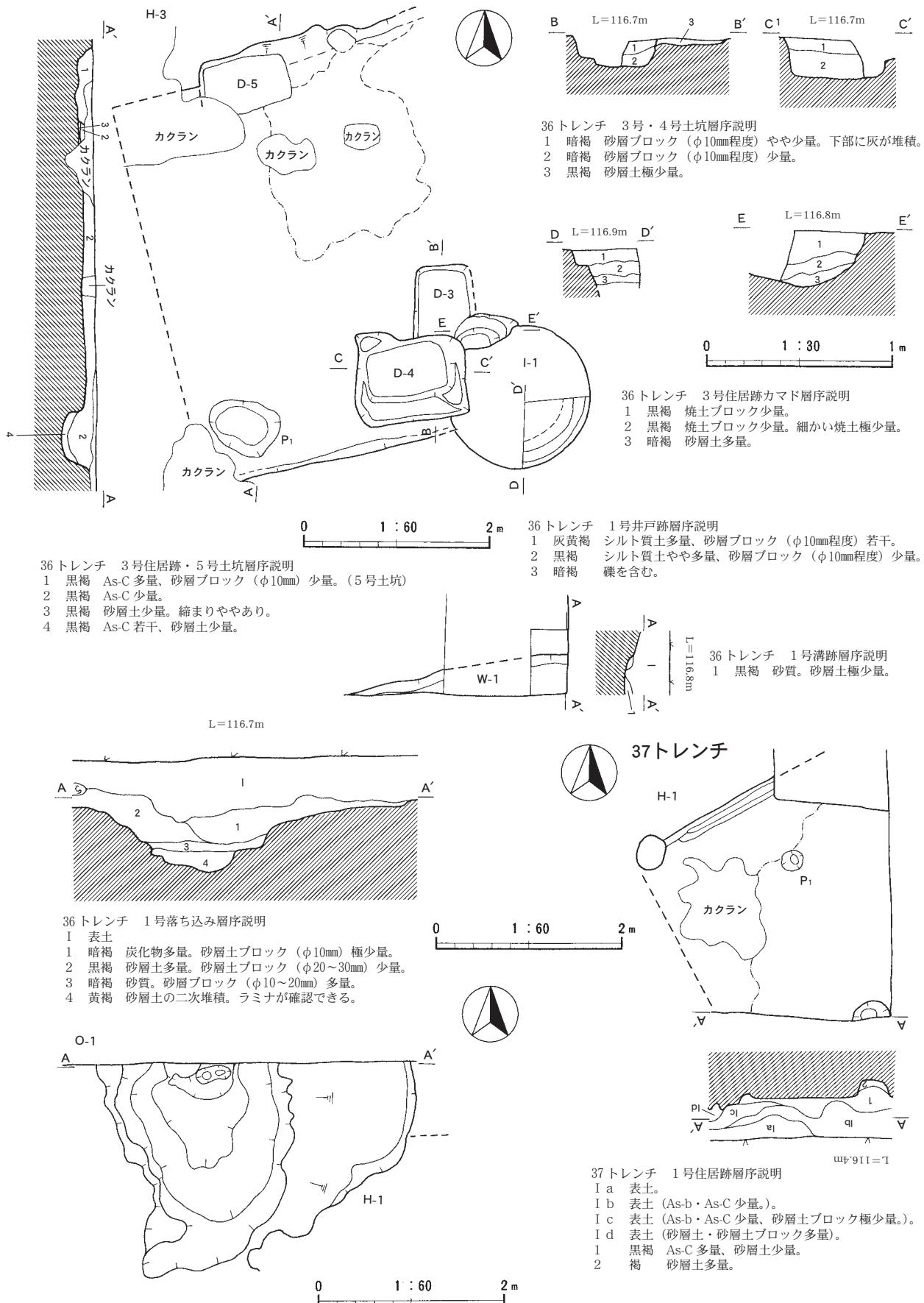


Fig.10 35・36トレンチ各遺構



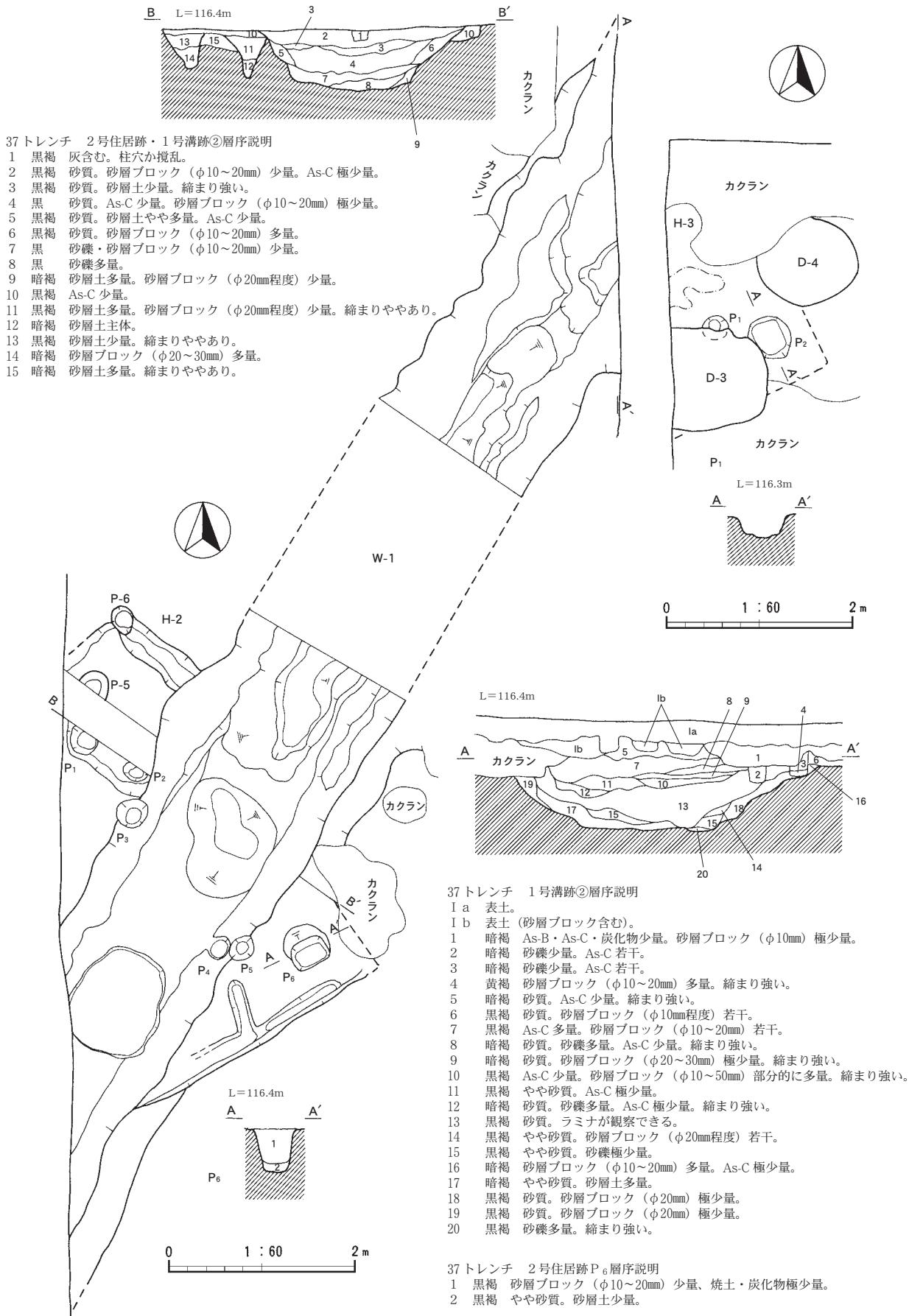


Fig.12 37トレンチ各遺構

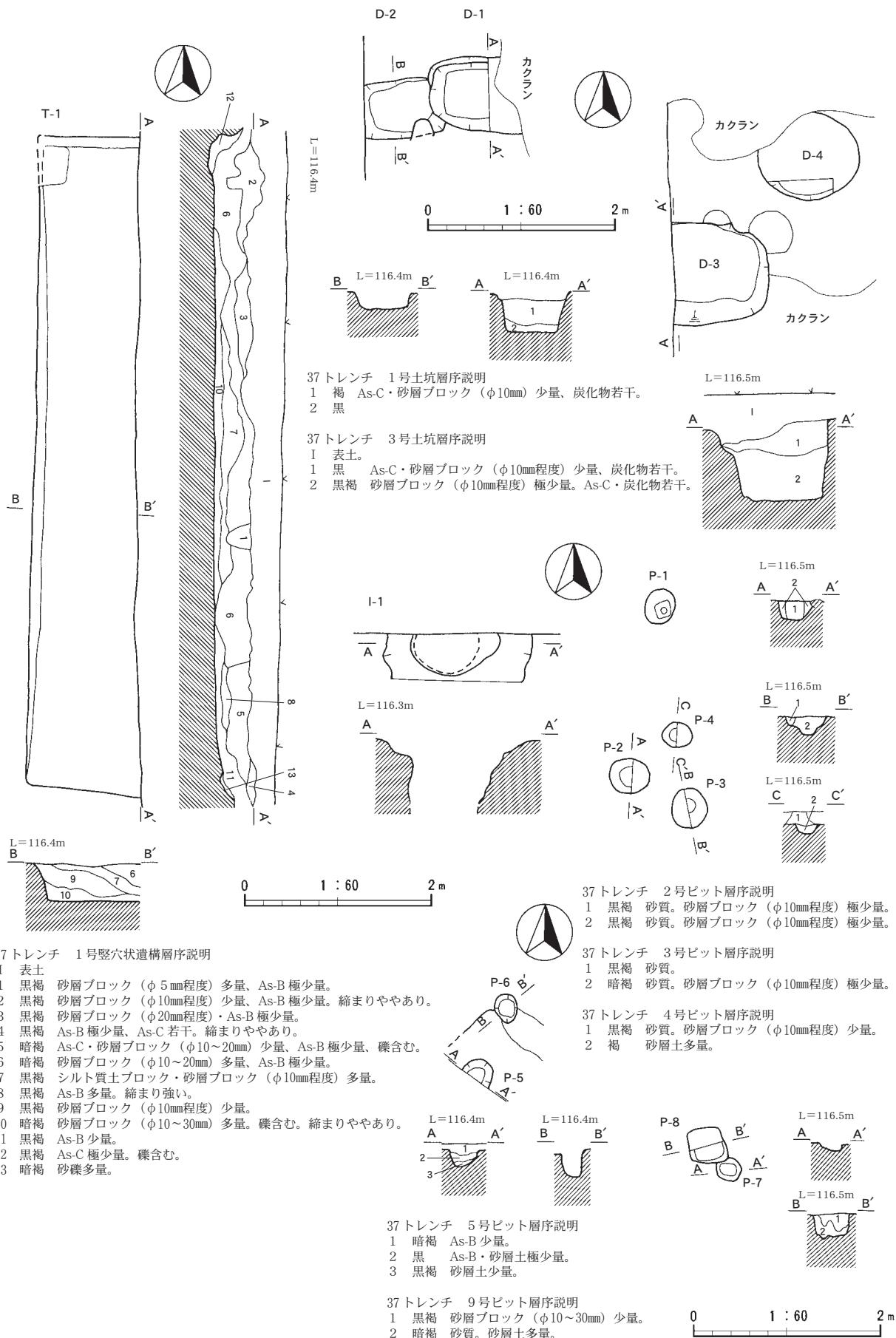


Fig.13 37 レンチ各遺構

第1部 平成27年度範囲内容確認調査報告

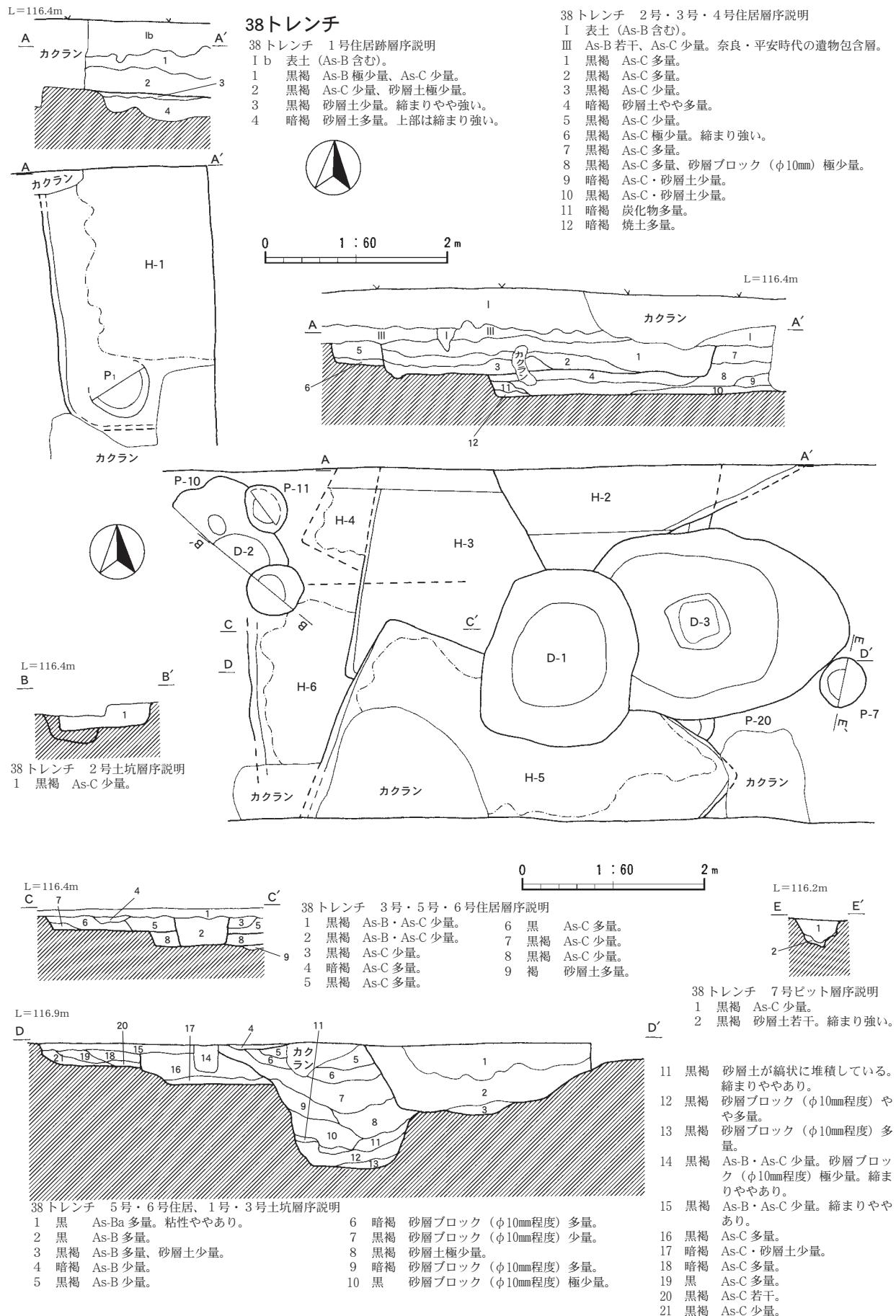


Fig.14 38トレンチ各遺構

V 遺構と遺物

38トレンチ 北壁層序説明(1号・2号溝跡以外)

- I a 表土
- I b 表土(As-B混入)
- I c 表土(As-B少量混入)
- II a As-B二次堆積。As-Bなし。
- II b シルト質土。As-B若干。
- II c As-B混入土層。As-Bがブロックで含まれる。
- III As-B若干、As-C少量。奈良・平安時代の遺物包含層。
- IV As-C混入黒色土層。
- V 総社砂層への漸移層
- 1 黒褐 As-B多量。
- 2 黒褐 As-B少量。

38トレンチ 2号溝跡層序説明①

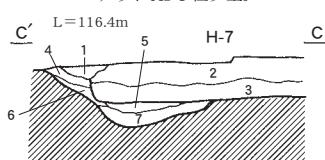
- 1 黒褐 As-C極少量。
- 2 黒褐 As-C多量。
- 3 黒褐 As-C少量。
- 4 黒褐 As-C少量、砂層土極少量。
- 5 黒褐 As-C・砂層土少量。締まりややあり。
- 6 黒褐 砂層ブロック(Φ10~20mm)多量。ピット覆土か。
- 7 褐 砂層土多量。締まりややあり。ピット覆土か。

38トレンチ 1号溝跡層序説明①

- 1 黒褐 As-C少量。
- 2 黒褐 As-C多量。
- 3 黒褐 As-C・砂層土少量。
- 4 黒褐 As-C少量。
- 5 暗褐 砂層土少量。

38トレンチ 2号溝跡層序説明②

- 1 黒褐 As-B多量、As-C少量。
- 2 黒褐 As-B・As-C少量。
- 3 黒褐 As-C多量。
- 4 黒褐 As-C少量。
- 5 黒褐 灰多量。
- 6 黒褐 As-C多量。
- 7 黒褐 As-C多量、砂層土少量。
- 8 黒褐 As-C少量。
- 9 黒褐 As-C・砂層土少量。
- 10 黒褐 砂層土少量、As-C極少量。
- 11 黒褐 砂層土多量、砂層ブロック(Φ10~20mm)少、As-C極少量。



38トレンチ 7号住居跡・2号溝跡層序説明③

- 1 黒褐 As-B多量。
- 2 黒褐 As-C少量。
- 3 黒褐 As-C少量。
- 4 暗褐 As-C少量、砂層土極少量。
- 5 黒褐 As-C多量。
- 6 暗褐 砂層土多量。
- 7 黒褐 As-C・砂層ブロック(Φ10mm)少量。

L=116.3m

- 38トレンチ 3号溝跡層序説明
- 1 黒褐 As-B多量。締まり強い。
- 2 黒褐 As-B多量。
- 3 黒褐 As-B少量。
- 4 黒褐 As-C少量、灰若干。
- 5 黒褐 砂層土多量。締まりややあり。

38トレンチ 7号住居跡カマド層序説明

- 1 黒褐 As-C少量。
- 2 黒褐 燃土少量。
- 3 暗褐 燃土少量。
- 4 黒褐 As-C少量。
- 5 暗褐 燃土・灰少量。
- 6 暗褐 灰多量。

38トレンチ 1号溝跡層序説明②

- I a 表土
- I b 表土(As-B混入)
- 1 黒 As-B極少量。
- 2 黒褐 As-C少量。
- 3 黒褐 As-C極少量。
- 4 黒褐 As-C少量。締まり強い。
- 5 暗褐 As-C少量。
- 6 暗褐 砂層土・砂層ブロック(Φ10mm程度)少量。締まりややあり。

0 1:60 2m

0 1:30 1m

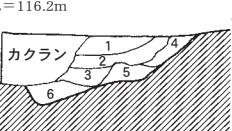


Fig.15 38トレンチ各遺構

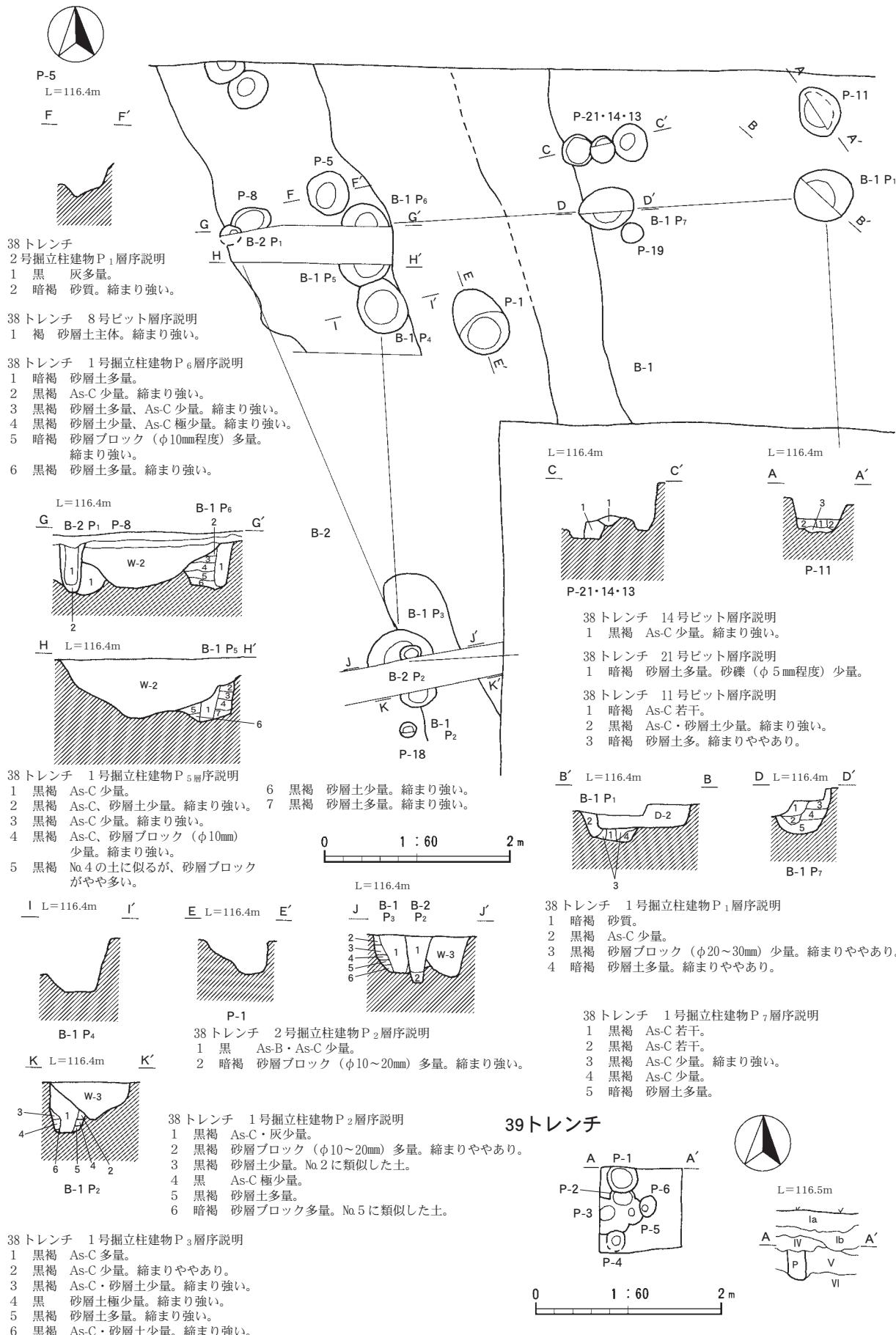
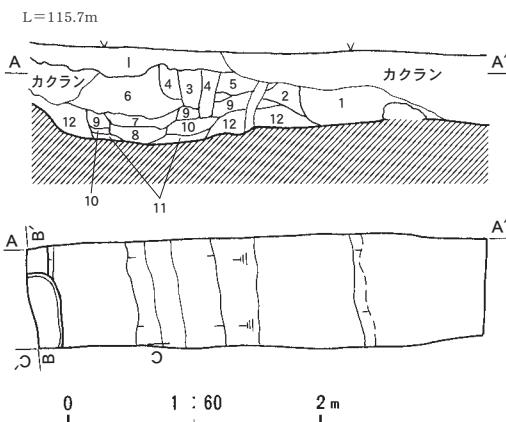
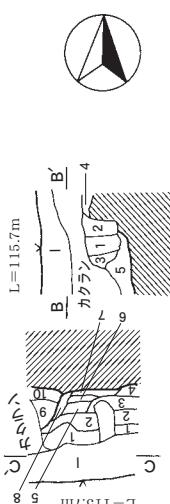


Fig.16 38・39トレンチ各遺構

40トレンチ

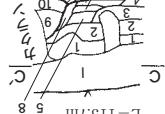
40トレンチ 北壁層序説明

- I 表土。
1 暗褐 砂質。砂礫少量。
2 極暗褐 やや砂質。砂礫極少量。
3 黒 炭化物・砂礫極少量。
4 黑褐 砂礫極少量。
5 黒 砂礫極少量。
6 極暗褐 砂質。砂礫極少量。縮まり強い。
7 黒 シルト質。
8 黒 砂礫多量。縮まり強い。
9 極暗褐 やや砂質。砂礫含む。縮まり強い。
10 黑褐 砂礫多量。ラミナが観察できる。縮まり強い。
11 極暗褐 砂礫多量。縮まり強い。
12 黑褐 砂礫極少量。縮まり強い。



40トレンチ 西壁層序説明

- I 表土。
1 極暗褐 砂礫多量。縮まりややあり。
2 黑褐 砂礫少量。
3 黒 砂礫少量。
4 極暗褐 砂礫多量。縮まり強い。(北壁No.11)
5 黑褐 砂層ブロック ($\phi 10\text{mm}$ 程度) 多量。縮まり強い。



40トレンチ 南壁層序説明

- I 表土。
1 黒褐 砂層ブロック ($\phi 10\text{mm}$ 程度) 若干。
2 極暗褐 砂質。砂礫極少量。縮まり強い。(北壁No.6)
3 黒 シルト質。(北壁No.7)
4 黒 砂礫多量。縮まり強い。(北壁No.8)
5 極暗褐 やや砂質。砂礫含む。縮まり強い。(北壁No.9)
6 黑褐 砂礫多量。ラミナが観察できる。縮まり強い。(北壁No.10)
7 黑褐 砂礫極少量。縮まり強い。
8 黑褐 砂礫少量。縮まり強い。(北壁No.11に近似)
9 黑 砂層ブロック ($\phi 10\text{mm}$ 程度) 少量。縮まりややあり。
10 黑褐 砂礫極少量。(西壁No.5)

41トレンチ

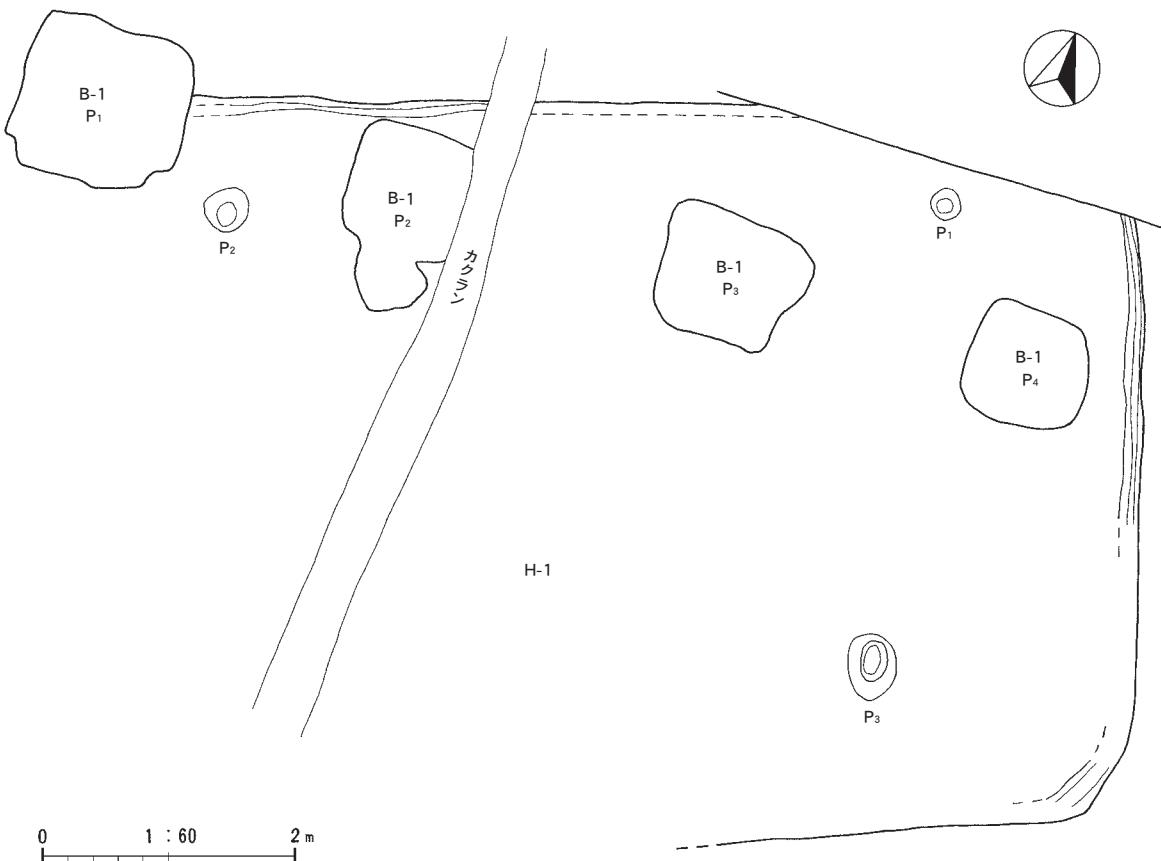


Fig.17 40・41トレンチ各遺構

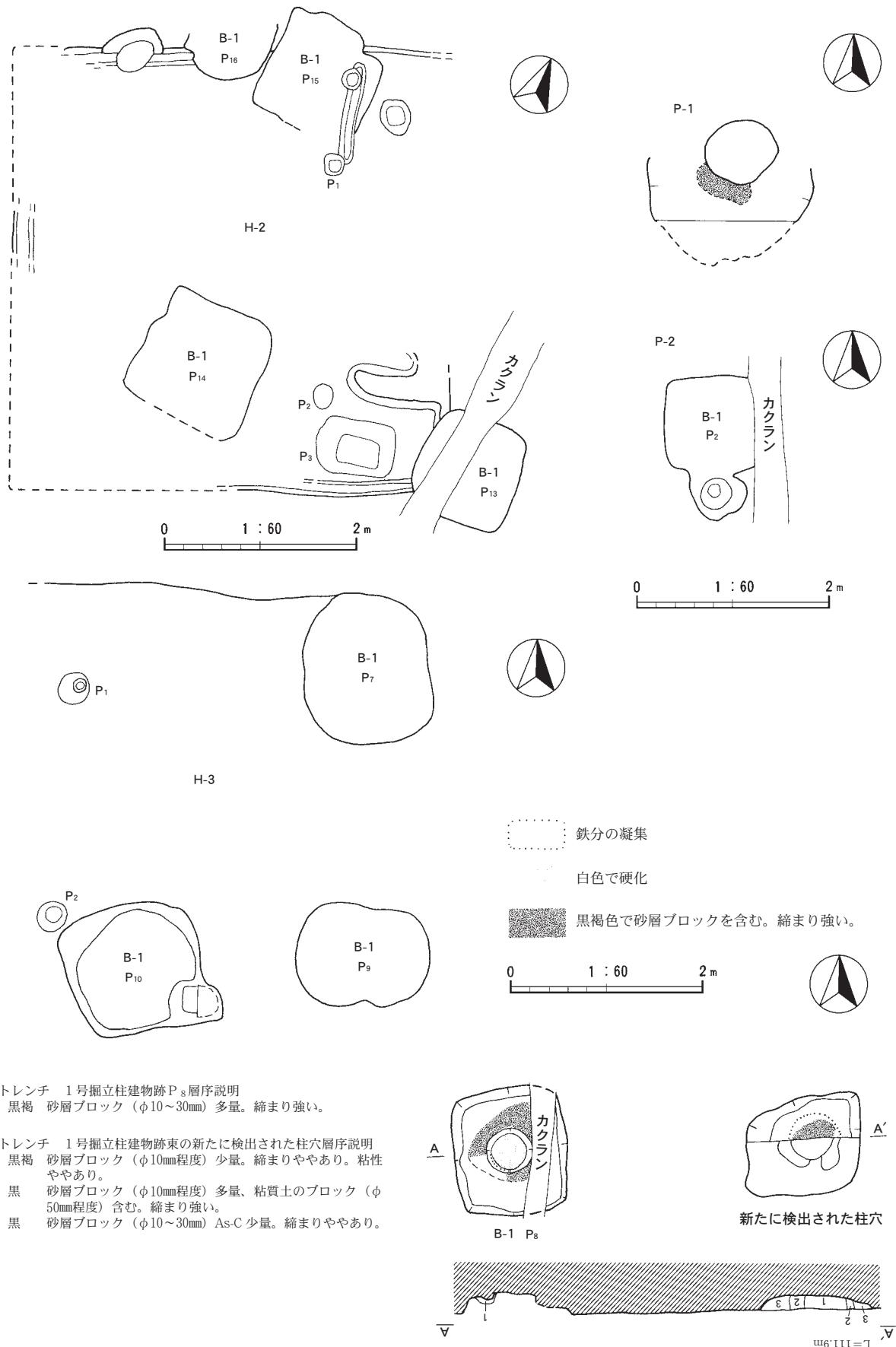


Fig.18 41トレンチ各遺構

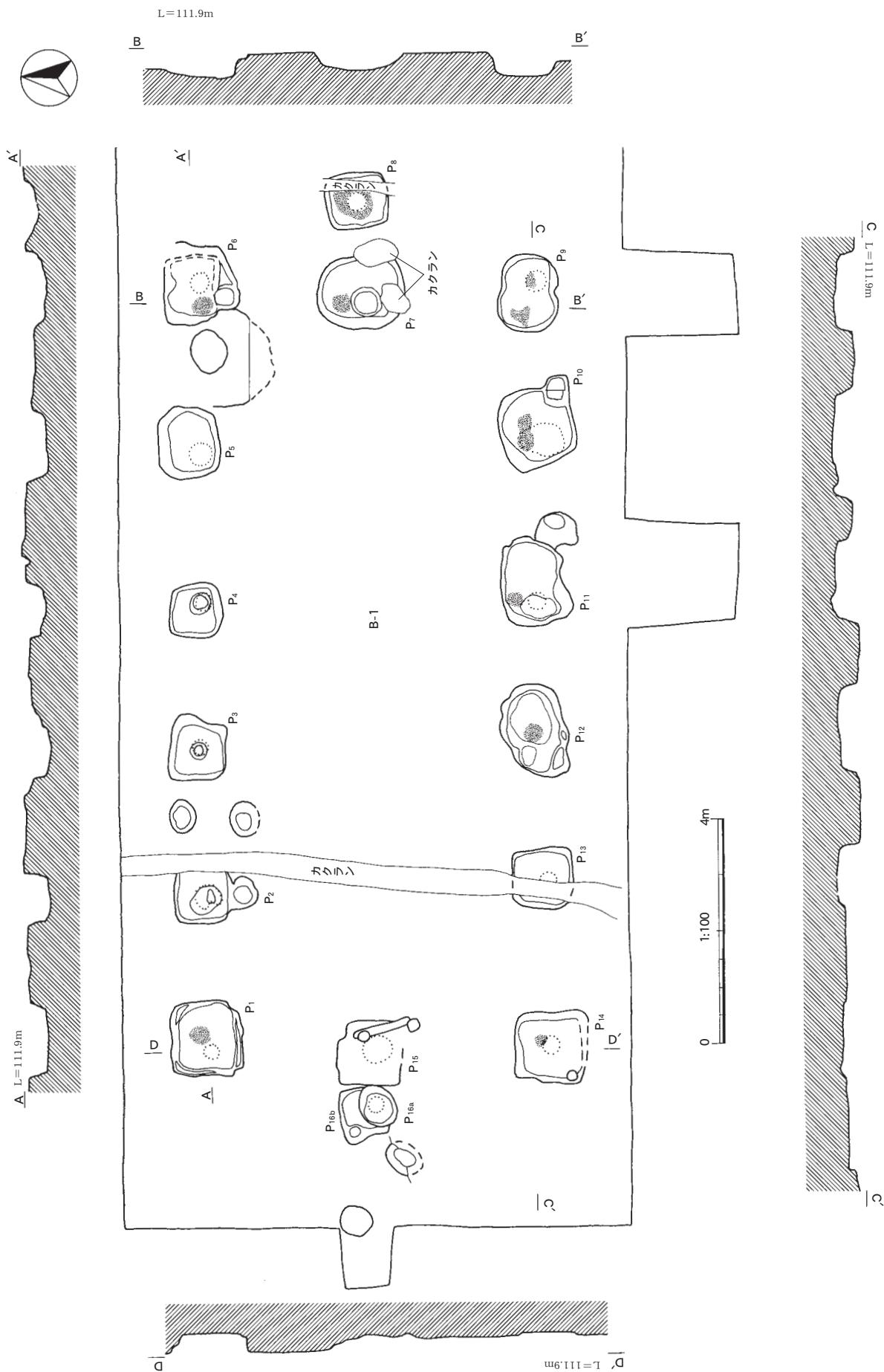


Fig.19 41トレンチ各遺構

42トレンチ

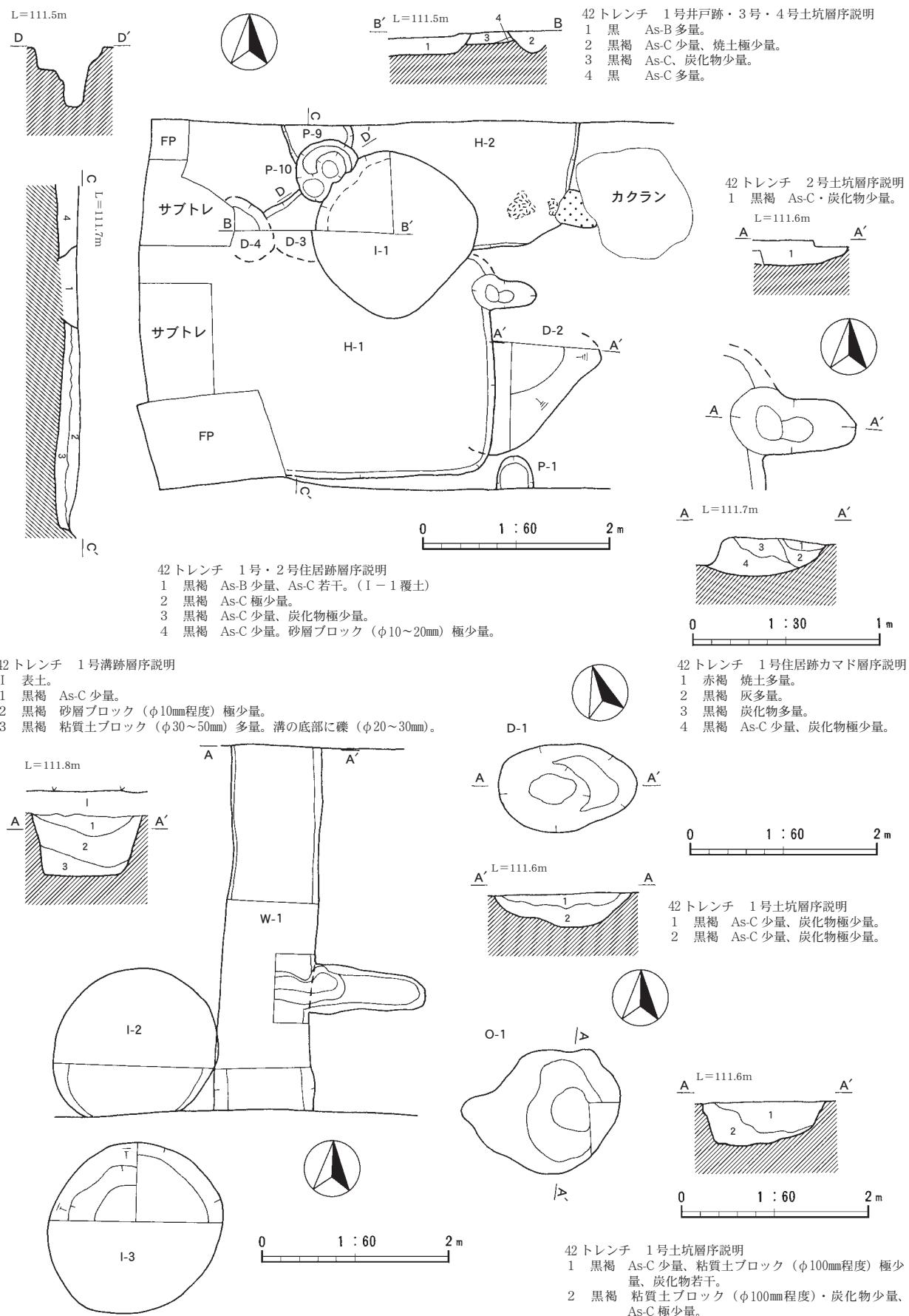


Fig.20 42トレンチ各遺構

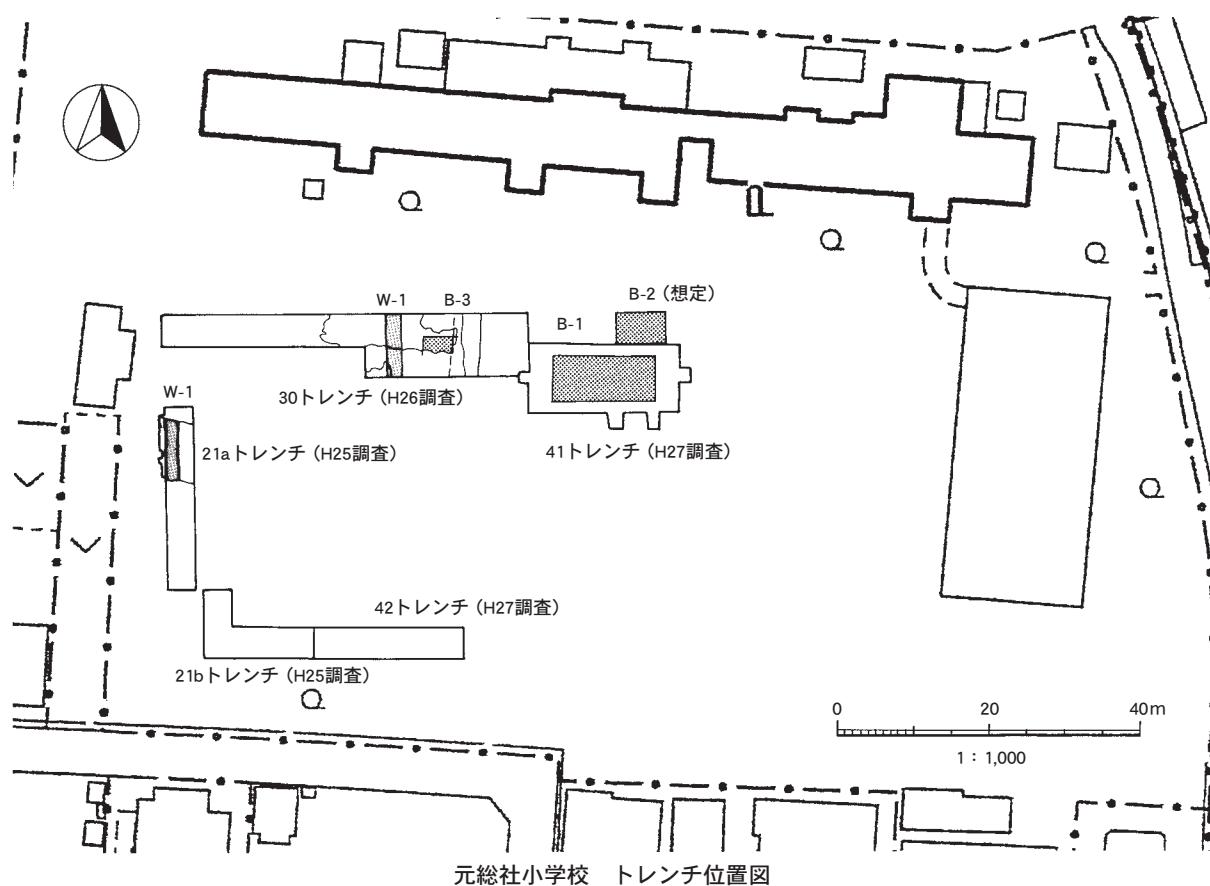
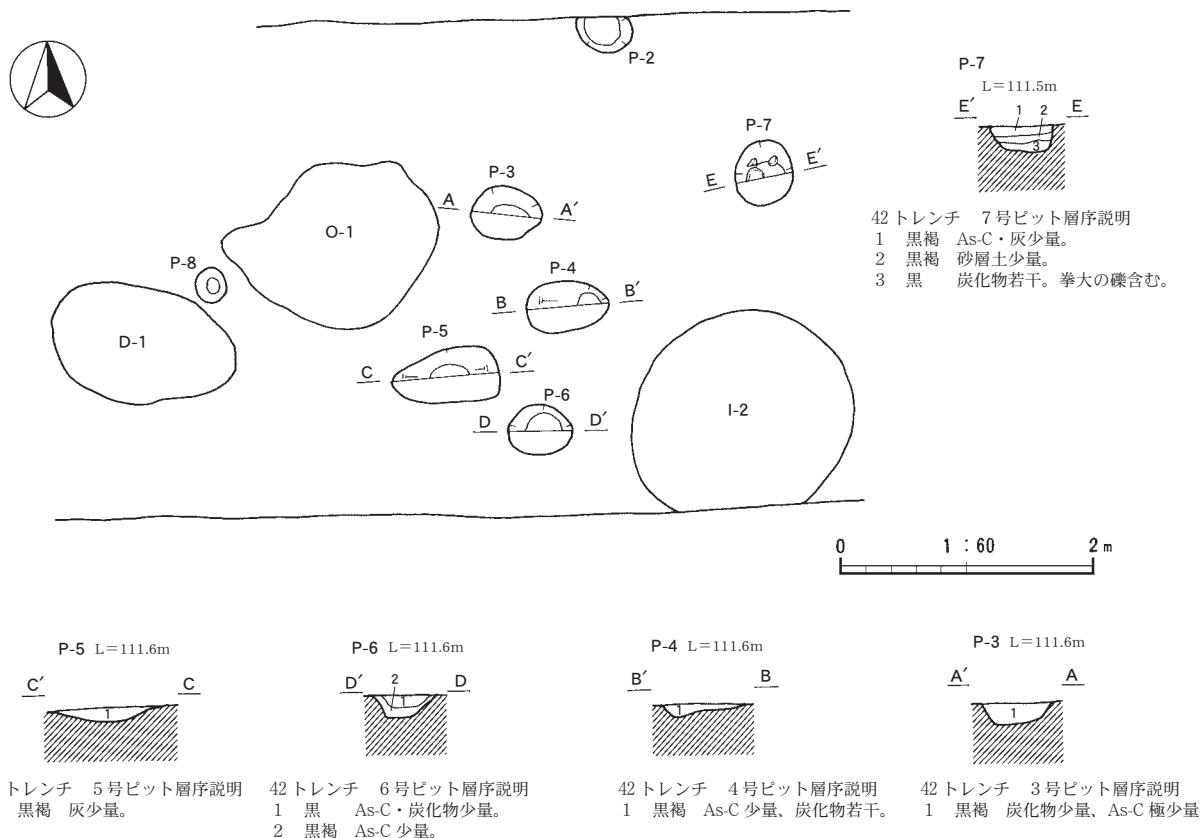


Fig.21 42トレンチ各遺構

43トレンチ

43トレンチ 西壁・北壁層序説明

I a 表土
1.1 にふい黄橙 総社砂層の二次堆積層。
1.2 黒褐色 砂層ブロック ($\phi 5\sim10mm$) を多く含む。
1.3 にふい黄橙 黒色粘質土ブロック ($\phi 10\sim20mm$) を多く含む砂層土層。
1.4 黒褐色 やや粘質。
1.5 黒褐色 砂層ブロック ($\phi 10mm$ 程度) を若干含む。
1.6 黒褐色 As-B 多く含む。
I b As-B混入土層。
I c As-B混入土層 (I b層よりもAs-Bが多い)。
III a 砂礫多量。粘性ややあり。
III b 砂礫少量。粘性ややあり。
IV a As-Cを混入する黒色土層 (IV a層よりも粘性強い)。
IV b As-Cを混入する黒色土層 (IV a層よりも粘性強い)。
V 総社砂層への漸移層。粘性強い。

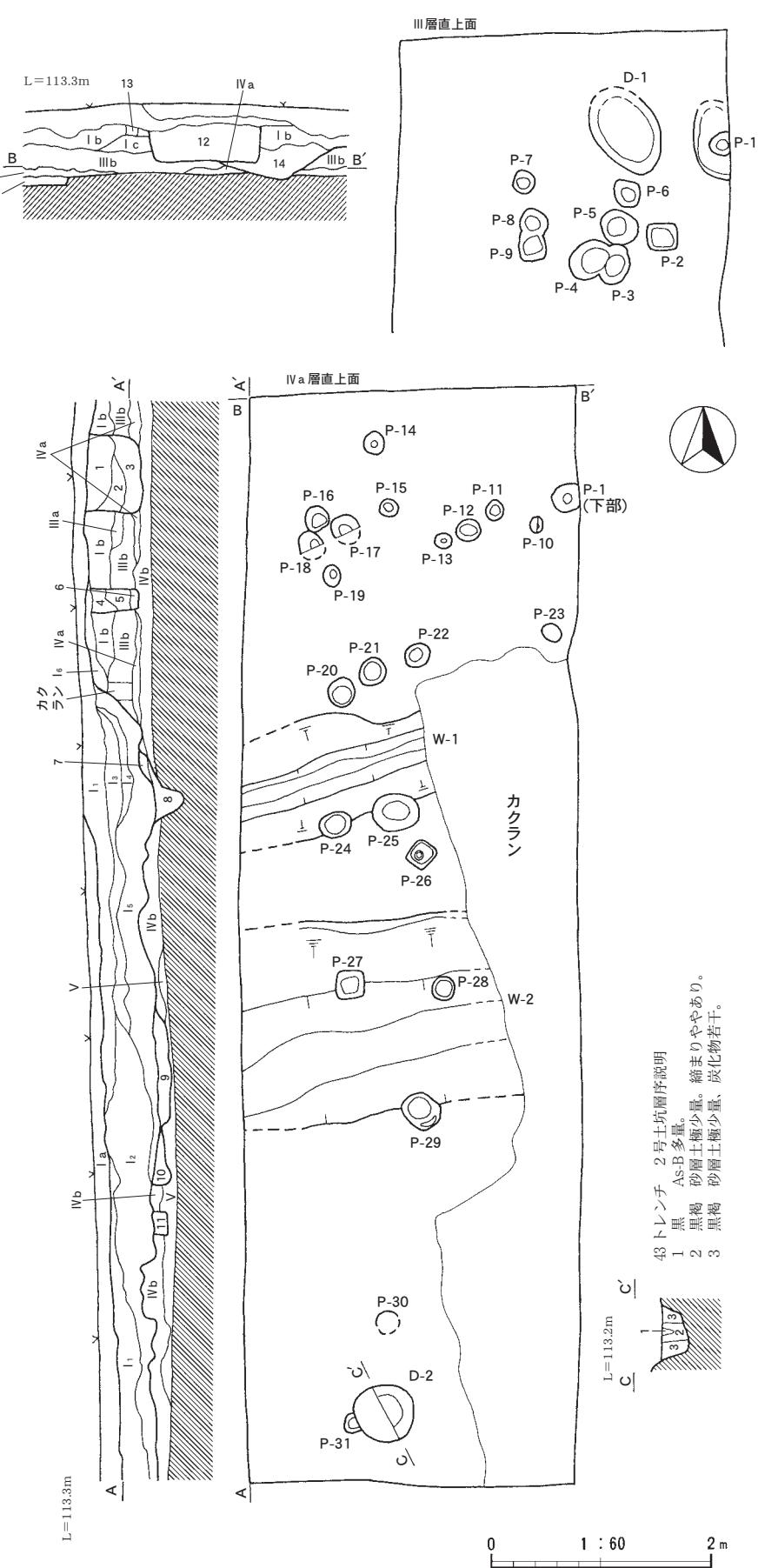


Fig.22 43トレンチ各遺構

44トレンチ

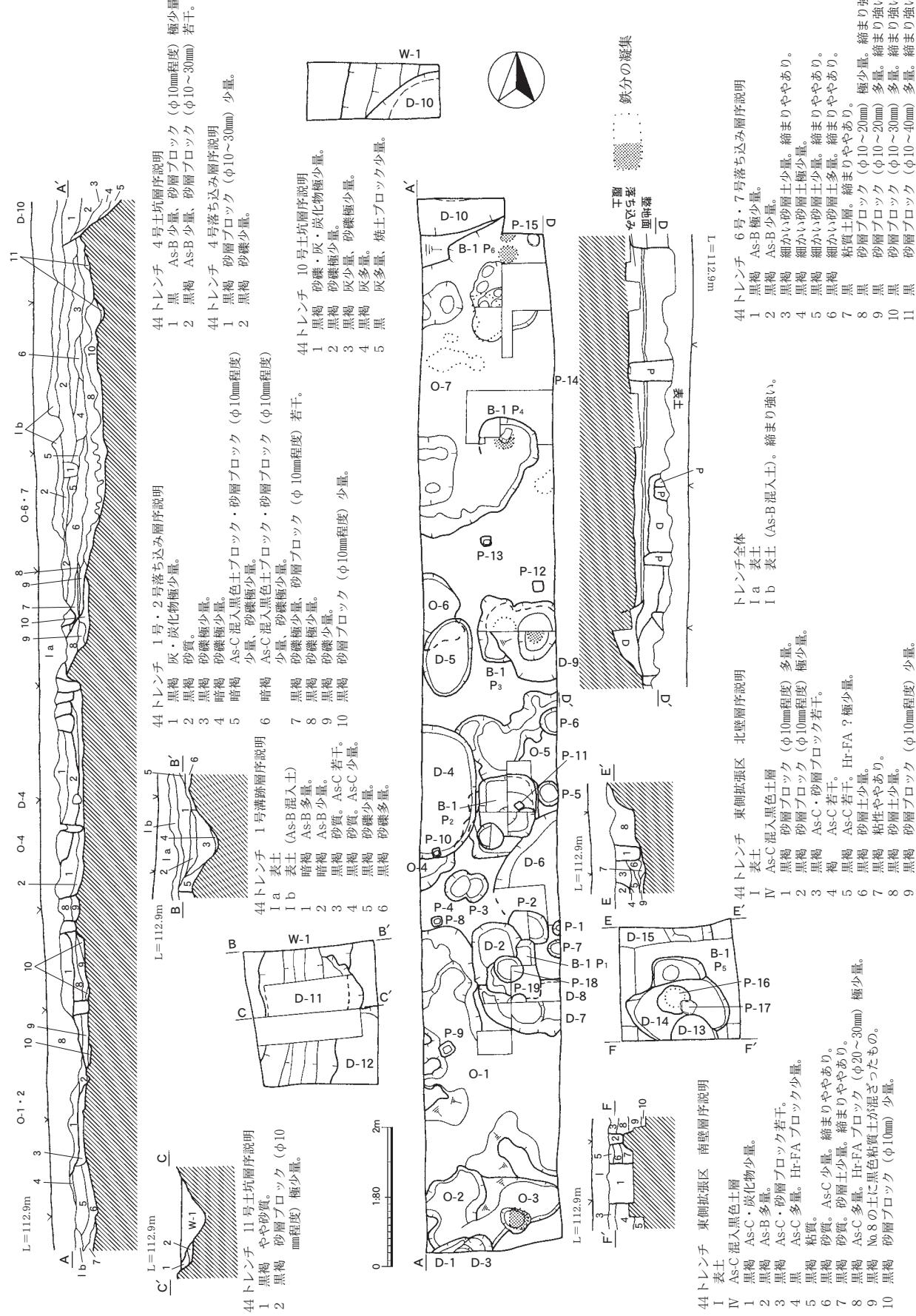


Fig.23 44トレンチ各遺構

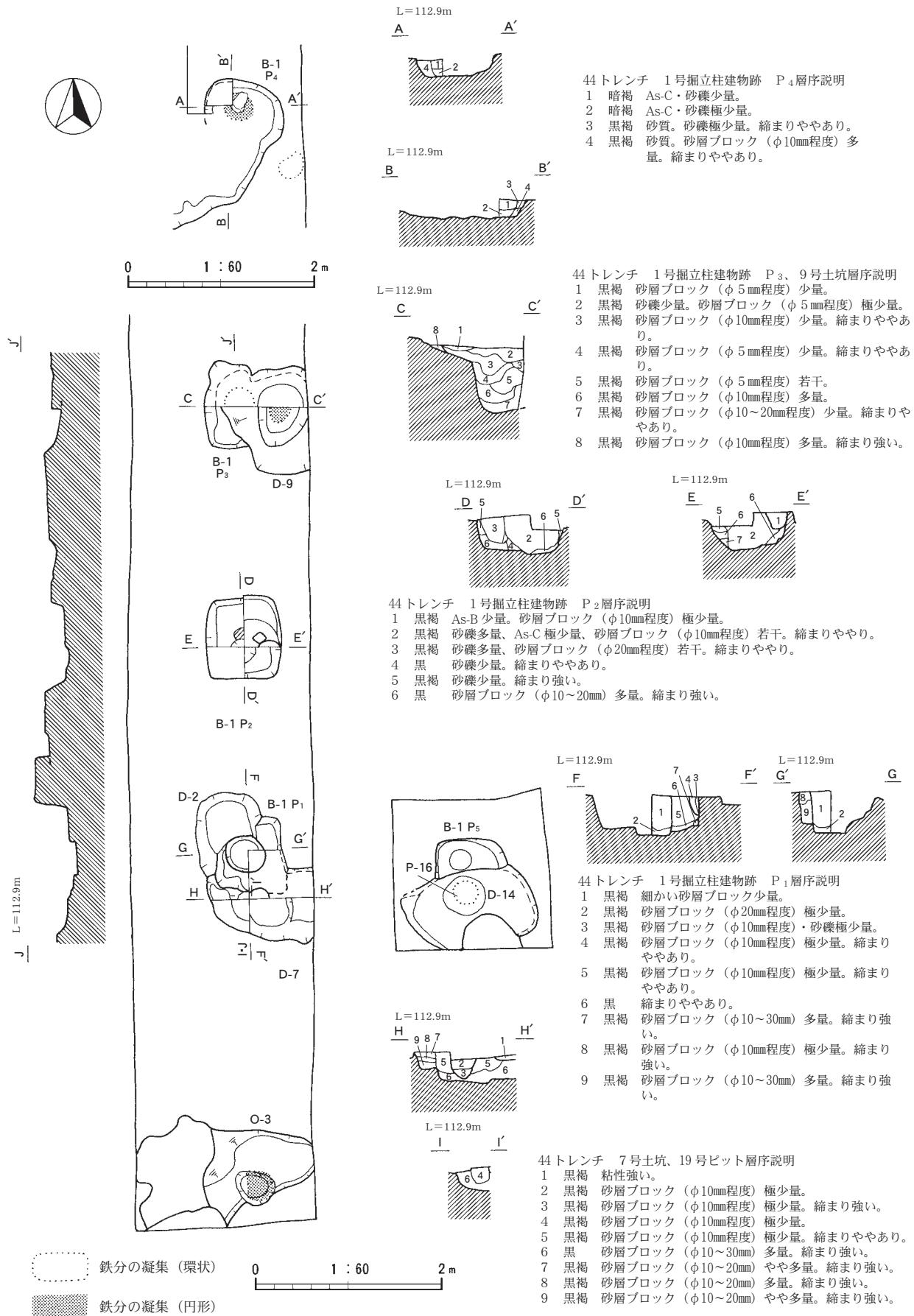


Fig.24 44号トレンチ各遺構

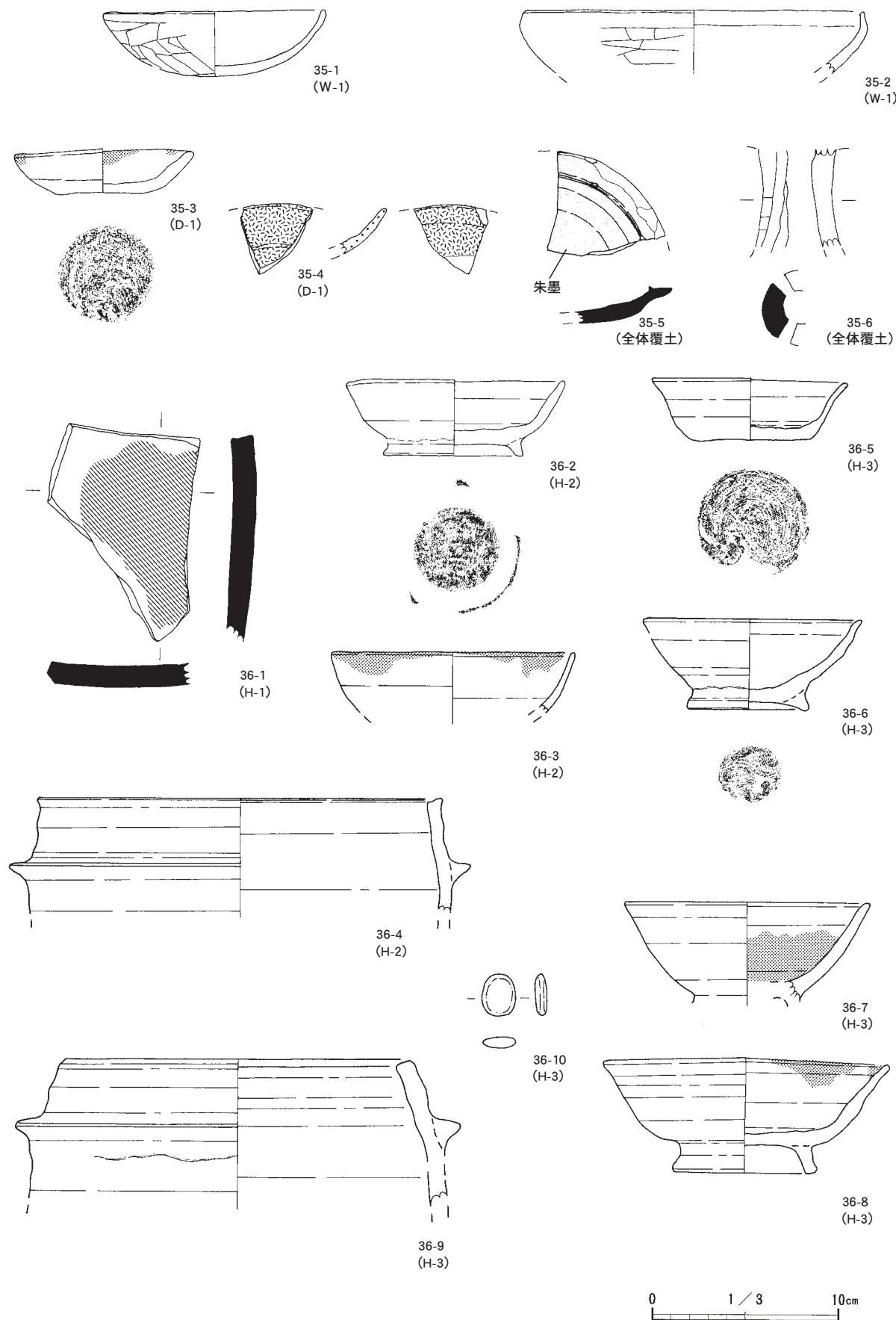


Fig.25 国庁推定地C案周辺の遺物(1)

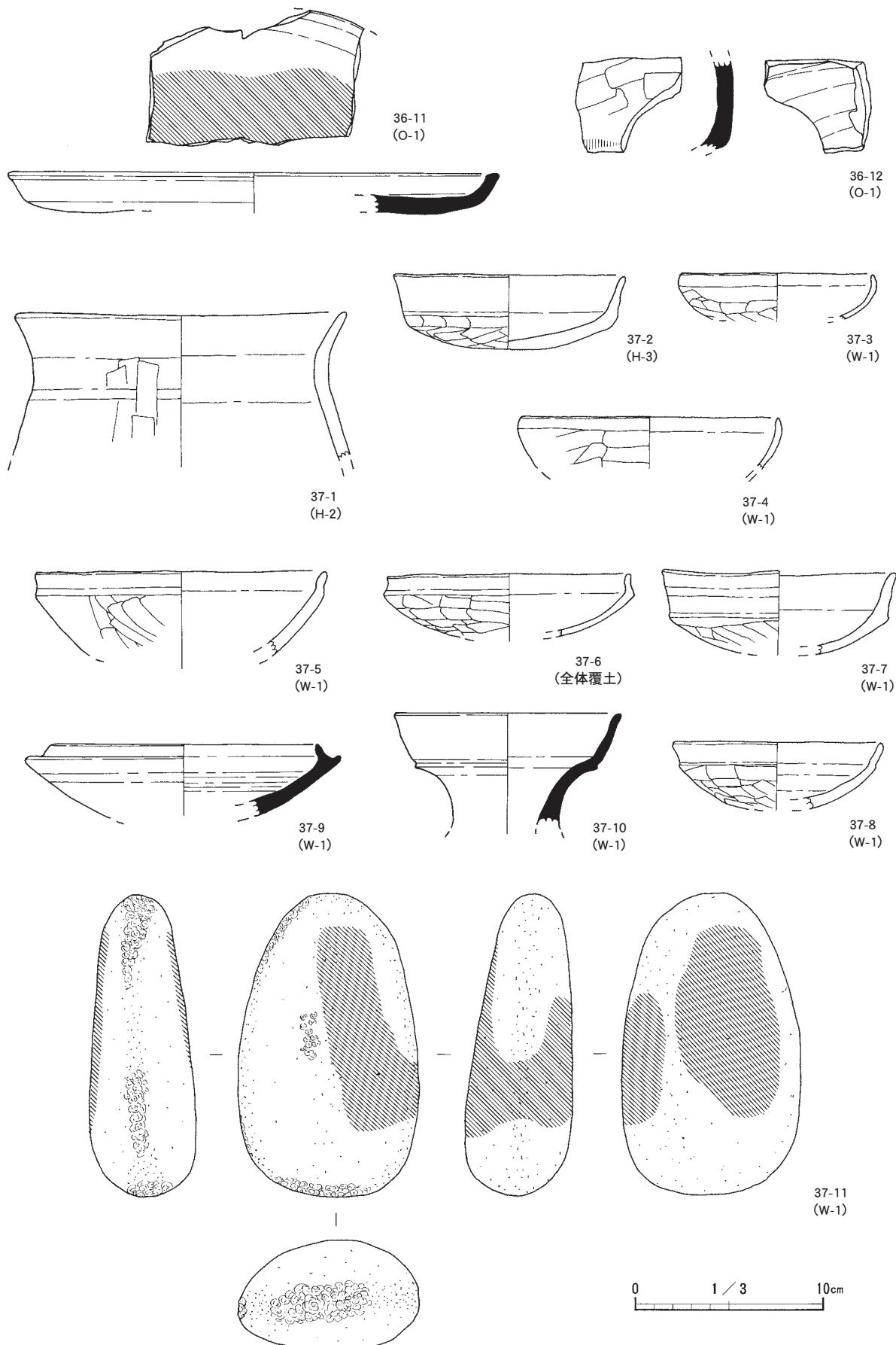


Fig.26 国庁推定地C案周辺の遺物(2)

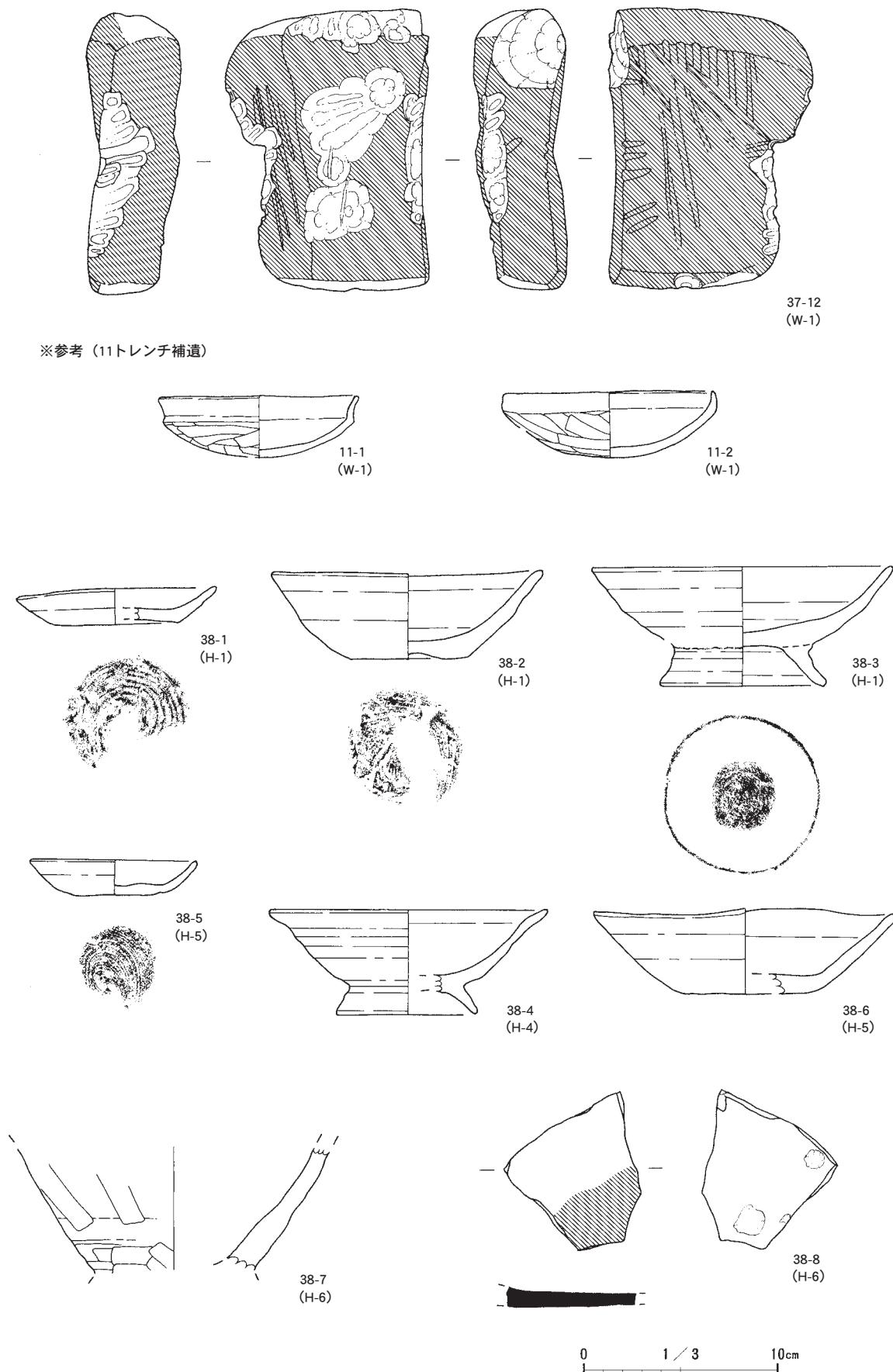


Fig.27 国府推定地C案周辺の遺物(3)

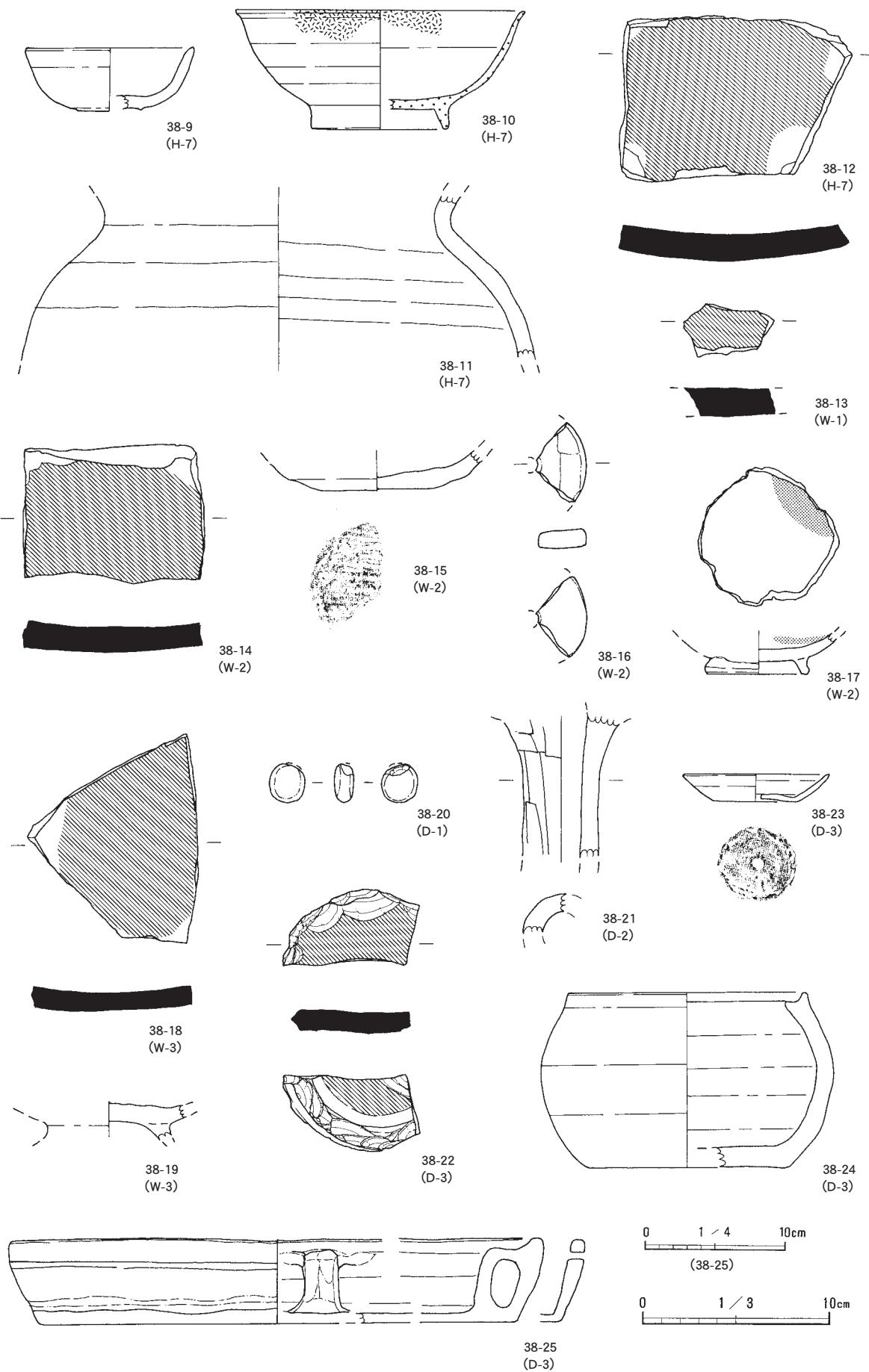


Fig.28 国府推定地C案周辺の遺物(4)

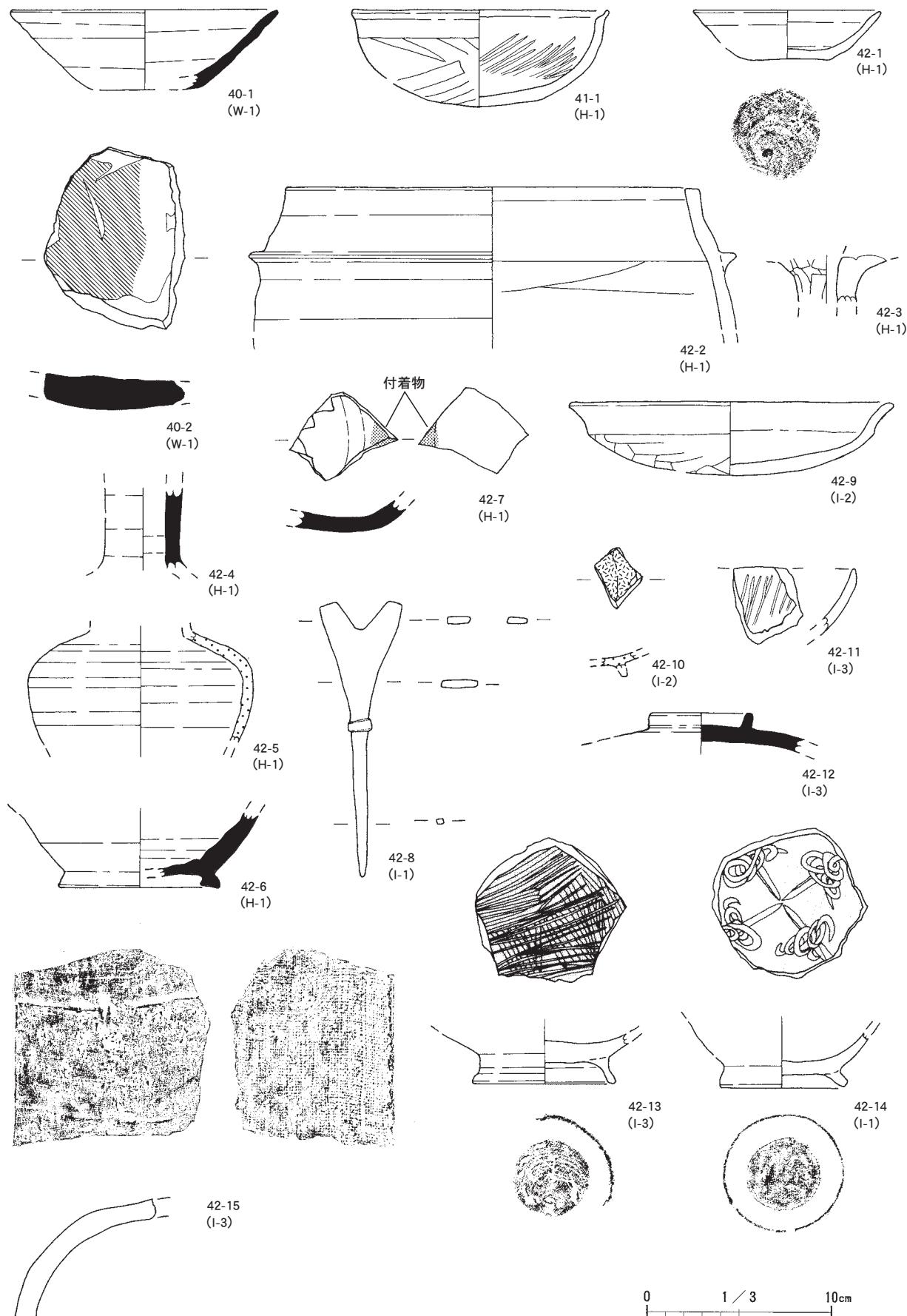


Fig.29 区画溝・元総社小学校周辺の遺物

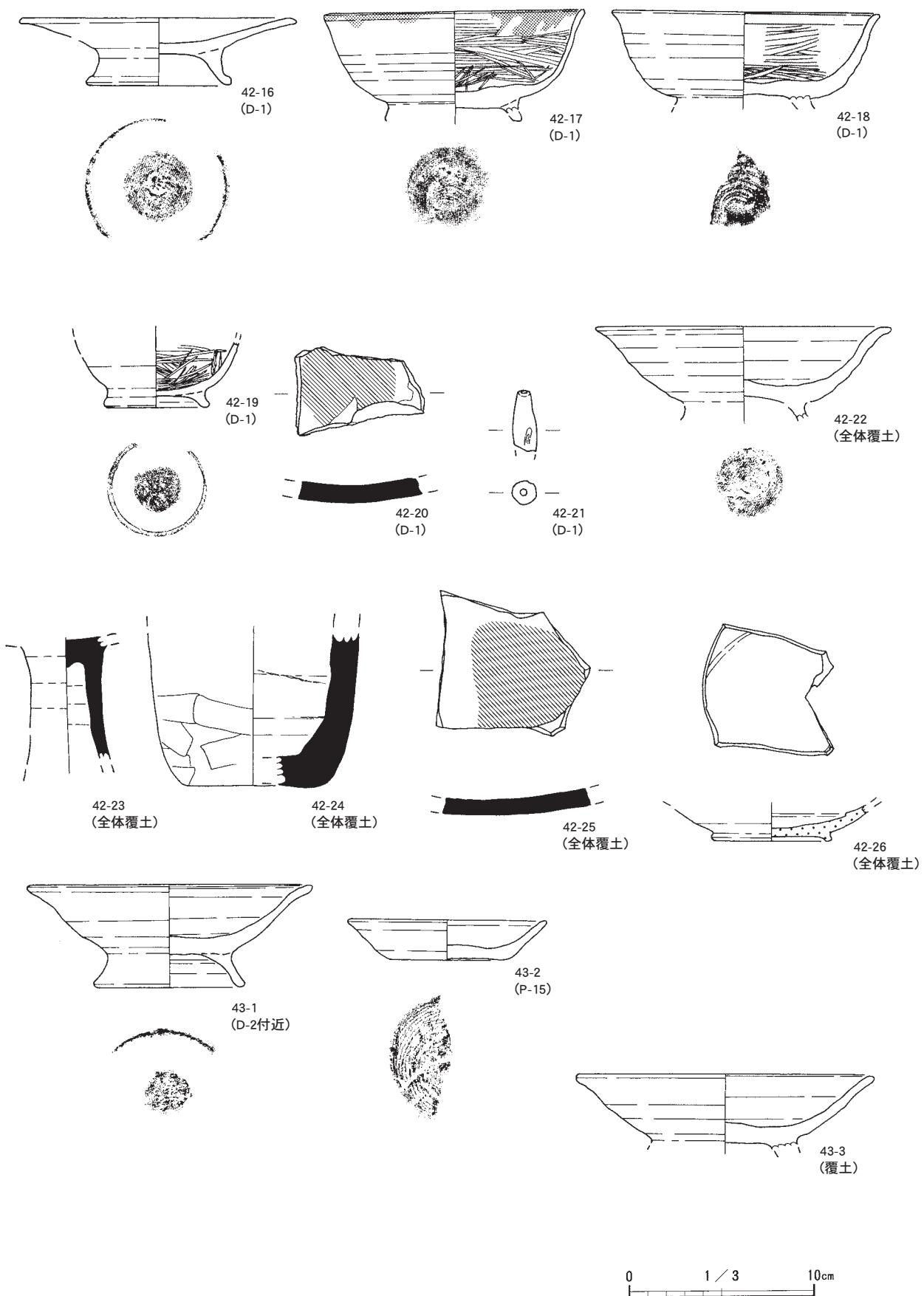


Fig.30 元総社小学校周辺の遺物(2)

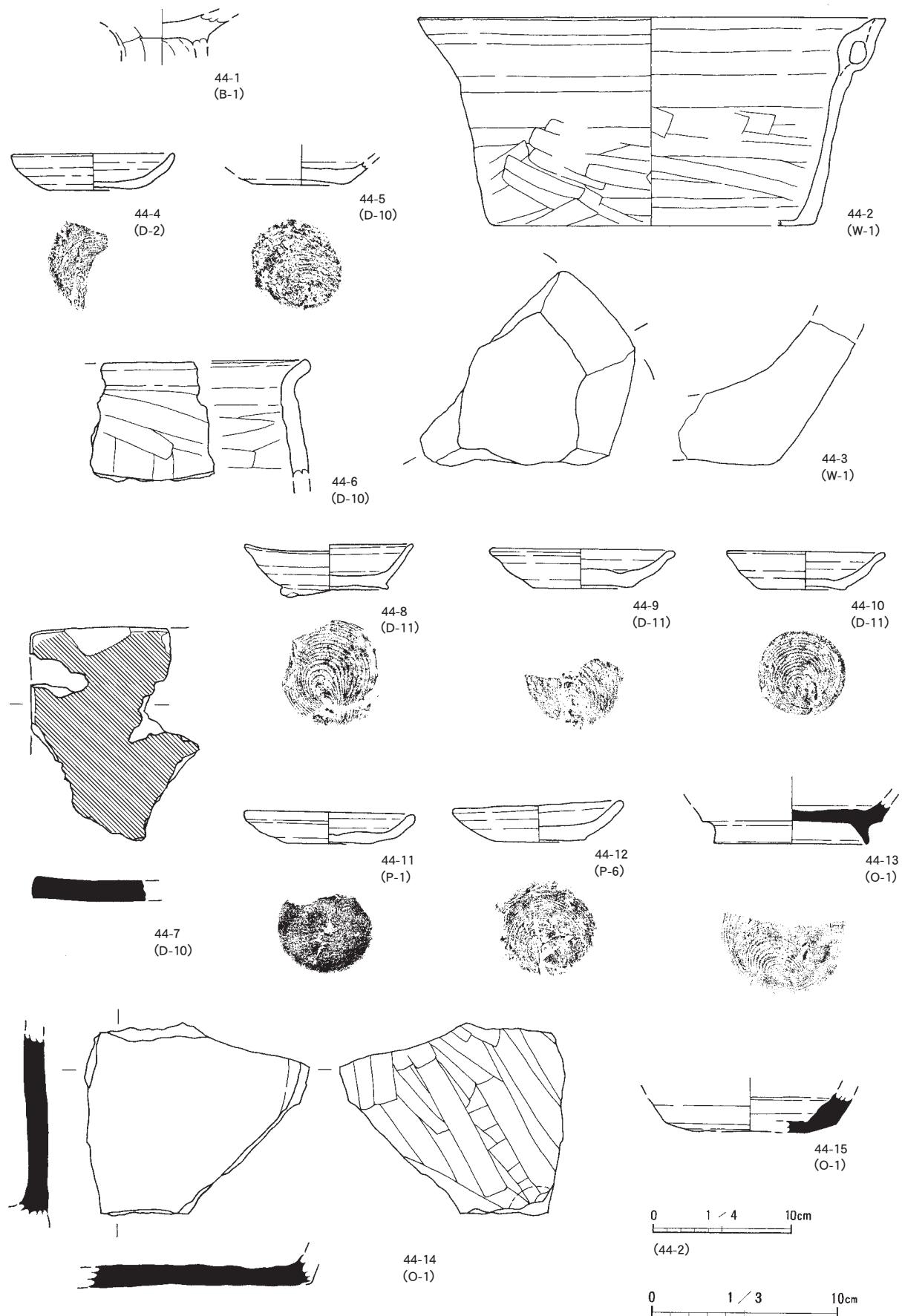
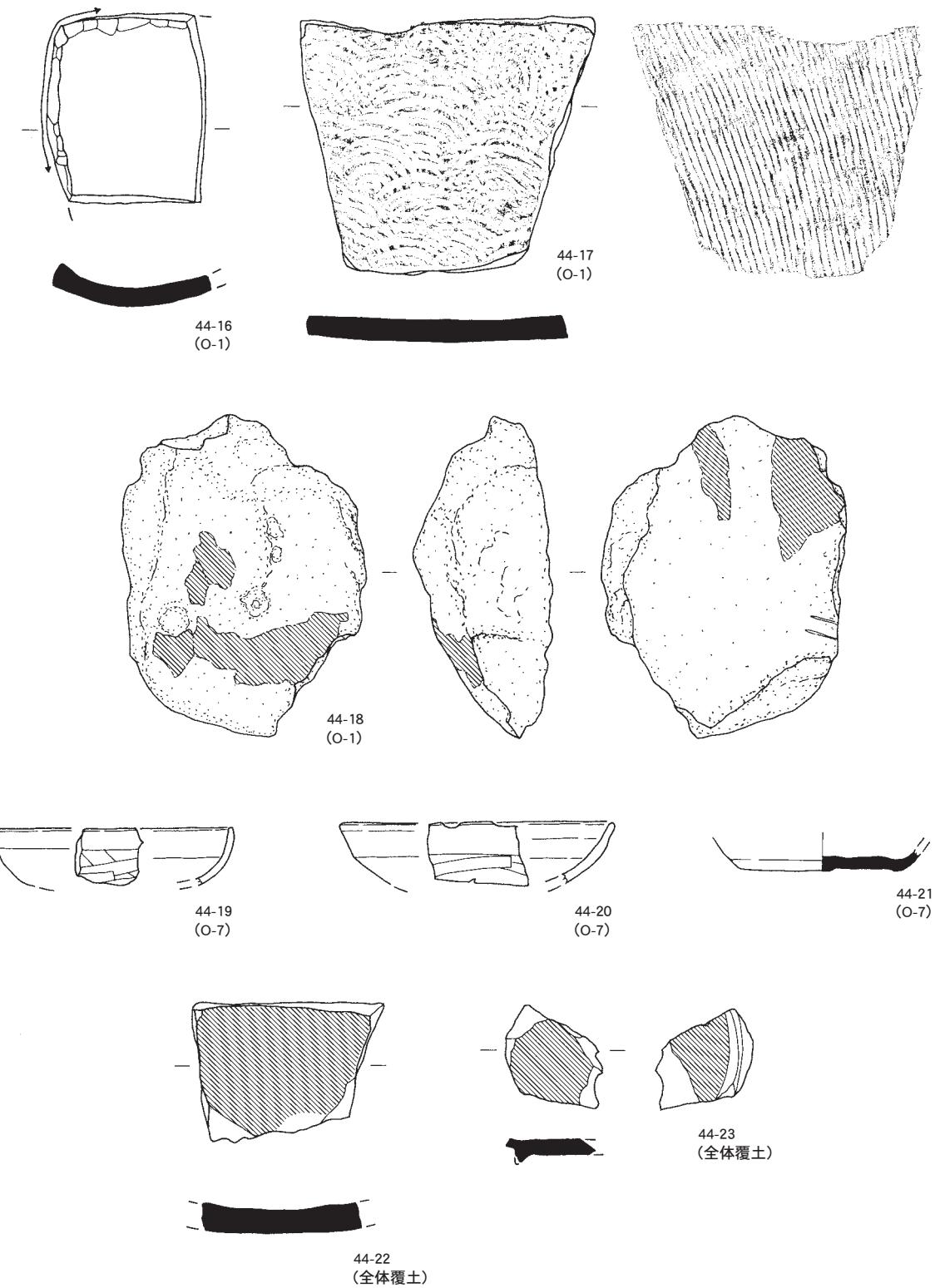


Fig.31 元総社小学校周辺の遺物(3)



0 1 / 3 10cm

Fig.32 元総社小学校周辺の遺物(4)

Tab. 3 井戸跡・土坑・ピット・落ち込み 計測表

35トレンチ

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P-1	X221 Y203	30.0	24.0	38.0	楕円形	なし。	
P-2	X221 Y204	53.0	(25.0)	23.0	円形?	なし。	1号建物跡と重複。
P-3	X221 Y204	21.0	20.0	23.5	円形	須恵器小片	覆土にAs-B多量。
P-4	X221 Y204	28.0	(13.0)	39.0	楕円形	なし。	覆土にAs-B多量。
P-5	X221 Y204	27.0	20.0	31.5	楕円形	土師器・酸化焰焼成須恵器小片	覆土にAs-B多量。
P-6	X221 Y204	34.0	34.0	46.0	円形	なし。	覆土にシルト質土多量。
P-7	X222 Y204	[30.0]	[30.0]	41.0	円形	なし。	
P-8	X222 Y204	33.0	33.0	32.5	円形	なし。	
P-9	X222 Y204	40.0	[35.0]	22.0	円形	土師器小片	
P-10	X222 Y203	34.0	28.0	26.0	楕円形	なし。	
P-11	X222 Y203	42.0	42.0	27.0	円形	なし。	
P-12	X221 Y203	30.0	24.0	44.5	楕円形	なし。	
P-13	X222 Y204	48.0	45.0	19.5	円形	なし。	
P-14	X222 Y204	—	—	—	円形?	なし。	一部のみ検出
P-15	X222 Y204	—	—	—	円形?	なし。	一部のみ検出
P-16	X222 Y203・204	—	—	—	円形	なし。	一部のみ検出
P-17	X221 Y204	30.0	22.0	38.5	楕円形	なし。	
D-1	X221・222 Y204	(227.0)	102.0	9.5	楕円形	土師器破片、須恵器破片、酸化焰焼成須恵器破片及びその破片、白磁破片、羽口破片	

1号堅穴状遺構

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	南東隅	30.0	28.0	14.0	円形	なし。	
P ₂	北壁寄り	54.0	33.0	12.16	楕円形	なし。	

36トレンチ

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
I-1	X223 Y209	[155.0]	—	—	円形	内耳鍋破片。	中世以後。
D-1	X224 Y209	104.0	71.0	17.0	方形	なし。	
D-2	X223・224 Y208	(165.0)	94.0	11.0	方形	土師器(壺)、須恵器(甕、盤)、酸化焰焼成須恵器(壺、椀)破片。	
D-3	X223 Y208・209	(80.0)	[64.0]	9.5	方形	羽釜破片。	
D-4	X223・222 Y209	120.0	100.0	34.0	方形	土師器(壺)、酸化焰焼成須恵器(壺)破片。	
D-5	X222 Y208	[100.0]	[70.0]	14.5	方形	なし。	
O-1	X223・224 Y208	(345.0)	(229.0)	79.5	不定形	土師器(壺)、須恵器(甕、盤、瓶)、酸化焰焼成須恵器(壺、椀)破片。	古代か。

1号住居跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	南西隅	82.0	60.0	13.0	方形	なし。	

3号住居跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	南西隅	76.0	60.0	27.5	楕円形	羽釜胴部破片、酸化焰焼成須恵器椀	

37トレンチ

2号住居跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	北東	32.0	(23.0)	33.0	円形?	なし。	
P ₂	北東	27.0	(15.0)	29.5	円形?	なし。	
P ₃	北東	32.0	32.0	27.0	円形	なし。	
P ₄	南東	26.0	21.0	(23.0)	円形	なし。	
P ₅	南東	30.0	24.0	27.0	円形	なし。	
P ₆	南東	46.0	45.0	46.5	方形	なし。	貯蔵穴。

第1部 平成27年度範囲内容確認調査報告

3号住居跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	南東	(27.0)	(25.0)	51.5	円形	なし。	
P ₂	南東	50.0	(45.0)	29.5	方形	土師器(壺、甕)破片。軟質土器破片。	貯蔵穴。

土坑・井戸・ピット

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
I-1	X225 Y216	94.0	(44.0)	—	円形	軟質土器破片。	近世か。
D-1	X224 Y216・217	(102.0)	80.0	46.5	方形	なし。	
D-2	X224 Y216・217	(85.0)	64.0	20.0	方形	なし。	
D-3	X224 Y216	(100.0)	110.0	78.5	方形	土師器(甕)、軟質土器、陶磁器破片。	近世か。
D-4	X224 Y215	(108.0)	(93.0)	—	円形	なし。	
P-1	X225 Y219	35.0	35.0	38.5	方形?	なし。	
P-2	X225 Y217	43.0	38.0	21.0	円形	なし。	
P-3	X225 Y217	41.0	37.0	19.0	円形	なし。	
P-4	X225 Y217	33.0	25.0	13.0	円形	なし。	
P-5	X224 Y217	(20.0)	33.0	19.0	円形	なし。	
P-6	X224 Y217	30.0	22.0	30.0	円形	なし。	
P-7	X225 Y215	27.0	22.0	—	円形	なし。	
P-8	X225 Y215	37.0	37.0	27.5	方形	なし。	

38トレンチ

1号住居跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	南西	66.0	—	25.0	円形	なし。	

1号掘立柱建物跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	X236 Y223	70.0	60.0	29.5	円形	なし。	底部に柱の当たりあり。 旧P-12。
P ₂	X235 Y224	40.0	(17.0)	55.0	円形	なし。	旧P-17。
P ₃	X235 Y224	[72.0]	(45.0)	40.0	円形	なし。	底部に柱の当たりあり。 覆土に締まりあり。 旧P-16。
P ₄	X235 Y223	(55.0)	50.0	55.0	楕円形	なし。	底部に柱の当たりあり。 旧P-2。
P ₅	X235 Y223	56.0	(21.0)	67.0	円形	土師器(石田川式、壺)破片、酸化焰焼成須恵器(壺)破片	底部に柱の当たりあり。 旧P-3。
P ₆	X235 Y223	50.0	(25.0)	62.0	円形	なし。	旧P-4。
P ₇	X235 Y223	60.0	45.0	55.0	楕円形	なし。	旧P-9。

2号掘立柱建物跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	X234 Y223	23.0	(10.0)	61.5	円形	なし。	旧P-6。
P ₂	X235 Y224	23.0	(14.0)	—	円形	なし。	旧P-15。

土坑・ピット

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
D-1	X236・237 Y223	19.2	16.4	95.5	方形	土師器破片、須恵器破片、土師質土器破片、石製品(碁石)。	古代(10世紀代)。
D-2	X236 Y223	[100.0]	92.0	24.0	円形	土師器(壺、放射状暗文を有する壺?)、甕破片、須恵器(蓋、甕)破片、土師質土器(高壺)破片。	古代(10世紀代)。
D-3	X237 Y223	[300.0]	207.0	69.0	楕円形	土師器破片、須恵器破片、転用硯破片、土師質土器破片、軟質土器破片、陶器破片、磁器破片。	底面に方形の窪み。 近世以後。
P-1	X235 Y223				円形	なし。	覆土の締まり強い。
P-2	欠番						1号掘立柱建物P _{4o} 。
P-3	欠番						1号掘立柱建物P _{5o} 。
P-4	欠番						1号掘立柱建物P _{6o} 。

V 遺構と遺物

P-5	X234・235 Y223	48.0	42.0	(35.0)	円形	なし。	
P-6	欠番						3号掘立柱建物 P _{1o} 。
P-7	X237 Y223	55.0	50.0	30.0	円形	なし。	一部の覆土が締まる。
P-8	X234 Y223	45.0	(25.0)	67.5	楕円形	なし。	
P-9	欠番						1号掘立柱建物 P _{7o} 。
P-10	X236 Y223	[100.0]	[100.0]	33.0	円形？	なし。	
P-11	X236 Y223	55.0	45.0	19.5	円形	なし。	覆土の締まり強い。 1号掘立柱建物に関連する柱？
P-12	欠番						1号掘立柱建物 P _{1o} 。
P-13	X235 Y223	42.0	35.0	55.0	円形	酸化焰焼成須恵器(坏)破片、羽口破片。	
P-14	X235 Y223	28.0	25.0	45.0	円形	なし。	
P-15	欠番						3号掘立柱建物 P _{2o} 。
P-16	欠番						1号掘立柱建物 P _{3o} 。
P-17	欠番						1号掘立柱建物 P _{2o} 。
P-18	X235 Y224	20.0	16.0	—	円形	なし。	
P-19	X235 Y223	22.0	21.0	—	円形	土師器小片、須恵器(甕)破片、黒色土器小片。	覆土は As-C 多量。
P-20	X237 Y223	(45.0)	(25.0)	17.0	円形？	なし。	覆土は As-C 多量。
P-21	X235 Y223	35.0	(33.0)	16.0	円形	なし。	

39トレンチ

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P-1	X242 Y209+3	31.0	(28.0)	37.0	円形	土師器小片。	
P-2	X242 Y209+3	28.0	(25.0)	28.0	円形	なし。	
P-3	X242 Y209+3	37.0	[30.0]	33.0	円形	土師器小片。	
P-4	X242 Y209+3	18.0	18.0	26.0	円形	礫。	
P-5	X242 Y209+3	[30.0]	[25.0]	21.0	円形	土師器小片。	
P-6	X242 Y209+3	(20.0)	18.0	32.5	円形	なし。	

40トレンチ

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
D-1	X206 Y230+2	(60.0)	(20.0)	21.5	方形？	土師器(台付甕、甕)破片、礫。	

41レンチ

1号住居跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	北東	25.0	24.0	—	円形	なし。	
P ₂	北西	30.0	30.0	47.0	円形	なし。	
P ₃	南東	50.0	38.0	51.5	楕円形	なし。	

2号住居跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	北東	20.0	20.0	35.0	円形	なし。	
P ₂	南東	25.0	20.0	21.0	円形	なし。	
P ₃	南東	84.0	58.0	63.5	方形	なし。	貯蔵穴

3号住居跡

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P ₁	南西	35.0	30.0	46.0	円形	なし。	
P ₂	南西	32.0	32.0	29.5	円形	なし。	

1号掘立柱建物跡

遺構名	位 置	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状凝集	その他の凝集	出土遺物	備 考
P ₁	X301 Y304	139.0	133.0	38.5	方形	○	○	○	なし。	底面にやや窪みあり。
P ₂	X302 Y304	95.0	[102.0]	45.0	方形	○	○	—	なし。	底面に窪みあり。

第1部 平成27年度範囲内容確認調査報告

P ₃	X303	Y304	122.0	106.0	48.5	方形	○	○	—	なし。	底面に窪みあり。
P ₄	X303	Y304	100.0	96.0	35.5	方形	○	○	—	なし。	底面に窪みあり。
P ₅	X304	Y304	134.0	115.0	43.0	方形	○	○	—	なし。	
P ₆	X305	Y304	(128.0)	(103.0)	31.0	方形	○	○	—	なし。	底面一部が硬化。
P ₇	X305	Y304・305	137.0	157.0	30.5	楕円形	○	○	—	なし。	底面に窪みあり。
P ₈	X305	Y304・305	103.0	115.0	20.5	方形	○	○	—	なし。	柱痕確認。
P ₉	X305	Y305	140.0	112.0	34.0	楕円形	△	○	○	なし。	柱穴はくびれる形状。
P ₁₀	X304	Y305	143.0	135.0	39.5	方形	○	○	—	なし。	
P ₁₁	X303	Y305	160.0	128.0	40.5	長方形	○	○	—	なし。	底面に窪みあり。
P ₁₂	X303	Y305	168.0	132.0	36.5	楕円形	○	—	○	なし。	底面に窪みあり。
P ₁₃	X302	Y305	110.0	112.0	37.0	方形	○	○	○	なし。	
P ₁₄	X301	Y305	131.0	[134.0]	(6.0)	方形	○	○	○	なし。	
P ₁₅	X301	Y304・305	118.0	(123.0)	(18.5)	方形	○	○	○	なし。	
P _{16-a}	X301	Y304	(85.0)	(105.0)	28.5	方形？	—	○	—	なし。	
P _{16-b}	X301	Y304・305	(39.0)	(35.0)	30.5	円形	—	—	—	土師器片	

その他の柱穴

遺構名	位 置	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状凝集	その他の凝集	出土遺物	備 考
	X306 Y304・305	98.0	94.0	10.0	方形	○	○	—	なし。	

ピット

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
P-1	X304・305 Y304	76.0	67.0	89.0	円形	なし。	
P-2	X302 Y304	58.0	[50.0]	47.0	円形	なし。	

42トレンチ

土坑・井戸・ピット

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
I-1	X294 Y313	178.0	177.0	—	円形	須恵器(蓋、壺、甕)破片、陶器小片、軟質土器小片、鉄鏃。	中世。
I-2	Y296 Y313・314	175.0	(150.0)	—	円形	土師器小片、須恵器(蓋、壺、甕)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、碗、羽釜)破片。	古代?
I-3	Y297・298 Y313	185.0	182.0	—	円形	土師器(石田川式、壺)および小片、須恵器(蓋、壺、甕)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、碗、羽釜)破片、黑色土器(碗)破片、灰釉陶器小片、綠釉陶器(皿)破片。	古代。
D-1	X295 Y313・314	150.0	93.0	36.0	楕円形	埴輪(円筒)破片、土師器(甕)破片、須恵器(蓋、甕、広口壺)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、碗、羽釜、土釜?、托?)破片、黑色土器(碗)、灰釉陶器(皿)破片。	
D-2	X294・295 Y313・314	(60.0)	[60.0]	11.5	楕円形	酸化焰焼成須恵器小片。	
D-3	X294 Y313	(70.0)	(65.0)	15.5	楕円形	酸化焰焼成須恵器(壺、碗)破片。須恵器(壺、瓶)破片。	
D-4	X294 Y314	75.0	50.0	25.5	楕円形	なし。	
P-1	X294・295 Y314	(35.0)	40.0	13.0	円形	なし。	
P-2	X296 Y313	(45.0)	(40.0)	14.0	円形	酸化焰焼成須恵器(壺、羽釜)破片。	
P-3	X296 Y313	55.0	44.0	18.0	楕円形	なし。	
P-4	X296 Y313	65.0	41.0	9.5	楕円形	土師器小片。須恵器小片。	
P-5	X295・296 Y313	85.0	45.0	14.0	楕円形	酸化焰焼成須恵器(碗)破片。	
P-6	X296 Y314	50.0	40.0	18.5	円形	なし。	
P-7	X296 Y313	51.0	50.0	23.0	円形	須恵器(高盤)破片、酸化焰焼成須恵器(壺)破片。瓦破片。小円碟。	
P-8	X295 Y313	26.0	25.0	13.0	円形	土師質土器(壺?)破片。	
P-9	X294 Y313	70.0	(45.0)	44.5	円形	土師器小片。須恵器小片。酸化焰焼成須恵器(壺)破片。黑色土器(碗)破片。灰釉陶器小片。	
P-10	X294 Y313	(40.0)	(30.0)	25.0	円形	なし。	
O-1	X295 Y313	170.0	130.0	55.0	不定形	土師器(甕)、須恵器(蓋、碗、盤、甕、広口壺)破片、酸化焰焼成須恵器(壺、碗、羽釜)破片、黑色土器(碗)破片、須恵器転用硯?、土錐。瓦小片。灰釉陶器(碗)破片。	

43トレンチ

土坑・ピット

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備 考
D-1	X224 Y274	(78.0)	55.0	12.0	橢円形	酸化焰焼成須恵器(壺?)破片。	
D-2	X224 Y276	52.0	52.0	34.0	橢円形	須恵器(甕)破片。	
P-1	X224 Y274	(75.0)	(45.0)	54.0	円形	酸化焰焼成須恵器(壺)破片。	2段になっている。
P-2	X224 Y274	28.0	25.0	17.0	方形	なし。	
P-3	X224 Y274	38.0	(28.0)	17.0	橢円形	酸化焰焼成須恵器小片。	
P-4	X224 Y274	41.0	(32.0)	13.5	橢円形	なし。	
P-5	X224 Y274	32.0	30.0	12.5	円形	土師器(壺)破片。	
P-6	X224 Y274	29.0	25.0	15.0	円形	土師器(壺)破片、酸化焰焼成須恵器(椀)破片。	
P-7	X224 Y274	22.0	20.0	15.5	円形	なし。	
P-8	X224 Y274	26.0	22.0	21.5	円形	なし。	
P-9	X224 Y274	27.0	23.0	25.0	方形?	なし。	
P-10	X224 Y274	16.0	12.0	31.0	橢円形	なし。	
P-11	X224 Y274	20.0	17.0	24.5	円形	なし。	
P-12	X224 Y274	22.0	20.0	17.0	円形	なし。	
P-13	X224 Y274	15.0	15.0	32.0	円形	なし。	
P-14	X224 Y274	20.0	19.0	14.0	円形	なし。	
P-15	X224 Y274	17.0	17.0	15.5	円形	酸化焰焼成須恵器(椀)破片。	
P-16	X223 Y274	23.0	21.0	26.5	円形?	なし。	
P-17	X223 Y274	30.0	25.0	48.5	円形	酸化焰焼成須恵器(壺、椀)破片。	
P-18	X223 Y274	30.0	24.0	61.0	円形	なし。	
P-19	X223 Y274	20.0	15.0	34.5	橢円形	なし。	
P-20	X223 Y274	26.0	23.0	26.0	円形	なし。	
P-21	X224 Y274	25.0	25.0	21.5	円形	なし。	
P-22	X224 Y274	22.0	22.0	24.5	円形	なし。	
P-23	X224 Y274	19.0	15.0	21.5	円形	なし。	
P-24	X223 Y275	29.0	25.0	25.0	円形	なし。	
P-25	X224 Y275	44.0	34.0	24.0	橢円形	なし。	
P-26	X224 Y275	24.0	20.0	28.5	方形	なし。	2段になっている。
P-27	X223・224 Y275	25.0	25.0	(17.0)	方形	なし。	
P-28	X224 Y275	22.0	22.0	(17.0)	円形	なし。	
P-29	X224 Y275	35.0	34.0	43.0	円形	なし。	
P-30	X224 Y276	20.0	(11.0)	—	円形	なし。	
P-31	X223・224 Y276	18.0	(13.0)	34.0	円形	なし。	

44トレンチ

1号掘立柱建物跡

遺構名	位 置	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状凝集	その他の凝集	出土遺物	備 考
P ₁	X234 Y277・278	79.0	81.0	38.0	方形	—	—	—	土師器高壺破片。	P-18が柱痕か。
P ₂	X234 Y277	80.0	90.0	35.0	方形	○	○	—	土師器小片、須恵器小片。	柱痕、柱の当たりあり。
P ₃	X234 Y276	(50.0)	95.0	(10.0)	方形?	—	—	—	土師器小片、須恵器小片。	
P ₄	X234 Y276	85.0	(75.0)	20.0	橢円形	—	—	○	土師器小片、動物の歯。	底面近くに礫あり。
P ₅	X235 Y277・278	77.0	(44.0)	—	方形	—	—	—	なし。	柱痕あり。
P ₆	X234 Y275	—	—	—	—	—	—	○	なし。	柱の当たりか。

土坑・ピット・落ち込み

遺構名	位置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	重複関係	主な出土遺物	備 考
D-1	X234 Y278	50.0	(15.0)	20.0	方形?	(古)D-3, O-2	土師器小片、須恵器小片、酸化焰焼成須恵器(壺)破片、瓦破片。	中世以後か。

第1部 平成27年度範囲内容確認調査報告

D-2	X234	Y277・278	[80.0]	73.0	37.5	楕円形	(古)B-1のP ₁ , P-2, 18	土師器小片、須恵器 小片、酸化焰焼成須 恵器(坏)破片。土 師質土器(土釜)破 片、灰釉陶器小片。	隅丸方形に近い。
D-3	X234	Y278	(55.0)	[65.0]	12.5	円形?	(新)D-1, (古)O-2, 3	土師器小片、須恵器 小片、酸化焰焼成須 恵器(坏)破片。	中世以後か。
D-4	X234	Y277	1.90	(0.79)	30.0	楕円形	(新)P-10, (古)O-4	須恵器(坏、甕) 破片、酸化焰焼成須 恵器(坏、椀)破片。	中世。
D-5	X234	Y276・277	1.12	0.70	9.0	楕円形	(古)O-4, 6	須恵器少片。酸化焰 焼成須恵器(坏)破 片。	
D-6	X234	Y277	(1.60)	(1.25)	14.0	楕円形	(新)P-1, 2	酸化焰焼成須恵器 (羽釜?)破片。	
D-7	X234	Y278	(1.15)	(70.0)	28.0	楕円形	(新)P-19, (古)B-1 のP ₁ , D-8	土師器(坏)破片。	
D-8	X234	Y278	—	—	—	楕円形?	(新)B-1のP ₁ , D-7	なし。	
D-9	X234	Y276	1.14	(0.95)	75.0	円形	(古)B-1のP ₃	なし。	底面に鉄分凝集あり。
D-10	X234	Y274・275	[2.80]	[2.40]	—	円形	(新)W-1, (古)O-7	須恵器(蓋、坏、甕) 破片。酸化焰焼成須 恵器(坏、椀、羽釜) 破片、土師質土器 (土釜)破片、須 恵器転用硯破片。灰釉 陶器破片。瓦破片。	井戸跡の可能性あり。 覆土に灰および焼土を 多く含む。
D-11	X234	Y277・278	—	—	20.0	楕円形?	(新)W-1, (不)D-12	酸化焰焼成須恵器 (坏)破片。	
D-12	X234	Y278	(0.70)	(1.14)	9.5	楕円形?	(新)W-1, (不)D-11	なし。	
D-13	X235	Y278	(0.65)	0.45	—	楕円形	(古)D-14, P-17	なし。	近世以後か。
D-14	X235	Y278	1.40	[0.80]	—	楕円形	(新)D-13, P-16, 17, (古)B-1のP ₅	なし。	
D-15	X235	Y277	—	—	—	不明	不明(東側拡張トレ ンチで一番古い。)	なし。	掘り込まれていること から土坑とした。
P-1	X234	Y277	20.0	10.0	19.5	円形	(古)D-6	酸化焰焼成須恵器 (坏)破片、瓦破片。	
P-2	X234	Y277	62.0	[50.0]	17.0	円形	(新)D-2, (古)D-6	土師器(坏)破片。	
P-3	X234	Y277	40.0	[32.0]	17.0	円形	(不)P-4	土師器小片、須恵器 小片。	
P-4	X234	Y277	45.0	[40.0]	13.0	円形	(不)P-4	土師器小片、須恵器 小片。	
P-5	X234	Y277	33.0	30.0	11.5	円形	なし。	なし。	
P-6	X234	Y277	40.0	(23.0)	11.0	円形	(古)O-5	須恵器(坏)破片、酸 化焰焼成須恵器(坏) 破片。	
P-7	X234	Y277	25.0	15.0	11.5	円形	なし。	なし。	
P-8	X234	Y277	15.0	12.0	13.0	方形	なし。	なし。	
P-9	X234	Y278	21.0	18.0	10.0	方形	(古)O-1	なし。	
P-10	X234	Y277	12.0	11.0	12.0	方形	(古)D-4, O-4	なし。	
P-11	X234	Y277	10.0	10.0	—	方形	(古)B-1のP ₂	なし。	
P-12	X234	Y276	16.0	15.0	13.0	方形	なし。	なし。	
P-13	X234	Y276	15.0	15.0	10.0	方形	なし。	なし。	
P-14	X234	Y275	—	—	—	円形?	なし。	なし。	地下式礎石あり。
P-15	X234	Y275	—	—	—	円形?	なし。	なし。	地下式礎石あり。
P-16	X235	Y278	45.0	40.0	—	円形	なし。	なし。	柱痕あり。
P-17	X235	Y278	—	—	—	円形?	なし。	なし。	地下式礎石あり。
P-18	X234	Y277・278	40.0	40.0	45.0	円形	(不)B-1のP ₁	なし。	B-1のP ₁ の柱痕か。
P-19	X234	Y278	20.0	(12.0)	24.0	円形	(古)D-7	なし。	
O-1	X234	Y277・278	2.30	1.10	25.0	不定形	(新)P-9	土師器(坏)破片。須 恵器(蓋、坏、甕、 盤?)破片、灰釉陶 器小片。須恵器転用 硯。砥石。	
O-2	X234	Y278	2.17	(80.0)	8.5	不定形	(新)D-1, 3, (不)O- 3	土師器小片。須 恵器小片。砥石。	

O-3	X234	Y278	(1.35)	(1.00)	9.5	不定形	(新)D-3, (不)O-2	土師器小片・須恵器(蓋、甕)破片、酸化焰焼成須恵器(羽釜)破片。	一部に鉄分の沈着した箇所あり。
O-4	X234	Y277	[3.50]	[0.90]	16.0	不定形	(新)D-4, 5, P-10	土師器小片・須恵器(蓋、坏、甕)破片。	
O-5	X234	Y276	(1.50)	(1.00)	8.5	不定形	(新)P-6	土師器小片・須恵器(甕)破片。	
O-6	X234	Y277	(1.00)	(1.00)	9.5	不定形	(新)D-5	なし。	
O-7	X234	Y275・276	[4.30]	[3.30]	31.0	不定形	(新)B-1のP ₄ , D-10, P-14, 15	土師器(坏、甕)破片・須恵器(蓋、坏、甕)破片・酸化焰焼成須恵器(坏)破片。灰釉陶器(皿?)破片。瓦破片。	一部に鉄分の沈着した箇所あり。

Tab. 4 遺物観察表

35トレンチ

番号	出土遺構層位	器種名	①口径 ③底径	②器高 ④つまみ径	①胎土 ③色調	②焼成 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
35-1	W-1 覆土	土師器 坏	①[11.8] ③—	②[3.4]	①粗粒 ③橙	②良好 ④1/4	体部外面は窓削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫で調整。		
35-2	W-1 覆土	土師器 坏	①[18.2] ③—	②(3.3)	①細粒 ③橙	②良好 ④	体部外面は窓削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫で調整。		
35-3	D-1 覆土	土師質 坏	① 9.5 ③ 4.7	② 2.4	①粗粒 ③浅黄橙	②良好 ④完形	体部・口縁部は輶軸整形。底部は回転糸切り。内面口縁部に煤こげあり。	1	
35-4	D-1 覆土	白磁 皿	① — ③ —	② —	①細粒 ③灰白	②良好 ④破片	体部・口縁部は輶軸整形。釉薬は内面全体・外面部に施す。内面の底部から口縁部への立ち上がりが段状となる。		
35-5	トレンチ 覆土	須恵器 転用硯	長(5.7) 厚 0.8	幅(1.6)	①細粒 ③褐灰	②良好 ④1/4	須恵器蓋を硯に転用したもの。内面に使用による擦れと朱墨痕あり。		
35-6	トレンチ 覆土	須恵器 高坏	①(1.3) ③—	②(5.4)	①細粒 ③灰白	②良好 ④脚部破片	外面は輶軸整形。透かし窓あり。		

36トレンチ

番号	出土遺構層位	器種名	①口径 ③底径	②器高 ④つまみ径	①胎土 ③色調	②焼成 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
36-1	H-1 床直	須恵器 転用硯	長(10.7) 厚 1.2	幅 7.4	①細粒 ③灰	②良好 ④破片	須恵器甕の破片であるが、内面が摩耗していることから、硯に転用か。	1	
36-2	H-2 覆土	土師質 坏	①[12.2] ③[7.4]	② 4.0	①粗粒 ③浅黄橙	②良好 ④1/3	体部・口縁部は輶軸整形。底面は回転糸切り?の後に整形し、高台を接着。口縁部の内面・外面部に煤こげあり。	覆土・3	
36-3	H-2 覆土	土師質 椀	①[13.0] ③—	②(3.2)	①細粒 ③橙	②良好 ④破片	体部・口縁部は輶軸整形。口縁部の内面・外面部に油煙状の付着物あり。		
36-4	H-2 床直	須恵器 羽釜	①[11.4] ③—	②(6.1)	①細粒 ③橙	②良好 ④破片	体部・口縁部は輶軸整形。その後に鍔を接着して整形。	2・7	酸化焰
36-5	H-3 床直	須恵器 坏	①[10.3] ③ 6.2	② 3.3	①細粒 ③にぶい褐	②良好 ④2/3	体部・口縁部は内面・外面部とも輶軸整形。底部は回転糸切り。	1	酸化焰
36-6	H-3 床直	須恵器 椀	①[11.6] ③ 6.4	② 4.8	①中粒 ③浅黄橙	②良好 ④ほぼ完形	体部は輶軸整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着して整形。器体内面・外面部に煤こげあり。	覆土・3	酸化焰
36-7	H-3 P ₁ 覆土	須恵器 椀	①[13.0] ③—	② 6.7	①細粒 ③浅黄橙	②良好 ④破片	体部・口縁部は輶軸整形。内面に黒色の付着物あり。		酸化焰
36-8	H-3 P ₁ 底部	須恵器 椀	①[15.1] ③[7.7]	② 6.1	①細粒 ③橙	②良好 ④2/3	体部・口縁部は輶軸整形。底部は回転糸切りの後に整形し、高台を接着して整形。	1	酸化焰
36-9	H-3 床直	須恵器 羽釜	①[18.8] ③—	②(7.7)	①細粒 ③明黄橙	②良好 ④底部	体部・口縁部は輶軸整形。その後に鍔を接着して上側だけ整形。	3	酸化焰
36-10	H-3 覆土	小礫 基石?	長 2.1 厚 0.5	幅 1.7	黑色	でチャート製。	扁平で小さな円礫。		
36-11	O-1 覆土	須恵器 高盤	①[25.6] ③—	②(2.1)	①細粒 ③黄灰	②良好 ④坏部	坏部内面はカキ目調整。外面は窓削り。口縁部は輶軸整形。内面に擦れた部分あり。		
36-12	O-1 覆土	須恵器 瓶?	①— ③[11.0]	②(4.6)	①細粒 ③灰灰	②良好 ④破片	体部の内面は輶軸整形、外表面は窓削りで整形。底部からの立ち上がりで外表面に擦れた部分あり。		

37トレンチ

番号	出土遺構層位	器種名	①口径 ③底径	②器高 ④つまみ径	①胎土 ③色調	②焼成 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
37-1	H-2 P ₃ 覆土	土師器 甕	①[17.6] ③—	②(8.0)	①細粒 ③褐	②良好 ④破片	体部外面は縦方向の窓削りで整形。体部の内面および口縁部の内面・外表面は横方向の撫でにより調整。		
37-2	H-3 P ₂ 覆土	土師器 坏	①[12.2] ③—	② 3.9	①細粒 ③橙	②良好 ④2/3	体部外面は窓削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
37-3	W-1 覆土	土師器 坏	①[10.2] ③—	②(2.4)	①細粒 ③橙	②良好 ④破片	体部外面は窓削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		

第1部 平成27年度範囲内容確認調査報告

37-4	W-1 覆土	土師器 壺	①[13.6] ②(2.8) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
37-5	W-1 覆土	土師器 壺	①[15.3] ②(4.4) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
37-6	トレンチ 覆土	土師器 壺	①[12.8] ②(3.3) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
37-7	W-1 覆土	土師器 壺	①[12.4] ②(4.3) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
37-8	W-1 覆土	土師器 壺	①[11.0] ②(4.5) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
37-9	W-1 覆土	須恵器 壺	①[16.6] ②(3.8) ③ —	①細粒 ②良好 ③灰 ④1/3	体部・口縁部の内面・外面上ともに輶轆整形。		
37-10	W-1 覆土	須恵器 はそう	① — ② — ③ —	①細粒 ②良好 ③灰 ④破片	口頸部の破片。内面・外面上ともに輶轆整形。透かし窓あり。		
37-11	W-1 覆土	砥石	長 15.8 厚 5.5	硬質な安山岩製。表裏面に擦痕。両端・片面・片方の縁に敲打痕あり。			
37-12	W-1 覆土	砥石	長 14.3 厚 4.6	砂岩製。表裏面と両側面に擦痕。一部に鑿跡の可能性のある痕跡あり。			

11トレンチ（補遺）

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ③底径 ②器高 ④つまみ径	①胎土 ③色調 ②焼成 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
11-1	W-1 覆土	土師器 壺	①[10.2] ②(3.1) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
11-2	W-1 覆土	土師器 壺	①[10.8] ② 3.3 ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		

38トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ③底径 ②器高 ④つまみ径	①胎土 ③色調 ②焼成 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
38-1	H-1 覆土	須恵器 壺	①[10.2] ② 1.8 ③ 6.1	①細粒 ②良好 ③橙 ④2/3	体部・口縁部は内面・外面上とも輶轆整形。底部は回転糸切り。		酸化焰
38-2	H-1 床直	須恵器 壺	① 13.9 ② 4.6 ③ 6.3	①細粒 ②良好 ③浅黄褐 ④ほぼ完形	体部・口縁部は内面・外面上とも輶轆整形。底部は回転糸切り。	4,5	酸化焰
38-3	H-1 床直	須恵器 椀	①[15.2] ② 6.1 ③ 6.3	①細粒 ②良好 ③にぶい黄褐 ④2/3	体部・口縁部は内面・外面上とも輶轆整形。底部は回転糸切り？の後に整形して高台を接着し整形。	覆土・ 8	酸化焰
38-4	H-4 覆土	須恵器 椀	①[14.2] ② 5.4 ③[7.2]	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部・口縁部は内面・外面上とも輶轆整形。底部は高台を接着して整形。		
38-5	H-5 床直	土師質 壺	①[14.2] ② 5.4 ③[7.2]	①中粒 ②良好 ③橙 ④ほぼ完形	体部・口縁部は内面・外面上とも輶轆整形。底部は回転糸切り。	1	
38-6	H-5 覆土	須恵器 壺	①[15.4] ② 4.3 ③[7.0]	①細粒 ②良好 ③黄橙 ④体部1/2	体部・口縁部は内面・外面上とも輶轆整形。底部は回転糸切りか。		酸化焰
38-7	H-6 覆土	須恵器 鉢	①(6.3) ②(8.2) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部内面は輶轆整形。体部外面は箇削りで整形。		酸化焰
38-8	H-6 覆土	須恵器 蓋	①(6.6) ②(8.0) ③ —	①細粒 ②良好 ③灰 ④破片	内面は撫でによる調整。外面は回転箇削りによる整形。外表面に被熱による破損。内面に擦痕に似たすべすべの部分あり。		
38-9	H-7 覆土	須恵器 椀	①(4.8) ② 3.5 ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部・口縁部は内面・外面上とも輶轆整形。底部は回転糸切り。		酸化焰
38-10	H-7 床直	灰釉陶器 椀	①[15.2] ② 6.3 ③[7.2]	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	体部・口縁部は内面・外面上とも輶轆整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着して整形。釉薬は口縁部内面・外面上に施す。	1	
38-11	H-7 床直	土師質 土釜	① — ②(8.7) ③ —	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④破片	体部内面・外面上とも箇削りで整形・撫でで調整。	覆土・ 3	
38-12	H-7 覆土	須恵器 転用硯	長(8.3) 幅 11.9 厚 1.4	①細粒 ②良好 ③黄灰 ④1/2?	須恵器甕の破片であるが、内面が摩耗していることから、硯に転用か。表面が焼けて黒色化している。		
38-13	W-1 覆土	須恵器 転用硯	長(2.6) 幅(4.6) 厚 1.6	①細粒 ②良好 ③褐灰 ④破片	須恵器甕の破片であるが、内面が摩耗していることから、硯に転用か。		
38-14	W-2 覆土	須恵器 転用硯	長(7.2) 幅(9.4) 厚 1.4	①細粒 ②良好 ③灰白 ④1/2?	須恵器甕の破片であるが、内面が摩耗していることから、硯に転用か。		
38-15	W-2 覆土	須恵器 壺	① — ②(2.0) ③[6.0]	①細粒 ②良好 ③黄灰 ④破片	体部外面は輶轆整形。体部内面は輶轆整形の後に撫でで調整か。底部に敷物の圧痕あり。		酸化焰
38-16	W-2 覆土	紡錘車	径[2.5] 厚 0.9	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④破片	土師器もしくは土師質の土器を素材としている。		
38-17	W-2 覆土	須恵器 壺	① — ②(2.2) ③[5.5]	①細粒 ②良好 ③明黄褐 ④破片	体部は内面・外面上とも輶轆整形。底部は回転糸切り？の後に調整し、高台を接着して整形。体部の内面と外面上に油煙状の物質が付着している。		酸化焰
38-18	W-3 覆土	須恵器 転用硯	長(10.8) 幅(8.7) 厚 1.1	①細粒 ②良好 ③灰 ④破片	須恵器甕の破片であるが、内面が摩耗していることから、硯に転用か。		
38-19	W-3 覆土	須恵器 壺	① — ②(2.0) ③ —	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④破片	底部は内面が輶轆整形し、底面は回転糸切り？の後に調整し、高台を接着して整形。		酸化焰

38-20	D-1 覆土	小礫 基石?	長 2.0 厚 0.9 幅 1.8	黒色でチャート製。扁平で小さな円礫。一部欠損。		
38-21	D-2 覆土	土師質 高坏	① — ②(7.9) ③ —	①中粒 ②良好 ③浅黄橙 ④破片	高坏の脚部の破片。外面は縦方向の箇削りで整形。内面の縦方向の撫で状の痕跡は芯となる棒を抜き取った跡か? 坏部との接合部の外側も縦方向の箇削りで整形。	
38-22	D-3 覆土	須恵器 転用硯	長(4.0) 厚 9.7 幅(6.9)	①細粒 ②良好 ③灰灰 ④破片	須恵器の高台付きの坏もしくは椀の底部を硯に転用したもの。内面側・外側ともに使用により磨耗している。内面側は使用後に周囲を敲いて調整している。	
38-23	D-3 覆土	土師質 かわらけ	①[7.8] ② 1.5 ③ 4.5	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部・口縁部は内面・外側とも輶轆整形。底部は回転糸切り。底部中央を穿孔。	
38-24	D-3 覆土	土師質 火消壺	①(12.6) ② 9.2 ③ —	①細粒 ②良好 ③褐灰 ④破片	体部・口縁部は内面・外側とも輶轆整形。別途蓋が付属するが出土なし。内面底部に油煙が付着している。	
38-25	D-3 覆土	土師質 内耳鍋	長[37.7] 厚[34.0] 幅 6.0	①細粒 ②良好 ③褐灰 ④破片	体部・口縁部は内面・外側ともには横撫でで整形。	

40トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ③底径 ②器高 ④つまみ径	①胎土 ③色調 ②焼成 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
40-1	W-1 覆土	須恵器 坏	①[14.4] ② 4.2 ③[5.8]	①細粒 ②良好 ③灰白 ④1/3	体部は外面内面ともに輶轆整形。底部は回転糸切り。		
40-2	トレンチ 覆土	須恵器 転用硯	①(9.0) ② 7.4 ③ 1.6	①細粒 ②良好 ③黄灰 ④破片	須恵器の甕の破片を硯に転用したもの。内面が使用により磨耗している。		

41トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ③底径 ②器高 ④つまみ径	①胎土 ③色調 ②焼成 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
41-1	H-2 覆土	土師器 坏	①(13.8) ② 5.2 ③ —	①細粒 ②良好 ③明赤褐 ④2/3	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。内面に磨きあり。		

42トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ③底径 ②器高 ④つまみ径	①胎土 ③色調 ②焼成 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
42-1	H-1 床直	須恵器 坏	①[10.0] ② 2.7 ③ 4.8	①中粒 ②良好 ③橙 ④1/3	体部・口縁部は輶轆整形。底部は回転糸切り。	6	酸化焰
42-2	H-1 覆土	須恵器 羽釜	① 22.2 ②(7.9) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部・口縁部は輶轆整形。その後に鍔を接着して整形。		酸化焰
42-3	H-1 床直	土師質 高坏	① — ②(2.6) ③ —	①中粒 ②良好 ③浅黄橙 ④破片	脚部から坏部への接合部。外面は縦方向の箇削りで整形。坏部との接合面で折れ。	8	
42-4	H-1 床直	須恵器 長頸壺?	①(4.0) ②(4.3) ③ —	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④底部	頸部の破片。内面・外側ともに輶轆整形。	9	
42-5	H-1 床直	灰釉陶器 瓶	① — ②(6.0) ③ —	①細粒 ②良好 ③灰白 ④底部	頸接合部付近の破片。内面・外側ともに輶轆整形。	10	
42-6	H-1 床直	須恵器 長頸壺	① — ②(4.0) ③[8.6]	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	底部の破片。内面・外側ともに輶轆整形。底面は高台を接着の後に輶轆整形。	16	
42-7	H-1 覆土	須恵器 瓶?	① — ② — ③ —	①細粒 ②良好 ③灰褐 ④破片	内面・外側ともに輶轆整形か。内面・割れた断面・外側にかけて漆状の付着物あり。		
42-8	I-1 覆土	鉄製品 鍼	長 14.3 幅 4.2 厚 1.2	雁股鍼。			
42-9	I-2 覆土	土師器 坏	①[17.4] ② 3.9 ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
42-10	I-2 覆土	綠釉陶器 椀?	① — ② — ③ —	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	底部の破片。内面・外側ともに輶轆整形。高台は接着の後に整形か。		
42-11	I-3 覆土	土師器 坏	① — ②(3.6) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箇削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。内面に放射状の暗紋を施す。		
42-12	I-3 覆土	須恵器 蓋	① — ②(2.2) ③ — ④ 5.6	①細粒 ②良好 ③暗灰 ④1/4	内面は輶轆整形。外面は輶轆整形と回転箇削り整形。摘みは輪状で、接着後に輶轆整形。		
42-13	I-3 覆土	黒色土器 椀	① — ②(2.1) ③[7.7]	①細粒 ②良好 ③橙 ④底部のみ	底部は内面を輶轆整形の後に磨き黒色処理。底面は回転糸切りの後に高台を接着し整形。		
42-14	I-3 覆土	黒色土器 椀	① — ②(2.6) ③[6.8]	①細粒 ②良好 ③にぶい黄 ④底部のみ	底部は内面を輶轆整形の後に暗紋状に磨き黒色処理。底面は回転糸切りの後に高台を接着し整形。		
42-15	I-3 覆土	瓦 丸瓦	長(10.7) 厚 1.2	①細粒 ②良好 ③浅黄 ④1/10	凹面に布目压痕と部分的な赤色化あり。凸面は叩きの後に横方向の撫でで整形。		
42-16	D-1 覆土	須恵器 皿	①(14.8) ② 3.6 ③ 7.9	①細粒 ②良好 ③橙 ④2/3	体部・口縁部は外側・内面ともに輶轆整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着し輶轆整形。		酸化焰
42-17	D-1 覆土	黒色土器 椀	① 14.0 ②(5.2) ③(6.8)	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④高台欠	体部・口縁部の内面は輶轆整形の後に磨き黒色処理。外面は輶轆整形。底面は回転糸切りの後に高台を接着し輶轆整形。口縁部内面・外側に油煙付着。	2	
42-18	D-1 覆土	黒色土器 椀	①[12.4] ②(4.6) ③ —	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/4	体部・口縁部の内面は輶轆整形の後に磨き黒色処理。外面は輶轆整形。底面は回転糸切りの後に高台を接着し輶轆整形。		
42-19	O-1 覆土	須恵器 椀	①(8.3) ②(3.4) ③ 5.6	①細粒 ②良好 ③にぶい褐 ④口縁部欠	体部・口縁部の内面は輶轆整形の後に磨く。外面は輶轆整形。底面は回転糸切りの後に高台を接着し輶轆整形。内面の一部に黒色処理か?	1	酸化焰

第1部 平成27年度範囲内容確認調査報告

42-20	O-1 覆土	須恵器 転用硯?	長(4.3) 幅(6.9) 厚 1.0	①細粒 ②良好 ③暗灰 ④破片	須恵器甕の破片であるが、内面が摩耗していることから、硯に転用か。		
42-21	O-1 覆土	土製品 土鉢	長(3.1) 幅 1.2	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④2/3	一部欠損。		
42-22	トレンチ 覆土	須恵器 椀	①[15.8] ②(5.2) ③(6.6)	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	体部・口縁部は外側・内面ともに輶軸整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着し輶軸整形。		酸化焰
42-23	トレンチ 覆土	須恵器 高坏	① — ② 7.0 ③ —	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	脚部の破片。外側は輶軸整形。内面は坏部との接合部付近は輶軸整形の痕跡を残すが、基本的にはしづら痕あり。		
42-24	トレンチ 覆土	須恵器 瓶	①[11.2] ②(8.2) ③[8.0]	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	底部から体部にかけての破片。内面は輶軸整形。外側は輶軸整形の後に、底部付近を中心に窓削りで整形。底面も窓削りで調整か。内面の微細なひびや割れ面に漆状の付着物あり。		
42-25	トレンチ 覆土	須恵器 転用硯	①(7.6) ②(7.8) ③ 9.4	①細粒 ②良好 ③褐灰 ④破片	須恵器甕の破片であるが、内面が摩耗していることから、硯に転用か。		
42-26	トレンチ 覆土	灰釉陶器 段皿	①(8.7) ②(2.0) ③ 6.1	①細粒 ②良好 ③灰白 ④1/3	体部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着して整形。		

43トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ②器高 ③底径 ④つまみ径	①胎土 ②焼成 ③色調 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
43-1	D-2付 近	須恵器 椀	①[15.2] ② 5.5 ③[8.1]	①中粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④2/3	体部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着して整形。	1	酸化焰
43-2	P-15 覆土	須恵器 坏	①[10.6] ② 2.0 ③[6.2]	①中粒 ②良好 ③浅黄橙 ④1/3	体部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切り。		酸化焰
43-3	トレンチ 覆土	須恵器 椀	①[16.8] ②(3.7) ③ —	①粗粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/4	体部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切りの後に整形し、高台を接着して整形。		酸化焰

44トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ②器高 ③底径 ④つまみ径	①胎土 ②焼成 ③色調 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
44-1	B-1 P-1 覆土	土師器 高坏	①(6.5) ②(2.4) ③(6.5)	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	脚部と坏部の接合部の破片。外側は縦方向の窓削りで整形。脚部内面は接合時の工具痕。坏部内面は横方向の撫でで整形か。	1	
44-2	W-1 覆土	土師質 内耳鍋	①[33.4] ② 14.8 ③[23.0]	①細粒 ②良好 ③にぶい褐 ④1/3	体部・口縁部は内面・外側ともには横撫でで整形。被熱により脆くなっている。		
44-3	W-1 覆土	石製品 石擦鉢	長 14.3 幅 4.2 厚 1.2	外側にノミ調整痕。内面は軽く磨かれているが、タガネの加工痕により凹む部分あり。底部は滑らかに磨かれている。			
44-4	D-2 覆土	須恵器 坏	①[8.8] ② 1.9 ③[5.0]	①細粒 ②良好 ③褐灰 ④1/3	体部・口縁部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切り。		
44-5	D-10 覆土	須恵器 坏	①(7.1) ②(1.8) ③ 5.0	①細粒 ②良好 ③灰白 ④2/3	体部・口縁部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切り。		
44-6	D-10 覆土	土師質 土釜	① — ② — ③ —	①細粒 ②良好 ③明赤褐 ④破片	体部から口縁部にかけての破片。体部は内面・外側ともに窓削りで整形。口縁部は横撫でで調整。		
44-7	D-10 覆土	須恵器 転用硯	長(11.3) 幅(9.0) 厚 13.8	①細粒 ②良好 ③灰 ④破片	須恵器甕の破片を素材とし、周囲を方形に削り整形。使用により滑らか。		
44-8	D-11 覆土	須恵器 坏	① 9.0 ② 3.8 ③ 5.8	①細粒 ②良好 ③橙 ④完形	体部・口縁部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切り。	1	
44-9	D-11 覆土	須恵器 坏	①[9.9] ② 2.0 ③[5.2]	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	体部・口縁部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切り。	2	
44-10	D-11 覆土	須恵器 坏	① 8.5 ② 2.0 ③ 4.7	①細粒 ②良好 ③橙 ④完形	体部・口縁部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切り。	3	
44-11	P-1 覆土	須恵器 坏	① 9.2 ② 1.7 ③ 4.5	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④ほぼ完形	体部・口縁部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切り。		
44-12	P-6 覆土	須恵器 坏	①[9.2] ② 2.0 ③[5.0]	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④ほぼ完形	体部・口縁部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切り。		
44-13	O-1 覆土	須恵器 坏	① — ②(3.0) ③[8.2]	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	体部・口縁部は内面・外側ともに輶軸整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着して整形。		
44-14	O-1 覆土	須恵器 器種不明	① — ②(1.6) ③[21.0]	①細粒 ②良好 ③黄灰 ④破片	底部の破片。形状は平坦で、内面は輶軸整形。底面は窓削りで整形。底面の一部に窓削りで整形された凸部をもつ。三足盤状の器体か。		
44-15	O-1 覆土	須恵器 盤?	① — ②(1.8) ③[9.0]	①細粒 ②良好 ③黄灰 ④破片	底部から体部へと立ち上がる部分の破片。内面・外側ともに輶軸整形。底部に高台の剥落した痕跡あり。底部は高台を接着する後に整形か。内面に乳白色の薄い膜状の付着物あり。		
44-16	O-1 覆土	須恵器 提瓶?	長(11.3) 幅(9.0) 厚 13.8	①細粒 ②良好 ③灰 ④破片	須恵器提瓶の体部と推定される破片。内面は横撫でで整形。外側は叩きの後にカキ目調整。破片の周囲を微細な剝離と削りで方形に整形していることから、硯へと転用しようとした可能性がある。		
44-17	O-1 覆土	須恵器 甕	長(12.2) 幅(13.9) 厚 1.0	①細粒 ②良好 ③灰 ④破片	須恵器甕の破片。叩きによる整形。内面には当て具痕(青海波)、外側は叩き目。破片の周囲を微細な剝離と削りで整形しようとしていることから、硯へと転用しようとした可能性がある。		
44-18	O-1 覆土	砥石	長 15.1 幅 11.7 厚 5.9	粗流の安山岩製。表裏面に擦痕。			

V 遺構と遺物

44-19	O-7 覆土	土師器 坏	①[11.3] ②(2.7) ③—	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箒削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
44-20	O-7 覆土	土師器 坏	①[13.0] ②(2.9) ③—	①細粒 ②良好 ③橙 ④破片	体部外面は箒削りで整形。体部内面および口縁部内面は撫でで調整。		
44-21	O-7 覆土	須恵器 坏	①— ②(0.9) ③[7.6]	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	底部の破片。内面は轆轤による整形。底部は箒おこしのまま未調整。		
44-22	トレンチ 覆土	須恵器 転用硯	①(6.6) ② 1.2 ③(9.9)	①細粒 ②良好 ③灰 ④破片	須恵器甕の破片であるが、内面が摩耗していることから、硯に転用か。		
44-23	トレンチ 覆土	須恵器 転用硯	①(4.8) ②(1.1) ③(4.7)	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	須恵器坏の底部の破片であるが、内面・底面が磨耗して滑らかになっていることから、硯に転用か。		

VI まとめ

1 元総社小学校とその周辺について

(1) 元総社小校庭遺跡の1号掘立柱建物跡について

平成27年度調査の大きな成果の一つとして元総社小校庭遺跡1号掘立柱建物跡の再検出を挙げることができるであろう。

元総社小校庭遺跡は、元総社小学校の校庭に黒色土の集中が散見される状況を疑問に思ったことが発見の契機であるという。発掘調査は群馬大学の尾崎研究室を中心として昭和36年から39年までと昭和41年に実施されたが、掘立柱建物跡については昭和37年度の調査で検出された。掘立柱建物跡は桁行5間、梁行2間で棟持柱状の柱穴を両側にもつ東西棟（1号掘立柱建物跡）と、桁行3間、梁行2間の東西棟（2号掘立柱建物跡）の2棟、さらに2号掘立柱建物の西で柱筋の通らない柵列もしくは庇と考えられる柱穴が3基検出されている。この2棟の掘立柱建物は、遺物は出土しなかったが遺構の状況から奈良時代に帰属する建物と推測され、元総社小学校や総社神社の牛池川を挟んだ北側に位置する昌楽寺付近で、元総社小学校の調査よりも後の昭和42年に前橋市教育委員会と新たに設置された上野国府跡発掘調査委員会により実施された上野国府跡の発掘調査で検出された6間2間の掘立柱建物跡とあわせて上野国府に関連する建物跡と位置付けられた（松島 1986）。また、元総社小校庭遺跡の調査結果は、上野国府の研究史上でも一つのポイントとなる発見で、この発掘以後、国府推定地は元総社町が中心となり元総社小学校を国府域の南東付近に位置するような推定地案が主流となっていく。

元総社小校庭遺跡の調査位置については概ねの位置は判明していたが正確に位置を記録する必要性が生じたために再調査を実施した旨は本報告書の冒頭で述べたとおりであるが、①平成26年度調査で検出された群馬大学の調査トレンチを参考にして割り出した位置で掘立柱建物跡が検出されたこと。②検出された掘立柱建物跡のほか、調査したと思われる範囲が川砂で埋め戻されており、埋め戻し状況の証言と一致したこと。③1号掘立柱建物跡の平面図と、今回検出された掘立柱建物跡の柱穴の位置が一致したこと。以上の3点から、今回の調査で検出した掘立柱建物跡は元総社小校庭遺跡の1号掘立柱建物跡と判断した。

1号掘立柱建物跡の調査は、基本的に再調査であることから、埋め土を除去して一度発掘調査で検出された遺構を追認するようなかたちとなった。柱穴についても調査済みで覆土が掘り取られている状況であるので、柱穴の内部を精査して調査した。柱穴の底面の状態として特徴的であったのは①底面が窪んでいる状態が確認できた。②直径30cm程度円形に白色化して硬化した部分が確認され、その白色化した部分を取り囲むように環状の鉄分の凝集が観察できたことである。この状態については、覆土の一部が残っていた東側の棟持柱とされた柱穴（この報告ではP₈）と、その東側で新たに検出された柱穴において、柱痕の周囲の覆土の締まりが非常に強く、柱穴の底面と締まりの強い土の接する部分で環状の鉄分の凝集が確認できた事や、その内側が白色化して硬化していた状態から、柱の当たりと考えられる。また、柱穴の底面に窪みがあるものも幾つか存在するが、その窪みの付近にこうした白色化や環状の鉄分の凝集が観察できたことから、この窪みも柱の当たりが位置していたことが考えられる。こうした状況判断に則って遺構の検出状況について報告したものが、本書の25ページに記載した内容となる。このことを前提とすると、1号掘立柱建物については、以下の事が考えられる。

①桁行の柱間は2.60mから3.05mを測ることから、およそ2.7mで9尺と推定される。

②梁行の柱間はほぼ3.00mであることから、10尺と推定される。

ちなみに1号掘立柱建物跡に関する昭和37年の調査所見としても、桁行の柱間は8.8尺等間、梁行の柱間は10尺等間としている（松島 1986）。

しかしながら、柱穴の底面の観察結果を基にすると、桁行については問題も存在する。

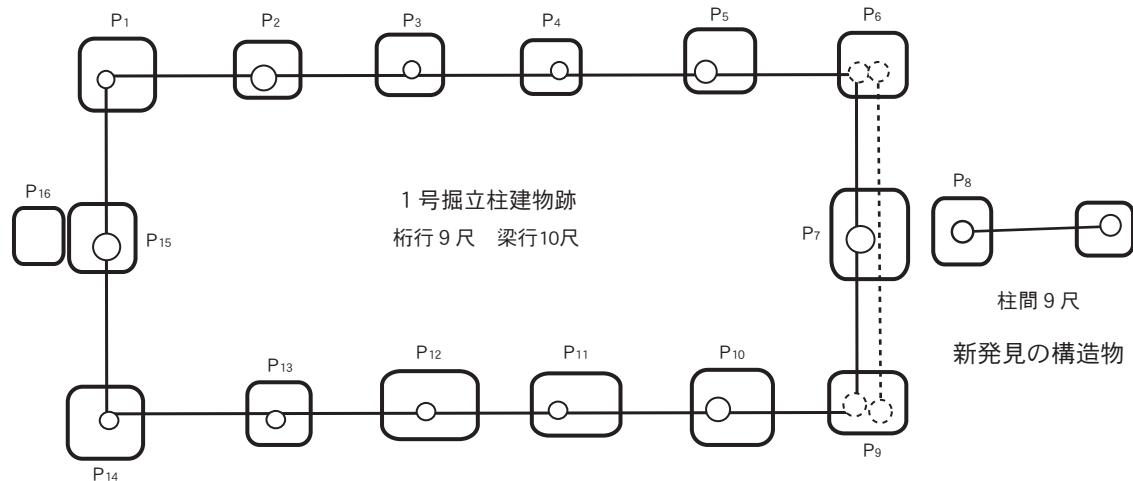


Fig.33 元総社小校庭遺跡 (41トレンチ) 1号掘立柱建物跡の模式図

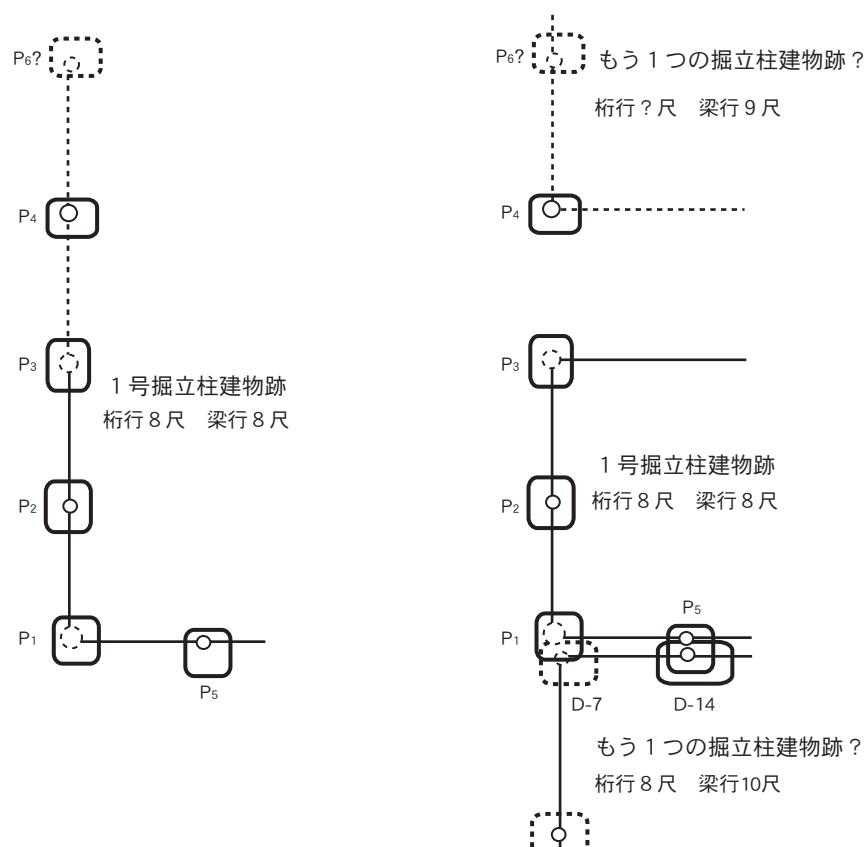


Fig.34 44トレンチの1号掘立柱建物跡模式図

①北側の桁行の柱列で、一番東の柱穴（P₆）の柱の当たりが明瞭ではない。若干ながら確認できた鉄分の凝集と白色化の位置が一致しない。白色化部分を柱の当たりとすると約9尺で柱間は等しくなるが、鉄分の凝集を柱の当たりとすると3.05mで10尺となる。

②南側の桁行の柱列のうち、東から4本目まで柱穴（P₉、P₁₀、P₁₁、P₁₂）のみが、他の柱穴と比べて不定形（楕円形もしくはひょうたん形）で、柱の当たりが寄った位置にある。また、一番東の柱穴（P₉）については、柱の当たり（鉄分の凝集）が東に寄っており、P₁₀で検出された柱の当たりとの距離は2.90mで、柱間が10尺近くとなる。

1号掘立柱建物跡の東端については、梁行の柱穴であるP₇の状況が興味深い。P₇を精査した結果は、柱穴は南北方向に長軸を取る楕円形を呈しており、柱の当たりと考えられる位置は西へ寄って検出されている。この位置にあわせてP₆、P₉の柱の位置を推定すると、桁行の柱間はすべて2.7m程度で9尺とすることができる。

不定形な柱穴については、昭和37年の調査所見として、「柱の抜き取り穴とみられるものが数本認められた。」（松島 1986）とある。

また、東西の棟持柱とされた柱穴についても、以下のような問題点が存在する。

①東西の棟持柱で柱穴の形状が異なる。東の柱穴は形状も方形で当たりも存在するが、西の柱穴については、精査の結果、大きな方形のピットの南寄りに円形のピット（本報告中のP_{16-a}）と、北西隅に小形のピット（本報告中のP_{16-b}）が存在し、ピットの集合体のような状態であった。なお、P_{16-a}には環状の鉄分の凝集が顕著ではないが検出された。

②梁行から柱穴までの距離が等しくない。西側の間隔は柱中心間で1mを測り、柱穴の掘り方自体は梁行の並びのP₁₅と隣接している。それに対して東側は柱の当たり間の距離で1.8mを測る。

棟持柱については、その東西方向の調査区を拡張してそこから続く柱穴の有無を確認したところ、西側では柱穴は確認できなかったが、東側では棟持柱の東2.7mの地点で新たに柱穴が検出された。東側で新たに検出された柱穴の検出状態については本書の26ページに記載したとおりであるが、東側の棟持柱と新たに検出された柱穴については①形状が方形。②1号掘立柱建物跡の他の柱穴と比べて浅い。③柱痕の周囲の覆土が硬く締まっているという共通点がある。このことから、この二つの柱穴は何らかの関連性が窺える。

今後、棟持柱とされてきた柱穴については、1号掘立柱建物跡に取り付く塙の柱穴、もしくは別個の掘立柱建物の柱穴の可能性も考慮する必要があろう。また、それを解明する調査も必要と思われる。

(2) 元総社小学校校庭の状況について

平成27年度の調査では、校庭の南端付近で東西方向にトレンチを設定し（42トレンチ）調査を実施した。このトレンチは位置的に平成25年度に調査した21bトレンチの延長部分に当たる。21bトレンチは総社砂層の直上まで搅乱を受けており、遺構の確認はおろか、土層の堆積状態の確認も難しかった。搅乱は42トレンチまでは及んでおらず、42トレンチでは遺構確認および土層の堆積状態の確認もできた。42トレンチの基本土層については本報告の12ページのとおりであるが、表土（ゴンベ砂等含む新・旧校庭の土）の下層に浅間B軽石を混入する土が堆積し、その下層が浅間C軽石を包含する黒色土層（IV層）であった。校庭の北端に位置する41トレンチにおいては表土の下層が総社砂層への漸位層（V層）となっていた。また、表土の下層が漸位層という状態は平成26年度に調査した30トレンチでも同様であったが、平成25年度に調査した校庭の西端に位置する21aトレンチでは、表土の下層に、奈良・平安時代の遺物包含層（III層）と浅間C軽石を包含する黒色土層が確認され、8世紀から9世紀にかけて遺物が多く出土した1号溝跡については、浅間C軽石を包含する黒色土層から掘り込まれていた。これらのことから、元総社小学校の校庭の本来の地形は、校庭北中央付近を頂上とした台地であったことが考えられる。この台地は校庭の西に位置する21aトレンチと、同じく南に位置する42トレンチの土層堆積状態から西と南へ向かい傾斜していたと考えられる。現在の地形を観察しても元総社小学校の西は校庭よりも低い位置

にある点や、校庭の南については、昔ははるかに低かったという地元の方の証言からもその状況は窺える。

元総社小学校の校庭で、現時点で確認されている建物跡は元総社小校庭遺跡の1号・2号掘立柱建物跡のほか、30トレンチ1号建物跡の3棟であるが、すべて校庭の北寄りに位置する。校舎よりも北に位置する元総社明神遺跡では掘立柱建物跡は検出されていないことから、現在の校庭と校舎付近に建物は集中して建てられたと推定される。気になる校庭東側についてであるが、牛池川はこれまでの発掘調査の成果や地形の観察などから、元総社小学校付近で大きく流路を変えた形跡はない。川寄りの部分は河川改修で埋め戻されてはいるが流路へと続く傾斜地形が存在したであろうが、校庭東付近の現在体育館がある付近までは台地が続いている可能性があることから、建物の分布はもう少し東へと伸びるかも知れない。

(3) 総社神社および元総社小学校の西側の地域について

平成27年度調査の大きな成果としてもう一つ挙げておきたいのは、掘立柱建物に成り得る柱穴列を総社神社の西の地域で検出できたことである。この付近は地元で「本村」と呼ばれており、元総社町内でも古くから集落が営まれていた地域で、現在でもかつて養蚕を営んでいた農家がたくさん見受けられる。

44トレンチにおける遺構の検出状況については、本報告の27・28ページに記載のとおりであるが、今回の調査で掘立柱建物の柱列と考えられるピットと、柱の当たりの可能性のある鉄分の凝集が検出された。位置関係を模式的に表すとFig.34のとおりとなる。遺構説明の際にも触れているが、P₅としたもの以外は同軸上に位置するという特徴があり、P₁とP₂、P₂とP₃、P₁とP₅の柱間はそれぞれ2.40m、2.35m、2.36mであることから、その柱間は8尺と推定される。

44トレンチではP₁・P₂・P₃・P₅以外にも、直径が30cm程度の鉄分の凝集が数カ所検出されている。この鉄分に凝集した状態については、41トレンチの1号掘立柱建物の柱穴の底面において環状に鉄分が凝集した状態が検出され、調査の結果、その内側が柱の当たりであることが確認できた。44トレンチで検出された鉄分の凝集は直径30cm程度で環状ではなく円形という違いがある。この円形の鉄分の凝集はP₁・P₂・P₃と同軸上で3ヶ所検出されている。そのうちP₃より北で検出されたものが南からP₄とP₆であり、P₃とP₄の距離は2.70mとなり9尺分距離が開く。P₆については、P₄との距離は2.60mを測る。P₁の南でも、同軸上で約3.5m離れた位置に鉄分の凝集が1ヶ所確認されている。この凝集については、同軸上であるがP₁から距離が離れていることと、3号落ち込み内に位置し、遺構確認時に明瞭な柱穴のプランが確認できなかったことから、調査時は掘立柱建物の柱番号を付けなかった。

上記のとおり、発掘調査時において、41トレンチ1号掘立柱建物跡の教訓から、鉄分の凝集については注意を払いながら発掘調査を続けてきたが、調査終了時点で、検出された掘立柱建物は以下のとおりと推測した。

①掘立柱建物は柱列の方向から正方位で建てられている。柱穴は東西方向に少なくとも1間分は検出でき、その柱間は8尺。南北方向は2間分が確実に検出できていると考えられ、その柱間も8尺。ただし、その先については柱穴と推定される遺構は検出されているが柱間は8尺ではない。また、さらに北へ柱列が延びる可能性がある。

②上記のとおりであれば、掘立柱建物は正方位の南北棟の可能性と考えられる。

しかしながら、改めて整理作業を進めていく過程で、その存在に注意が必要ではないかと思われる遺構があるように思ってきた。P₅の南に14号土坑と16号ピットが存在する。検出状態としてはP₅よりも14号土坑が新しく、さらに16号ピットが新しい。16号ピットは14号土坑の中央北寄りに位置し、中央に直径約30cmの環状の鉄分の凝集がプランで確認できた。この状態は41トレンチ1号掘立柱建物跡の柱穴の調査所見から、柱痕の可能性が考えられる。また、P₁の南にもP₁を切るかたちで7号土坑と19号ピットが存在するが、7号土坑の中央付近に19号ピットが位置している。19号ピットも7号土坑の覆土中に存在し、環状の鉄分の凝集が確認できたので、それをピットとしたものであるが、鉄分の凝集は7号土坑の底面である総社砂層には達していない。ただし、19号

ピットの下部付近は一段下がっており、円形の鉄分の凝集が確認できた。なお、16号ピットと19号ピットは東西方向に並び、その間は約2.3mを測る。さらに、3号落ち込み内で確認できた鉄分の凝集については、3号落ち込みの底部が直径約40cm、深さ5cm程度の円形の窪みがあり、その中に検出されている。鉄分の凝集は直径約30cmの円形で、19号ピットから南へ3.00mに位置している。また、3号落ち込みも、他の落ち込みと比較すると形状が橢円形に近く、雰囲気が土坑に近い形状を呈する。仮に、①14号土坑が柱穴で16号ピットが柱痕。②7号土坑が柱穴で19号ピットが柱痕。③3号落ち込みが柱穴で鉄分の凝集が柱の当たり。とするならば、東西方向の柱間2.4m（8間）、南北方向の柱間3.0m（10間）の掘立柱建物の存在が推定できる。

上記のことから、44トレンチには北から、①南北方向の柱間9尺（梁行？）の掘立柱建物。②桁行・梁行ともに柱間8尺の掘立柱建物。③東西方向（桁行？）の柱間8尺、南北方向（梁行？）の柱間10尺の掘立柱建物。の3棟の掘立柱建物の存在が推定される。なお、②の掘立柱建物と③の掘立柱建物では、遺構の切り合いから③の掘立柱建物が新しいと考えられる。

調査時は先述のとおりの見解で調査し、掘立柱建物跡が少なくとも1棟存在したであろうという観点でいたが、今後、付近で調査する機会があれば、掘立柱建物が3棟分存在したかどうか検証したい。

2 国庁推定地B・C案周辺について

国庁推定地B・C案周辺において実施された各目的の調査内容について、個別にまとめていきたい。

（1）古代の大溝について

40トレンチの調査で、西へ10°傾く大溝の一部と推定される溝が検出された。溝は上部および東側法面を土取りでかなり削り取られていたため詳細な規模が不明であるが、下幅が約2mと推定される。この溝は元総社蒼海遺跡群と上野国府の調査で点々と検出されてきた溝で、平成26年度の調査でも29トレンチにおいて同一の溝が検出されているが、29トレンチで検出された溝の断面は底面が畦状になった逆台形で、逆台形部の下幅は2.4mを測る。29トレンチと40トレンチの中間に位置する元総社蒼海遺跡群(21)・(23)で検出された同一と考えられる溝はかなり削られた状態で検出されており、そうした視点では溝の規模は判然としない。29トレンチよりも北の地点である上野国府6トレンチ2号溝跡は最大上幅が5mを超え、下幅も約3.4mを測り、29トレンチ以南で検出されている溝よりもはるかに規模は大きい。同軸上に掘削された溝でも規模に差が生じる理由は現段階では不明である。上野国府6トレンチよりも北約300mに位置する元総社蒼海遺跡群(30)と、その北の元総社蒼海遺跡群（17街区）において、この溝とほぼ同軸上に位置する道路遺構が検出されている。この道路は元総社蒼海遺跡群（17街区）において切通し状に下がり、その北を東西に流れる牛池川の河畔へ到達するものと推定されているが、上野国府6トレンチの2号溝跡では覆土の中位やや上付近で硬化面が検出されており、溝が廃絶した後に道路として使用された事が窺えることから、元総社蒼海遺跡群(30)と元総社蒼海遺跡群（17街区）の道路遺構もこの硬化面と関連するのかもしれない。なお、この道路遺構は元総社蒼海遺跡群（17街区）において道路面より上位で浅間B軽石層が検出されていることから、その降下時には道路は廃絶していたと考えられる。溝については10世紀には溝としての機能をなくしたと考えられることから、10世紀代に溝が機能を失い埋没していく過程で道路としても使用されたが、1108年の浅間山噴火までには道路としての機能も失ったと考えるのが妥当であろうか。

なお、古代の溝についてであるが、国庁推定地C案内を斜めに走る1条が存在する。発掘調査では上野国府9トレンチの2号溝跡、同じく11トレンチの1号溝跡、元総社蒼海遺跡群(45)の2号溝跡が該当する。この溝の時期については報告書では中世とされているが、改めて37トレンチにおいて再調査をした結果、覆土に浅間B軽石が含まれない点や、出土遺物は6世紀から7世紀の遺物が中心で中世の遺物が認められない点、断面が逆台形で、底面を精査した結果、区割りの痕跡のある窪みがある程度の等間隔で検出されたことから、古代の溝で

ある可能性が高くなった。これまで周辺で検出されている古代の溝は、走行が正方位か、西へ若干の傾きをもつものに大別できた。また、国庁推定地C案では後者の溝が比較的多く検出されているが、今回再調査された溝は東へ32°傾くもので両者にあてはまらない。蒼海地区内にはこのような独自の走行をもつ溝も検出されていることから、こうした走行をもつ溝についても性格付けをしていく必要があろう。

(2) 28トレンチ確認の枠形の布地業を持つ建物について

本年度の調査は掘込地業の構造の再確認と柱穴等の痕跡の有無を確認するための再調査を実施した。調査所見としては以下のとおりである。

- ①布地業の内側で標準土層が確認できしたことから、内側には版築は存在しなかったと考えられる。
- ②柱穴や礎石の根石等は確認できなかった。また、建物や礎石の重量が原因と考えられる版築のたわみも確認できなかった。
- ③版築の断面に仕切りの痕跡は認められなかった。

のことから、版築は①枠形の布地業と考えられる。②柱穴は確認できなかったことから掘立柱建物は考えにくい。ただし、礎石の痕跡も現状では検出できないため礎石建物の確証も現状では低い。③平成26年度調査で各辺の版築における土層は共通した状況であったことに加えて、調査した範囲では仕切り板の痕跡も認められなかっことから、版築を行う際は細かく区割りするよりも広く区割りするかもしくは全体的にまとめて仕上げていくような作業を行っていたことが推測される。

(3) 元総社蒼海遺跡群(99)で検出された掘込地業建物の範囲について～39トレンチの調査結果から～

39トレンチでは掘込地業が検出されなかったことから、元総社蒼海遺跡群(99)で検出された掘込地業は39トレンチの地点まで到達していないことが判明した。このことから、掘込地業をもつ建物は平面が正方形もしくは東西方向に長軸をもつ建物と推定される。

(4) 両掘込地業建物の周辺の様相について

27トレンチの布地業建物と、元総社蒼海遺跡群(99)の掘込地業建物については似た方位を持つ。このことから周辺において同様の建物が規則的に存在していたのか36・37トレンチを設定して発掘調査を実施したが、建物の痕跡は検出できなかった。周辺で過去に実施された発掘調査においても同様の建物跡は検出されていない。また、掘立柱建物についても同様であることから、掘込地業建物は複数棟が規則的に建てられていたのではなく個別に建てられていた可能性が高い。

(5) 瓦の破片の出土傾向について～国庁推定地C案周辺から元総社小学校周辺にかけて～

平成24年度から国庁推定地C案および元総社小学校周辺にかけて、上野国府等範囲内容確認調査を継続しているが、遺物を整理する中で気づいた点がある。とても感覚的なものであるが、この付近の遺構の覆土から瓦の小片の出土が多いことである。元総社町でこれまで実施された調査で瓦が遺構覆土から小片で出土する例は存在しているし、住居の竈の構築材に転用されている形での例も多いが、上野国府の位置を推定することを困難にしている一つの要素として、傑出した瓦の散布地が存在しないという点がある。ここでは、この「とても感覚的なもの」を目に見える形にし、ある程度の傾向を出すことができるのかを試みた。対象としたものは平成26・27年度に調査した各トレンチで、各トレンチから出土した瓦の出土点数を調べ、次いで各トレンチにおける1m²当たりの瓦の出土点数を調べ、それを比較するものである。

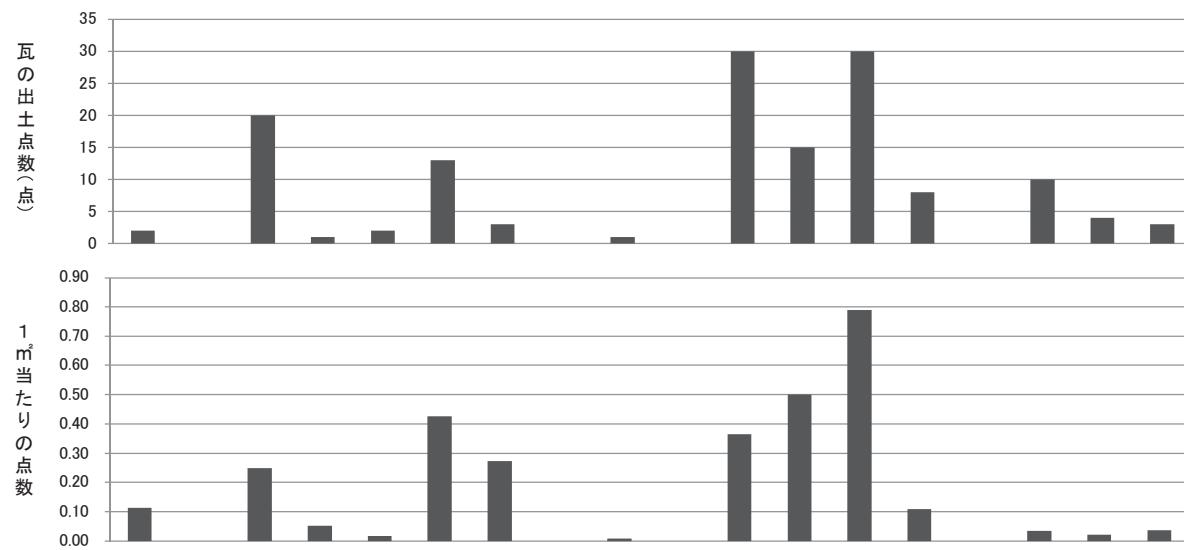
結果については表およびグラフのとおりである(Tab. 5)。瓦の点数をグラフ化した際に数量的に目を引く(10点以上)のが27・33・38・43・44トレンチである。次いで30・31トレンチが多い。1m²当たりの点数と比較すると傾向は微妙に変化し、44トレンチが突出し、他では27・33・34・38・43トレンチが多い。次いで29・31トレンチとなる。点数的には目を引いた30トレンチは、1m²当たりの点数では校庭内の他のトレンチと大差ない点が興味深い。各トレンチにおける主な検出遺構についても表中に簡単に記載したが、27・33・34トレンチは掘込地業

建物が検出され、38トレンチは小規模な掘立柱建物と10世紀代の住居が多く検出されている。また44トレンチは掘立柱建物が検出され、43トレンチはその付近に位置する。29・31トレンチは大溝が検出されている。

まとめとしては、掘込地業をもつ建物跡や掘立柱建物跡が検出されている、もしくは付近で検出されているトレンチでは瓦の小片が出土する傾向が高い。元総社小学校校庭でも掘立柱建物跡は検出されているが、出土点数は少なく、面積当たりの点数も少ない。元総社小学校校庭はかなり削平されていることから、その影響によるものであろうか。ただし、元総社小学校には学校の敷地から出土したとされる45点の瓦が保管されてきた（前橋市教育委員会 2016）点には注意が必要かもしれない。なお、29・31トレンチでは大溝が主体的に検出されていることから、溝の覆土から出土した数量が反映されていると考えて間違いないと思われる。このように、トレンチ毎で出土傾向が違うことが判明した。特に総社神社・元総社小学校の西側区域付近は出土する傾向が高いと考えられ、今後の調査結果とも比較することで、さらなる傾向が摑めると思われる。また、この結果のみで、各トレンチで検出された建物がすべて瓦葺きで、出土した瓦と葺かれていた瓦の破片を直結させることについては現段階としては結論には達せない。今後の課題となろう。

今回の作業は単純な作業であったが、今後、もっと有効な検証方法があれば試してみたいと思うのと同時に、例えば上野国分僧寺のような表面に多量の瓦の散布がみられなくても、「目に見えにくい多量の瓦の散布」が確認できるのであれば、上野国府研究の躍進に繋がるのかもしれない。

Tab. 5 各トレンチにおける瓦の出土状況



瓦の出土数(点)	2	0	20	1	2	13	3	0	1	0	30	15	30	8	0	10	4	3
調査面積(m²)	17.5	4	80	19	110	30.5	11	1	128	96	82	30	38	74	21	280	190	80
1m²当たりの点数	0.11	0	0.25	0.05	0.02	0.43	0.27	0	0.01	0.00	0.37	0.50	0.79	0.11	0	0.04	0.02	0.04
トレンチNo.	29	40	27	35	28	33	34	39	36	37	38	43	44	31	32	30	41	42
特筆される遺構等	溝	溝	掘込地業建物	掘込地業建物	—	—	古い溝	建物跡	—	建物跡	大溝	—	掘立柱建物跡	—	—	—	—	—
歴史的環境	国庁推定地B案	国庁推定地C案(官衙関連施設が存在?)								官衙関連施設が存在?				官衙関連施設が存在?				

第2部 上野国府等範囲内容確認調査 第1期調査について

I 上野国府等調査委員会5年間のまとめ

1 上野国府等調査委員会の設立と経緯

上野国府等調査委員会は山王廃寺等調査委員会を母体としている。山王廃寺等調査委員会は平成12（2000）年11月に山王廃寺とそれに密接な関係をもつ周辺の遺跡を調査し、保存と整備の方策を立てる事に関し、万全を期することを目的として設立された。山王廃寺については平成18年度から22年度までの5年間範囲内容確認調査を実施し伽藍配置の解明等の成果を収めることができたが、隣接する元総社町にその存在が推定されている上野国府については、蒼海地区の区画整理事業の進捗にともないその解明が急務となつたことから、上野国府等範囲内容確認調査を実施することになった。調査委員会の組織および事務局については山王廃寺調査委員会を踏襲することとし、委員および調査部会幹事についても山王廃寺調査委員会から引き続き委嘱した。なお、委員会の名称については第17回山王廃寺調査委員会において「上野国府等調査委員会」へと改称した。ただし、委員会および調査部会の回数については、山王廃寺調査委員会からの通算となっている。

2 委員会の活動経過

以下は上野国府等範囲内容確認調査が実施となった平成23年度からの各調査委員会および調査部会の活動経過とその概要である。

（1）第17回山王廃寺等調査委員会

- ①期 日：平成24年2月24日(金)
- ②会 場：前橋市役所庁舎11階北会議室
- ③報 告：山王廃寺発掘調査の成果と問題点。上野国府に関連する既出資料の集成状況。平成23年度元総社蒼海遺跡群発掘調査の成果について。
- ④協 議：平成23年度上野国府等範囲内容確認調査の成果(国庁推定地A案周辺の調査)。平成24年度上野国府等範囲内容確認調査事業について。
- ⑤その他：委員会の名称について。

今回の委員会では上野国府範囲内容確認調査計画の案を事務局が提示したが、国庁推定地4案以外の地点も含めた広範囲で調査を行う方針となった。

なお、本委員会で委員会の改称が承認されたことから、山王廃寺等調査委員会を上野国府等調査委員会へ改称した。

（2）第18回上野国府等調査委員会

- ①期 日：平成25年2月6日(水)
- ②会 場：元総社公民館第1会議室。その他に上野国府13トレンチ（元総社宅地遺跡23トレンチの再調査を含む）の現地視察と、元総社町内の国府関連遺構や遺物出土地点等の現地確認を実施。

第2部 上野国府等範囲内容確認調査 第1期調査について

③報 告：平成24年度元総社蒼海遺跡群発掘調査の成果（国府推定地C案周辺および総社神社西方付近の調査）。元総社蒼海遺跡群における時期別の住居跡の分布状況について。上野国府に関係する主要遺物の分布状況について。

④協 議：平成24年度上野国府等範囲内容確認調査の成果。平成25年度上野国府等範囲内容確認調査事業について。

今回の委員会では、発掘中の上野国府13トレンチと元総社町内の国府関連遺構や遺物出土地点等の現地視察を実施した。13トレンチで検出された古代の溝については国府が存在していた時期の可能性があるため重要との評価を得た。また、これまで推定国府域内で実施されてきた元総社明神遺跡群・元総社蒼海遺跡群・上野国府等範囲内容確認調査で検出された区画溝と推定される大溝について、検出されている地点を再確認しながら、区画溝全体の枠組みを再考する必要性が指摘された。

(3) 第6回上野国府等調査部会

①期 日：平成26年1月20日(月)

②会 場：文化財保護課。その他に元総社蒼海遺跡群(58)（古代の大溝）・同(60)（古代の溝、7世紀末～8世紀初頭の大型の住居跡）の発掘現場を視察。

古代の大溝については、その検出状態から官衙に関連した溝であることと、維持管理がある程度なされていたこと、溝に関連して柵列等の遺構が検出できれば施設の内側の想定できるとの助言をいただいた。また、溝は精査によって掘削する際の作業単位が確認できることがあるので留意して精査したほうがよいとの意見が出た。

(4) 第19回上野国府等調査委員会

①期 日：平成26年1月22日(火)

②会 場：総社公民館。その他に元総社蒼海遺跡群(58)・同(60)の発掘調査現場を視察。

③報 告：平成25年度元総社蒼海遺跡群発掘調査の成果。

④協 議：平成25年度上野国府等範囲内容確認調査の成果（総社神社・元総社小学校周辺の調査、区画溝・推定東山道駅路国府ルートの範囲確認調査）。平成26年度上野国府等範囲内容確認調査事業について。

21aトレンチ（元総社小学校校庭）の溝から出土した墨書土器の文字について「本（奉）」と「大家」との判読できるとの説明とあわせて、付近に公的な施設の存在が推測できるとの評価を得た。区画溝の範囲確認については、必ずしも方形に廻らないことに留意するよう助言をいただいた。また、推定東山道駅路国府ルートの調査については道路状遺構の検出には至らなかったが、高崎市域では道路遺構が検出されているので、検出地点を東へ更新していくように調査を進めていけばルートの解明に繋がるとの助言をいただいた。

(5) 第7回上野国府等調査部会

①期 日：平成26年7月14日(月)・15日(火) ※各部会幹事の都合に合わせて適宜実施。

②会 場：上野国府28トレンチ（掘込地業をもつ建物）、元総社蒼海遺跡群(95)（掘立柱建物跡2棟、古代の大溝2条）の発掘現場を視察。

28トレンチの掘込地業については、掘込地業を1棟分の建物跡と意識した上で、土層の堆積状態や平面プラン上の建物の痕跡について、再度精査と確認を行い記録に残すよう助言をいただいた。蒼海遺跡群(95)については、掘立柱建物は国府関連施設であれば曹司に該当する可能性があることと、柱穴の調査にあたっては、柱痕の検出や、平面プランで組むと推定される柱穴の割り出しに努めるよう助言をいただいた。

(6) 第20回上野国府等調査委員会

- ①期 日：平成26年8月12日(火)
- ②会 場：元総社公民館。その他に上野国府28・30（元総社小学校校庭）トレンチ、元総社蒼海遺跡群（95）の発掘現場を視察。
- ③協 議：発掘現場視察結果の検討。今後の上野国府の発掘調査について。

28トレンチの掘込地業については未調査部分があるので、その部分も後日調査して今年度の調査結果を補完する方向性を確認した。30トレンチの建物跡の柱穴については、検出状態から壺地業と評価する意見と、壺地業として積極的に評価することは難しいという意見も出された。また、古代の区画溝と推定される溝も含めて、元総社小学校校庭における範囲確認調査を引き続き実施するという方向性を確認した。蒼海遺跡群（95）の掘立柱建物については、周辺にも建物跡が存在する可能性が指摘された。また、上野国府において長徳3年（997年）に火災が発生し戸籍や田図が焼失していることが上野国交替実録帳に記載されているので、この火災の痕跡について今後の調査で注意が必要なことと、同じく実録帳中に国府関連施設の一部の名称に関する記載があることから、これらの建物が検出されれば国府解明の助力になるとの助言をいただいた。

(7) 第21回上野国府等調査委員会

- ①期 日：平成26年11月20日(木)
- ②会 場：文化財保護課2階会議室。その他に元総社蒼海遺跡群（99）（掘込地業を持つ建物）、上野国府33・34トレンチ（元総社蒼海遺跡群（99）検出の掘込地業を持つ建物の範囲確認）の発掘現場を視察。
- ③協 議：発掘現場視察結果の検討。上野国府33・34トレンチの調査結果について。

蒼海遺跡群（99）で検出された掘込地業を持つ建物について、布地業を持つ建物跡と総地業を持つ建物跡が重複していることが推定できる点と、版築工法が採用されている点で長期的に維持される建物が建てられていたことが推定されるが、その性格までは判断できない点を確認した。また、国府推定地C案付近で検出されている掘込地業を持つ建物跡や区画溝のとる方位が近いことと、元総社小学校付近で検出されている掘立柱建物跡や区画溝が正方位をとることから、これまでに検出されている建物や区画溝は大きく2群に分けることができることを確認した。今後の課題として、この2群について時間的な差異等を検討することを念頭において調査を進めることとした。

(8) 第22回上野国府等調査委員会

- ①期 日：平成27年2月24日(火)
- ②会 場：文化財保護課2階会議室
- ③報 告：平成26年度元総社蒼海遺跡群発掘調査の成果。
- ④協 議：平成26年度上野国府等範囲内容確認調査の成果（国府推定地C案周辺・元総社小学校周辺の調査、区画溝の範囲確認調査）。平成27年度上野国府等範囲内容確認調査事業について。

区画溝の調査について、地点によってはかなり削られている所も存在するので、掘削されている層位の確認や溝の深さについても旧地形を想定しながら調査を進める視点が必要であることが指摘された。また、蒼海遺跡群（99）の掘込地業を持つ建物跡については、第21回上野国府等調査委員会終了後の調査の進展により、布地業と総地業が一体である可能性が浮上したことが事務局より報告された。

(9) 元総社蒼海遺跡群（17街区）の現地視察

- ①期 日：平成27年8月 ※各委員および調査部会幹事の都合に合わせて適宜実施。
- 蒼海地区の区画整理事業内における開発にともない実施した元総社蒼海遺跡群（17街区）の調査で、浅間B軽石層の純層が覆土中位付近に堆積した北へ向かい傾斜するほぼ南北方向の道路遺構が検出されたこ

第2部 上野国府等範囲内容確認調査 第1期調査について

とから、その検出状態の現地視察を実施した。

(10) 上野国府41トレンチ（元総社小学校校庭の発掘調査）の現地視察

①期 日：平成27年8月 ※各委員および調査部会幹事の都合に合わせて適宜実施。

元総社小学校において、上野国府41トレンチの調査（元総社小校庭遺跡1号掘立柱建物跡の再調査）を実施した結果、想定された地点において検出されたことから、その検出状態の現地視察を実施した。

(11) 上野国府44トレンチの現地視察

①期 日：平成27年12月 ※各委員および調査部会幹事の都合に合わせて適宜実施。

総社神社西方に位置する上野国府44トレンチにおいて掘立柱建物に関連すると考えられる連続した柱穴が検出されたことから、その検出状態の現地視察を実施した。

(12) 第23回上野国府等調査委員会

①期 日：平成28年2月25日(木)

②会場：文化財保護課2階会議室

③報告：平成27年度元総社蒼海遺跡群発掘調査の成果。

④協議：平成27年度上野国府等範囲内容確認調査の成果（国府推定地C案周辺・元総社小学校周辺の調査、区画溝の範囲確認調査）。第1期上野国府等範囲内容確認調査の成果。平成28年度上野国府等範囲内容確認調査事業について。

蒼海遺跡群（99）の掘込地業に関して、その後の精査・整理により布地業と総地業はそれぞれの微妙な角度の差から一体ではなく別の建物の可能性が考えられることが事務局から報告された。また、44トレンチの掘立柱建物について調査範囲を広げて範囲確認を改めて行う必要があるとの助言を得た。

また、平成27年度で当初予定していた調査期間の5ヵ年が終了したが、推定上野国府域では上野国府等範囲内容確認調査だけでなく、区画整理事業や開発に係る発掘調査が多く実施されていることから、これらの調査結果も含めて総括的にまとめて検討していく必要があることを確認した。

(13) 上野国府45a・45bトレンチの現地視察

①期 日：平成28年5月 ※各委員および調査部会幹事の都合に合わせて適宜実施。

推定東山道駅路国府ルートの解明のため鳥羽町地内で実施した上野国府45a・45bトレンチの調査で、推定ルート上で浅間B軽石層よりも古い道路遺構と考えられる硬化面及び溝が検出されたことから、その検出状態の現地視察を実施した。ここでは、土層中で道路面・整地面・地山を的確に判断することの重要性を助言いただいた。

(14) 上野国府48トレンチ（元総社小学校校庭の発掘調査）の現地視察

①期 日：平成28年8月 ※各委員および調査部会幹事の都合で適宜実施。

昨年度実施した上野国府41トレンチの東側において調査を実施した結果、元総社小校庭遺跡の1号掘立柱建物跡と同規模の掘立柱建物跡が検出されたことから、その検出状態の現地視察を実施した。

なお、第24回上野国府等調査委員会は、平成29年2月23日(木)に、平成28年度元総社蒼海遺跡群発掘調査の成果を報告項目として、平成28年度上野国府等範囲内容確認調査の成果（元総社小学校周辺の調査、推定東山道駅路国府ルートの範囲確認調査）と平成29年度上野国府等範囲内容確認調査事業を協議項目として開催する予定。

II 調査成果のまとめ

1 各年度の調査概要

各年度の調査概要については以下のとおり。当初は国府推定地4案のうち調査可能なA・C案の内容確認を中心に調査を進めた。しかしながら、上野国府の解明には元総社小学校の校庭およびその周辺の調査も必要であることと、これまで元総社町内で実施されてきた発掘調査で検出されている古代の大溝（区画溝）や東山道駅路国府ルートの範囲確認も、国府域の解明には有効であると考えられることから、平成25年度からその調査も実施している。

Tab. 6 各年度の調査概要

年度	面積	調査目的	主な成果
23	309m ²	国府推定地A案の内容確認	6トレンチで古代の大溝を検出。
24	705m ²	国府推定地C案の内容確認(1) 総社神社周辺の内容確認	13トレンチで古代の溝を検出。
25	574m ²	総社神社・元総社小学校周辺の内容確認(1) 区画溝の範囲確認(1) 東山道駅路国府ルートの範囲確認	元総社小学校校庭（21aトレンチ）で古代の溝（8～9世紀）を検出。溝から「大家」「卒」の墨書き土器が出土。
26	624m ²	元総社小学校周辺の内容確認(2) 区画溝の範囲確認(2) 国府推定地C案の範囲内容確認(2)	元総社小学校校庭で建物跡（掘立柱建物か）1棟を検出。元総社学校付近で新たに2条の大溝を検出。範囲確認調査を実施した区画溝は、存在が想定できる位置で溝を検出。国府推定地C案では布地業建物1棟を検出。
27	668m ²	元総社小学校周辺の内容確認(2) 区画溝の範囲確認(3) 国府推定地C案の範囲内容確認(3) 掘込地業建物の精査	元総社小校庭遺跡1号掘立柱建物跡を再検出。その東で不明施設の柱穴を検出。範囲確認調査を実施した区画溝は、存在が想定できる位置で溝を検出。国府推定地C案で小型の掘立柱建物を検出。

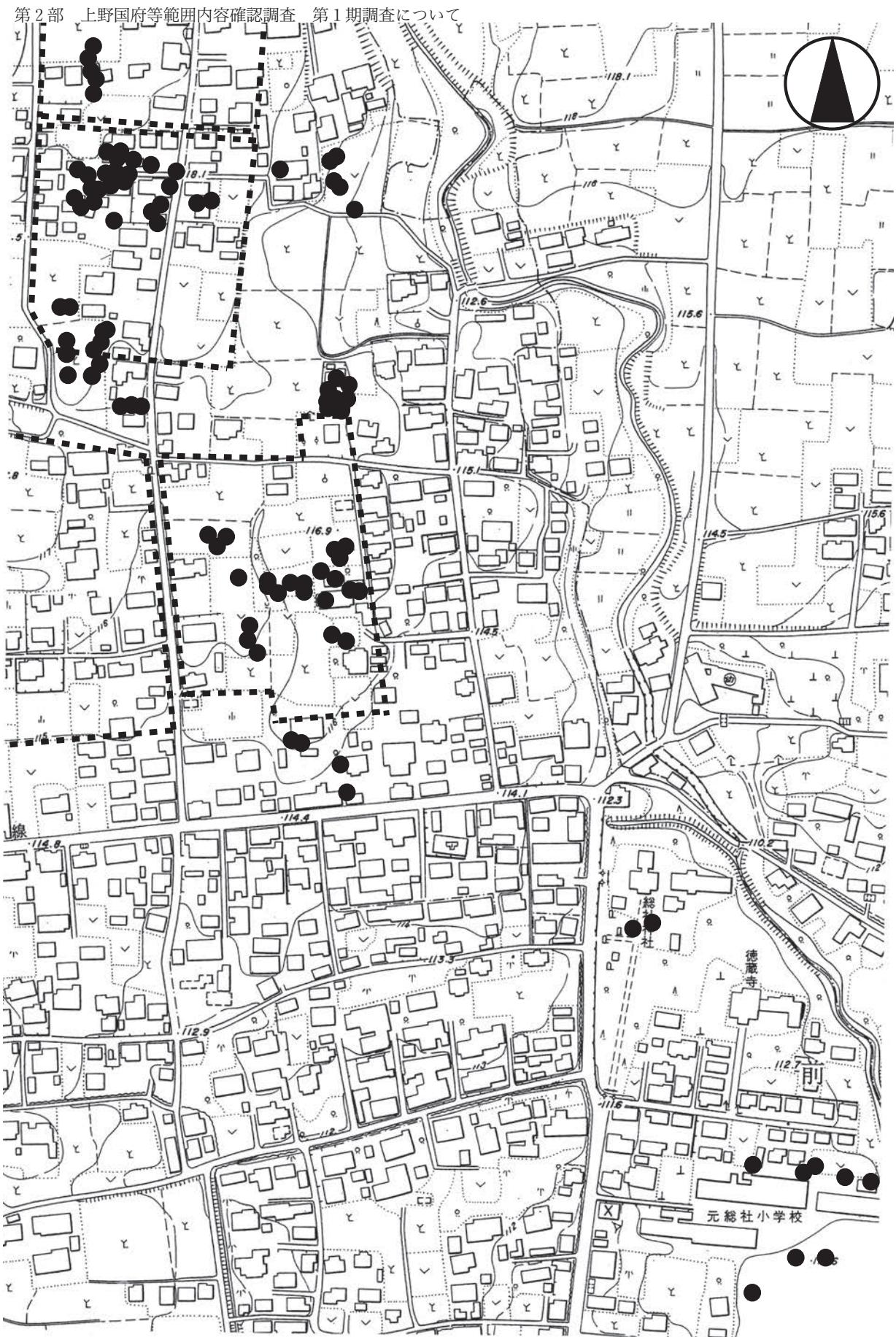
2 各国府推定地案における調査結果について

(1) 国府推定地A案

国府推定地A案は、「日高道」と通称される古い道（地割）の北端付近に道を挟みこむように「宅地」の地名が残る方形の地割が存在することから、国府の推定地とした地点である。この地点は本範囲内容確認調査以外にも元総社宅地遺跡や区画整理事業にともなう調査も行われている。これらの調査で検出された遺構は主に6世紀後半と10世紀代の住居跡が多く、上野国府6トレンチと蒼海遺跡群（14）5トレンチで西へ10°傾く古代の大溝が検出されている以外は、この案の範囲内で国府関連遺構は検出されていない。なお、国府推定地とされた方形の地割については、地割に沿った中世の溝が検出されたことから、居館の地割の名残と推定される。また、推定地案中程から南は表土の下層が総社砂層となっており、浅間B軽石混入土層の堆積が認められないことから、中世段階に大規模な土取りが行われたことが推定される。

(2) 国府推定地B案

国府推定地B案は蒼海城本丸を中心とした地点であるが、本丸部分はほぼ未調査で内容は不明である。この推定地で発掘調査済みなのは二ノ丸付近で、土取りが大きく行われている状態であるが中世の柱穴や蒼海城に関連する溝が検出されているが、古代に属する遺構の検出は少なく、西へ10°傾く古代の溝が1条、正方位の溝が1条検出されているのみである。なお、前者の溝は、調査を進める中で、国府推定地A案の西で検出されている古



● 住居跡

Fig.35 国府推定地4案と元総社小学校周辺の状況（6・7世紀）

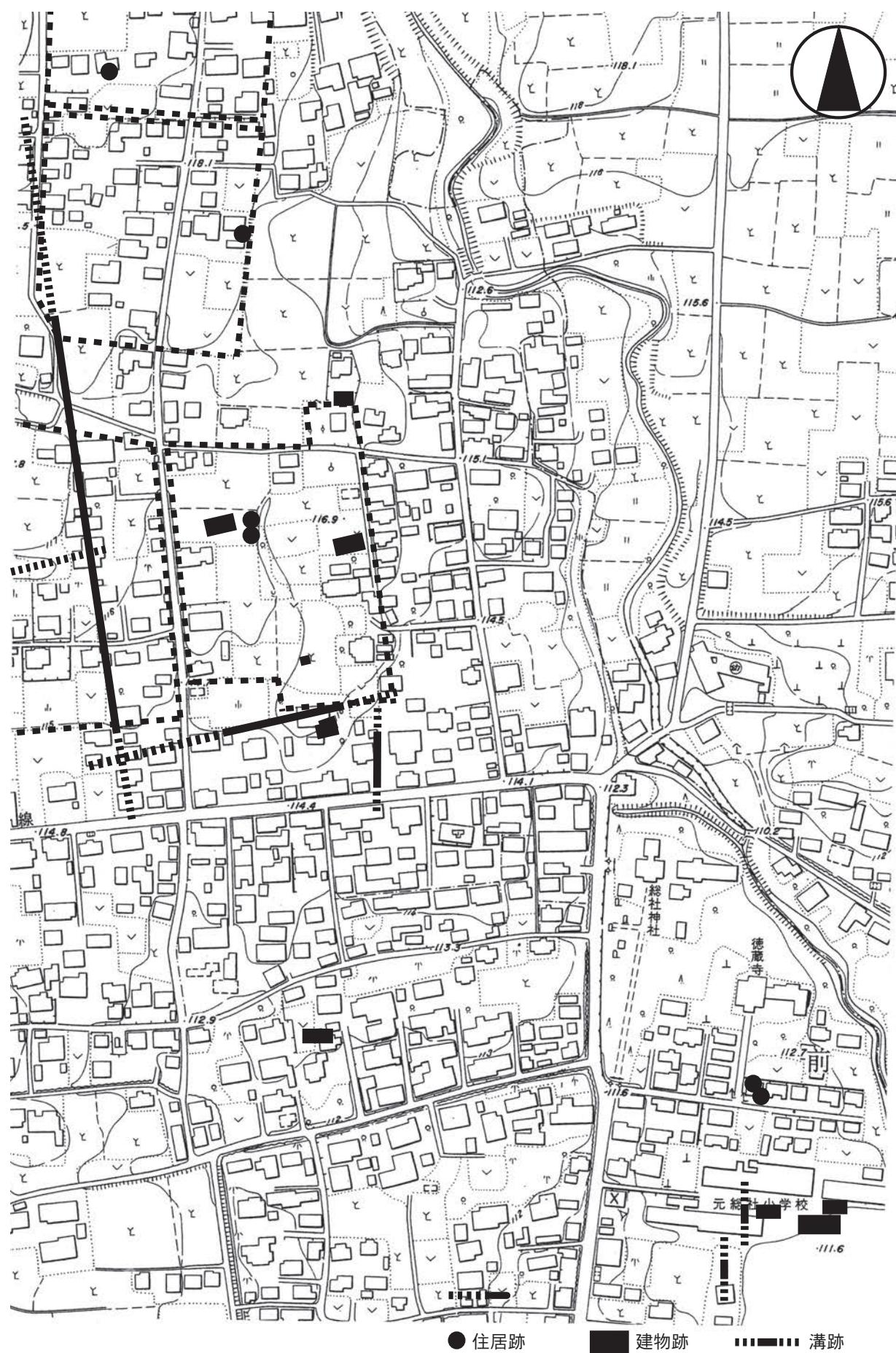
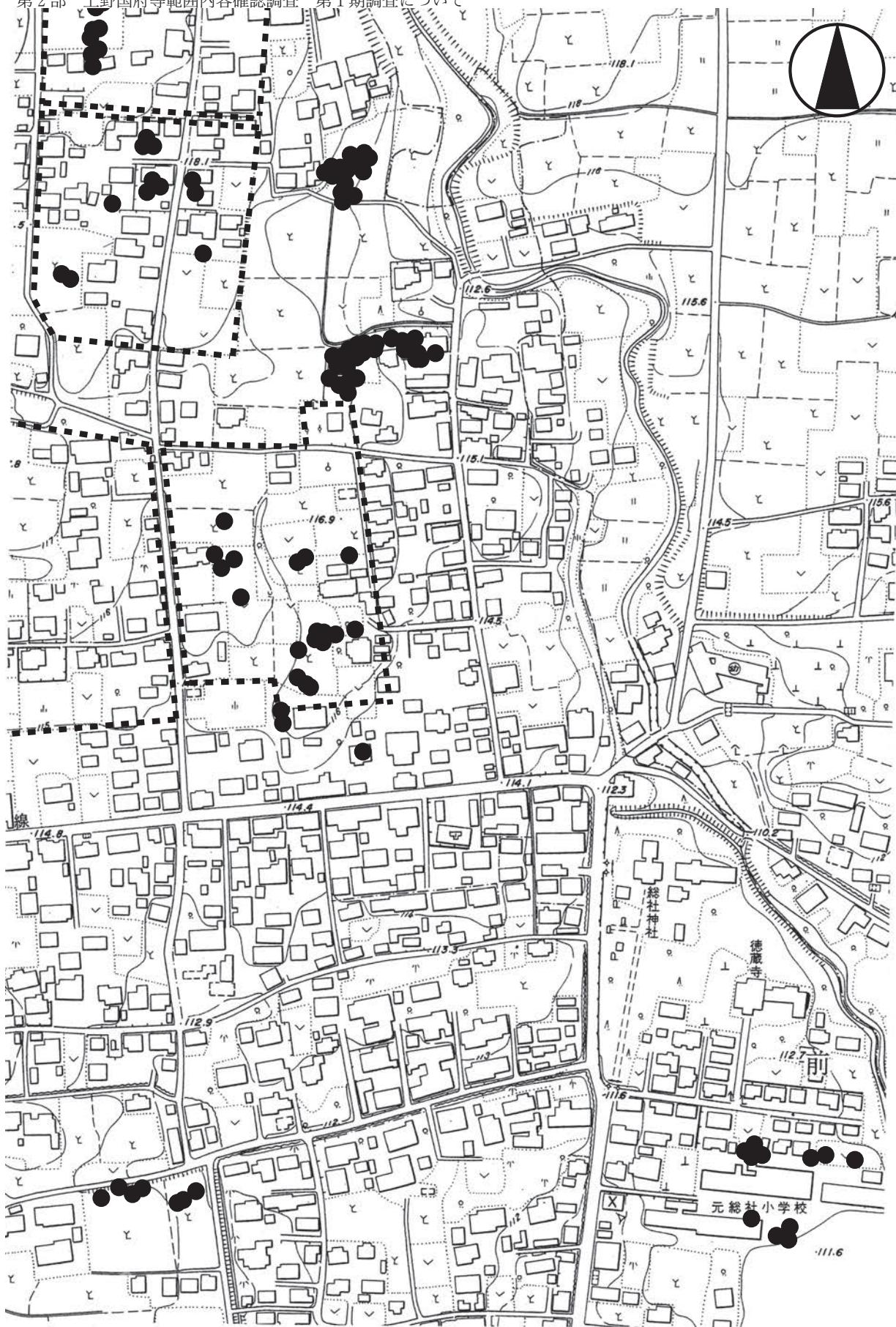


Fig.36 国庁推定地4案と元総社小学校周辺の状況（8・9世紀）



● 住居跡

Fig.37 国府推定地 4案と元総社小学校周辺の状況 (10・11世紀)

代の大溝の延長であることが判明している。なおこの溝は、推定地B案の西端に位置する「松井屋敷」における調査（蒼海（58））で検出された東へ75°傾く大溝と本丸付近で交差することが想定されているが、交差の状況は判然としなかった。

（3）国庁推定地C案とその南側

国庁推定地C案は、総社神社の故地の由来をもつ宮鍋神社付近に位置する地点で、本範囲内容確認調査のほかに、元総社宅地遺跡や区画整理事業とともに調査も広く行われている。この付近も大きく土取りが行われているが、布地業の建物1棟、布地業と総地業をあわせもつ建物1棟もしくはそれぞれ2棟が重複した遺構が検出されているほか、推定地の南端付近に2間2間の掘立柱建物1棟、その南に大溝を挟んで重複した2棟の掘立柱建物、その東に南北に走る大溝が1条検出されている。これらの建物跡や溝は、一番南の大溝1条を残して、西へ最大19°傾く傾向があり、画一的な方位の意識を窺わせる。なお、宮鍋神社の北東から南西方面へ抜けるやや曲がった古代の溝が存在するが、重複関係から6世紀以後に掘削され10世紀までには廃絶していると考えられるが、軸が湾曲することや、断面形状が「区画溝」とされてきた大溝とは違うことから、官衙の区画以外の用途も考慮する必要がある。また、その延伸付近に同時期に掘削されている斜めに走る溝（上野国府11・37トレンチの1号溝跡）が存在することから、その連続性を検証する必要もある。

（4）国庁推定地D案

国庁推定地D案は、国庁推定地A案の北に位置し、「日高道」の終点であり方形の地割が存在する地点である。推定地内の発掘調査はあまり進捗していないが、6世紀から7世紀にかけてと10世紀代の住居跡が検出されているのみで、国府関連遺構は検出されていない。なお、北側に隣接した部分は区画整理事業で発掘調査を行っているが、蒼海地区でも有数の住居密集地域となっている。また、蒼海遺跡群（17街区）および同（30）で検出された道路遺構が推定地の西端を通っていると推定される。

3 まとめ

国庁推定地4案の発掘状況は以上のとおりであるが、現時点では国府関連遺構の検出には至っていない。ただし、推定地C案周辺において、掘込地業をもつ建物が少なくとも2棟、掘立柱建物が3棟、区画溝と推定される溝が3条検出され、これらは若干の差はあるものの、近似した角度で西へ振れていることが判明している。厳密に言えば、これらの溝や建物の有機的な関係については検討の余地があるという問題もあり、またこれらの建物群の性格についてはそれを判断できる遺物の出土がないため現時点で詳細は不明と言わざるを得ない。建物の工法に掘込地業を採用する点を考慮するならば、倉のような機能が想定できるであろうか。ちなみに、国庁推定地C案周辺において、掘込地業をもつ建物はこれ以上は存在しないと考えられる。またその一方で、元総社小学校およびその周辺で検出されている掘立柱建物4棟（うち2棟は元総社小校庭遺跡調査時のもの）、溝3条については、正方位を意識している。このように、これまでの調査で検出されている建物跡と溝については、国庁推定地C案周辺と、元総社小学校周辺とで採用している方位が異なる。この理由については時期差や施設自体の機能差が考えられるが、その詳細な時期差や施設の性格が不明であるため、どのような意味をもつのかについては、現段階では意に留めておくことしかできない。

掘込地業、掘立柱建物跡、溝以外の遺構については、多くの住居跡が検出されている。国府成立前である古墳時代後期（6世紀）からを対象として考えると、6世紀代に牛池川右岸地域（国庁推定地4案および総社神社・元総社小学校周辺を包括した地域）では、住居跡が川沿いの台地上に広く検出されていることから、この範囲に集落が営まれていたことが考えられる。7世紀代の住居跡も検出されていることから、この集落は7世紀に入ても存続していたことが考えられるが、8世紀および9世紀代の住居跡はほとんど検出できない。この現象は国

第2部 上野国府等範囲内容確認調査 第1期調査について

府の造営に関連するものと一般的に言われている現象である。先述の官衙関連遺構の存在に關係する現象であろうか。しかしながら、10世紀代に入ると状況は一転し、住居跡の検出数が増加する傾向がある。特に国庁推定地C案のうち、蒼海遺跡群(99)では、各住居の全容が判然としない程に住居跡が重複して分布していた。また、遺物の出土量も非常に多く、ほとんどが酸化焰焼成須恵器もしくは土師質の白色の土器の小片で、器種では壺と碗の破片がほとんどを占めている。また、壺の底部は水平糸切りで無調整のものが多く見受けられるのも特徴的である。こうした出土状況を裏付けるかのように、蒼海遺跡群(95)の9号井戸からは大量の酸化焰焼成須恵器の壺と碗が出土している。その他にもこの付近では緑釉陶器や白磁の破片のほか、碁石状の小礫も出土しており、こうした高級陶器や玩具と考えられる遺物の出土も特徴的であるほか、幅が1mにも満たない規模の溝の覆土から土師質の高壺が出土している。この高壺については、同様のものが元総社小学校で保管されていたが、校庭で検出された10世紀代の住居からも破片が出土している。この高壺は壺部の底部に穴が穿かれ脚部へ貫通するという特徴を持ち、祭祀に使われたと推定されている。こうした特徴的な遺物が牛池川右岸地域のうち、国庁推定地C案付近から元総社小学校へかけての範囲から出土している。このような10世紀代の住居は、発掘調査の結果から、先述の掘込地業を持つ建物、掘立柱建物を壊して造られていることから、官衙関連遺構（施設）の廃絶後に集落が形成され、住居が廃絶していく過程で上記のような特殊な遺物が廃棄されていったと考えられる。この牛池川右岸地域では国庁推定地C案内に宮鍋神社が存在し、元総社小学校との間には総社神社が存在する。宮鍋神社については総社神社の故地の由来をもつことから、総社神社の現在地への遷座が伝承どおり中世に行われたとしても、総社神社はこの周辺に存在していたことが推測できる。総社神社と特殊な高壺は関連するものなのであろうか。

今後の展望としては、国庁推定地C案と元総社小学校で検出されている建物群について、調査と検討を加えてその位置づけを行うと同時に、地元で「本村」と呼ばれる総社神社・元総社小学校の西側地域は掘立柱建物跡や溝跡が存在する可能性が高いことから、調査の進んでいないこの地域でさらに調査を進め、その成果を上野国府の検討材料としていきたい。

最後ではあるが、上野国府等範囲内容確認調査も当初の5か年が終了して6年目となり、本報告書で5冊目となった。ひとまず初年度から一貫して調査を担当してきた中で、最初は手探りだった状況が、解明への糸口がある程度ぼんやりながら頭の中にイメージできるまでになってきた。しかしながら、進めば進むほど壁にぶつかり、決め手の一指しが指せない状態が続く。限られた時間の中で、いかに上野国府を解明するか。またその成果をどのようにしたら有効に還元できるのか。自問する日々である。

なお、本事業を進行する中で、調査地の地権者の方をはじめとして地元の元総社町にお住まいの方々から協力や声援をいただいたこと、また関係者の皆さんとの助力、末筆ではありますが大変厚く感謝申し上げます。

【主要参考文献】

- 伊勢崎市教育委員会 2016 『発掘された古代の役所～最新の発掘成果からみた上野・北武蔵の律令社会～』 合同遺跡報告会資料集
尾崎 喜左雄 1963 「群馬県前橋市元総社小学校庭遺跡（第2次）」『日本考古学年報』16 日本考古学協会
群馬県 1991 『群馬県史』通史編2
上野国府跡発掘調査委員会・前橋市教育委員会 1967 『昭和42年度上野国府跡発掘調査概報』
日沖 剛史 2016 「群馬県前橋市元総社地域における地形の形成と土地利用」『地域考古学』1 地域考古学研究会
文化庁文化財部記念物課監修 2010 『発掘調査のてびき 集落遺跡発掘編』同成社
文化庁文化財部記念物課監修 2013 『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』同成社
前橋市 1971 『前橋市史』第1巻
群馬県教育委員会 1983 『東山道』群馬県歴史の道調査報告書第16集
群馬県教育委員会・財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992 『鳥羽遺跡 A・B・C・D・E・F区』
群馬県立歴史博物館 2001 『古代のみちーたんけん！東山道駅路－』群馬県立歴史博物館第70回企画展図録

II 調査成果のまとめ

- 前橋市教育委員会 2012 『山王廃寺～平成22年度調査報告～』 山王廃寺範囲内容確認調査報告書V
前橋市教育委員会 2013 『推定上野国府～平成23年度調査報告～』 上野国府等範囲内容確認調査報告書I
前橋市教育委員会 2013 『推定上野国府～平成24年度調査報告～』 上野国府等範囲内容確認調査報告書II
前橋市教育委員会 2015 『推定上野国府～平成25年度調査報告～』 上野国府等範囲内容確認調査報告書III
前橋市教育委員会 2016 『推定上野国府～平成26年度調査報告～』 上野国府等範囲内容確認調査報告書IV
前橋市教育委員会 2013 『元総社蒼海遺跡群（44）、元総社蒼海遺跡群（45）』
前橋市教育委員会 2014 『元総社蒼海遺跡群（57）、元総社蒼海遺跡群（58）、元総社蒼海遺跡群（59）』
前橋市教育委員会 2014 『元総社蒼海遺跡群（60）』
前橋市教育委員会 2016 『元総社蒼海遺跡群（65）』
前橋市教育委員会 2015 『元総社蒼海遺跡群（91）、元総社蒼海遺跡群（95）、元総社蒼海遺跡群（102）』
前橋市教育委員会・JX 日鉄日石エネルギー株式会社・技研コンサルタント株式会社 2016 『元総社蒼海遺跡群（17街区）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991 『元総社明神遺跡IX』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000 『元総社宅地遺跡・上野国分尼寺寺域確認調査II』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2008 『元総社蒼海遺跡群（14）、元総社蒼海遺跡群（19）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009 『元総社蒼海遺跡群（21）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009 『元総社蒼海遺跡群（23）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010 『元総社蒼海遺跡群（29）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010 『元総社蒼海遺跡群（30）』
松島榮治 1986 『元総社小校庭遺跡』『群馬県史』資料編2 群馬県
山崎 一 1978 『群馬県古城墨跡の研究』上巻 群馬県文化事業振興会

写 真 図 版



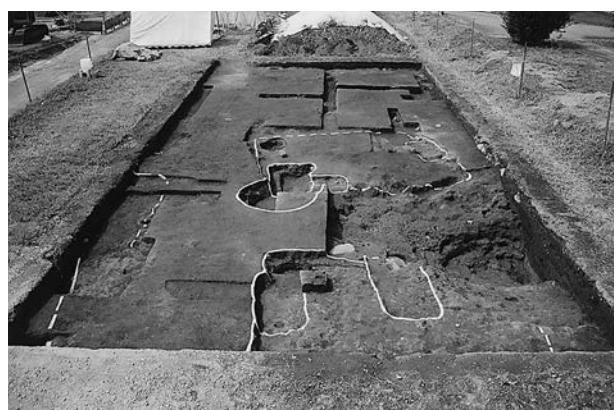
1 35トレンチ全景(東から)



2 35トレンチ1号土坑全景(南から)



3 35トレンチ1号竪穴状遺構全景(南から)



4 36トレンチ全景(東から)



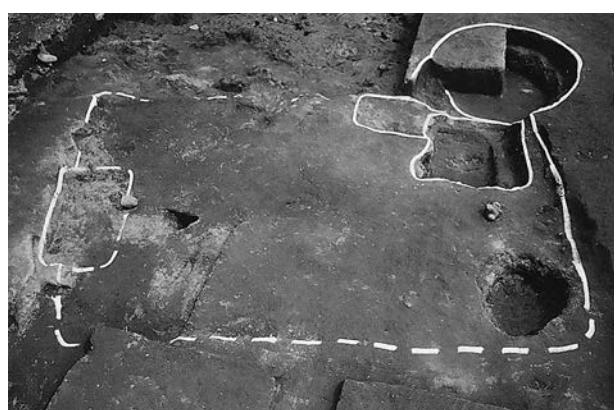
5 36トレンチ遺構集中部付近全景(西から)



6 36トレンチ1号住居跡・1号落ち込み全景(南から)



7 36トレンチ2号住居跡全景(南から)

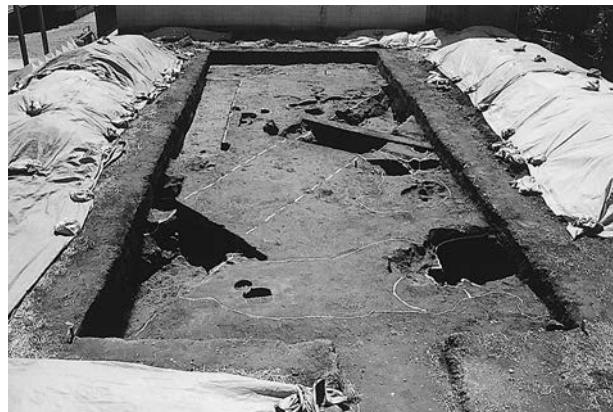


8 36トレンチ3号住居跡全景(西から)

P L. 2



1 36トレンチ1号溝跡全景(北から)



2 37トレンチ全景(北から)



3 37トレンチ1号住居跡全景(南から)



4 37トレンチ3号住居跡全景(西から)



5 37トレンチ1号竪穴状遺全貌(南から)



6 37トレンチ2号住居跡および1号溝跡全景(南西から)



1 37トレンチ1号溝跡土層堆積状態(南西から)



2 37トレンチ1号井戸跡全景(西から)



3 38トレンチ全景(北西から)

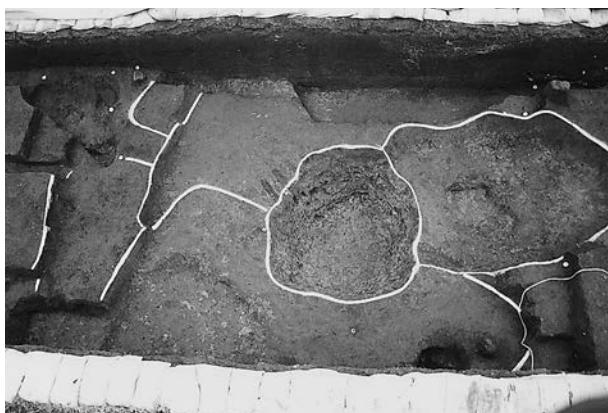


4 38トレンチ1号住居跡全景(南から)

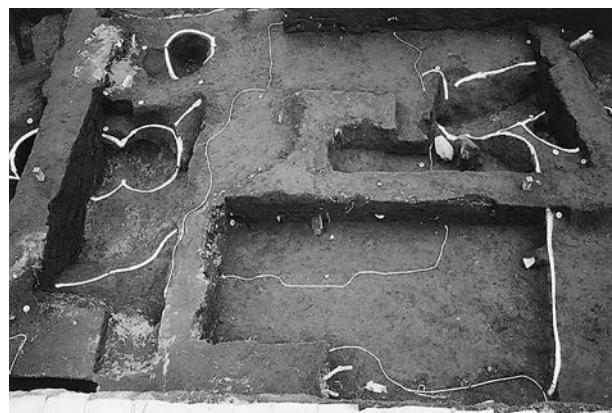


5 38トレンチ2号住居跡全景(北から)

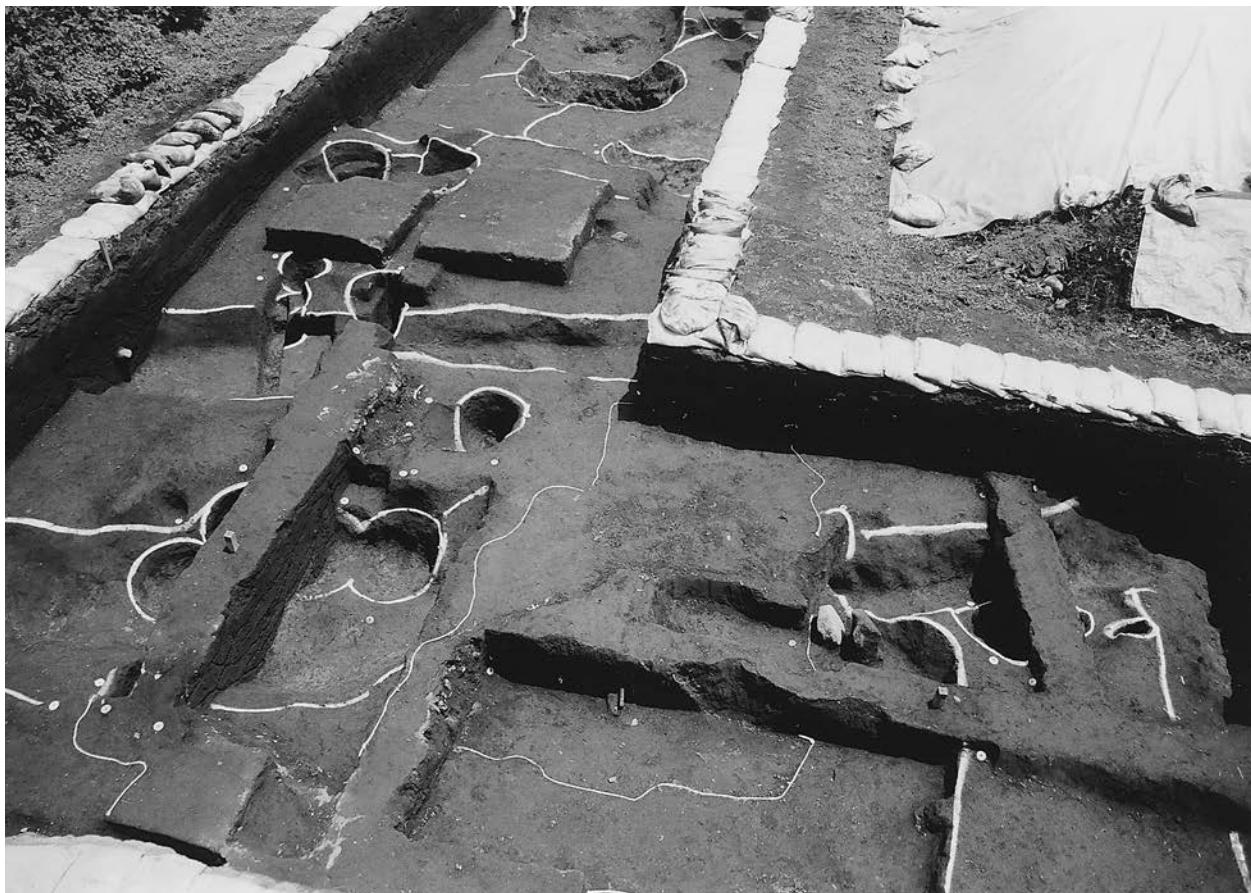
P L. 4



1 38トレンチ3・4・5・6号住居跡全景(南から)



2 38トレンチ7号住居跡全景(西から)



3 38トレンチピット群(1号・2号掘立柱建物跡)全景(西から)



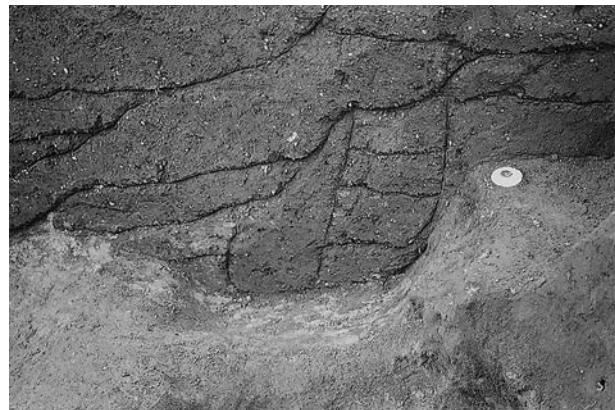
4 38トレンチB-1 P₆・P₅全景(北から)



5 38トレンチB-1 P₆土層堆積(北から)



1 38トレンチB-1 P₄, P₅全景(北から)



2 38トレンチB-1 P₅土層堆積(南から)



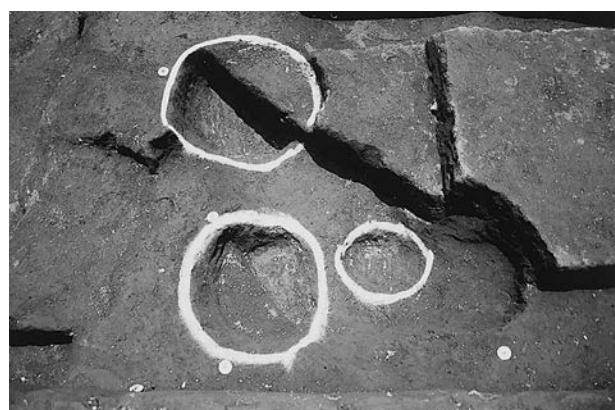
3 38トレンチB-1 P₇全景(東から)



4 38トレンチB-1 P₇土層堆積(南から)



5 38トレンチP-1全景(西から)



6 38トレンチB-1 P₁・P-10・11全景(北から)



7 38トレンチB-1 P₁土層堆積(北東から)

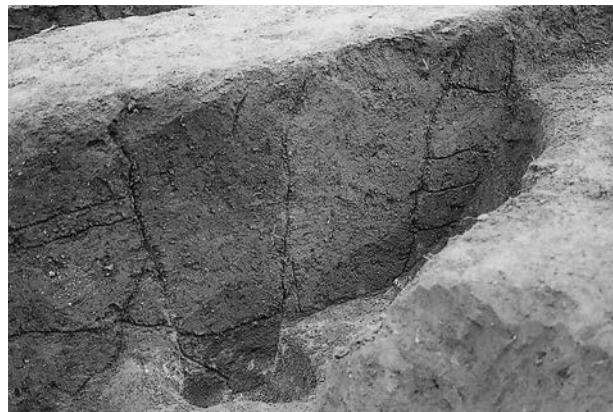


8 38トレンチP-11土層堆積(南西から)

P L. 6



1 38トレンチB-1 P₃, B-2 P₂全景(南から)



2 38トレンチB-1 P₃, B-2 P₂土層堆積(北から)



3 38トレンチB-1 P₂, P-18全景(西から)



4 38トレンチB-1 P₂土層堆積(南から)



5 38トレンチ1号溝跡全景(南から)



6 38トレンチ2・3号溝跡全景(南から)



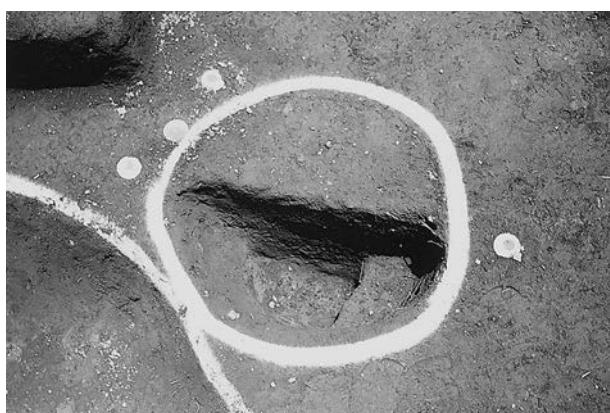
1 38トレ2号溝跡土層堆積(南から)



2 38トレ3号溝跡土層堆積(南から)



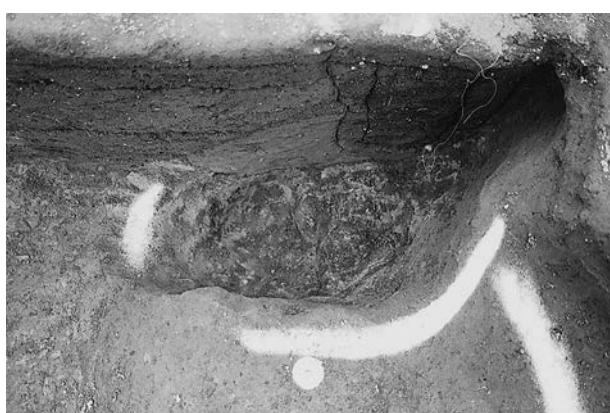
3 38トレンチ4号溝跡全景(西から)



4 38トレンチP-7全景(西から)



5 38トレンチP-7土層堆積(西から)

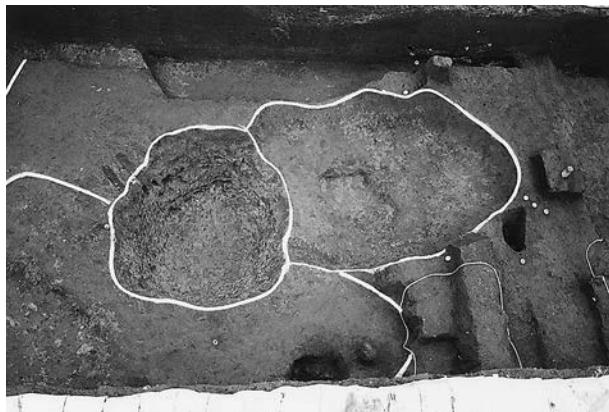


6 38トレンチB-2 P₁, P-8全景(北から)



7 38トレンチB-2 P₁, P-8土層堆積(北から)

P L. 8



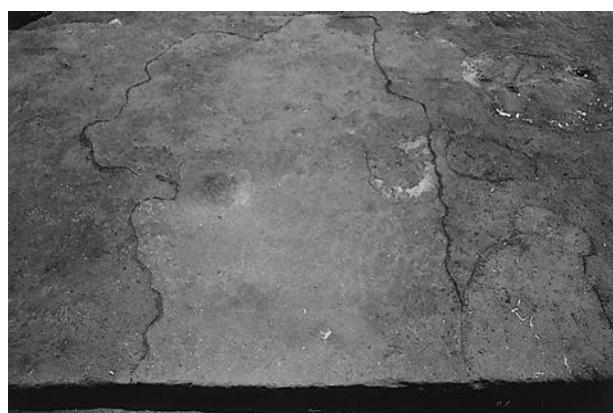
1 38トレンチ1号・3号土坑全景(南から)



2 38トレンチ硬化面検出状態①(南から)



3 38トレンチ浅間B軽石堆積状態(南から)



4 38トレンチ硬化面検出状態②(北から)



5 39トレンチ遠景(南から)



6 39トレンチ全景(西から)



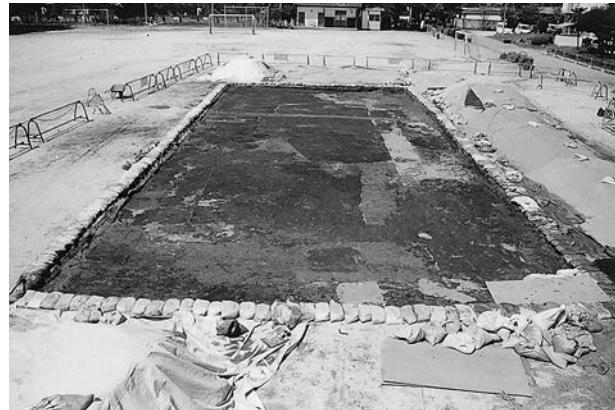
7 40トレンチ1号溝跡全景(南から)



8 40トレンチ1号土坑(北東から)



1 40トレンチより北を望む



2 41トレンチ表土除去状態(東から)



3 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₁埋め戻し状態



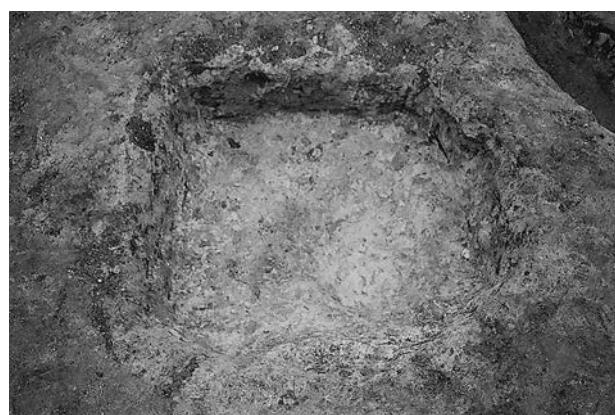
4 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₁埋土除去状態(南から)



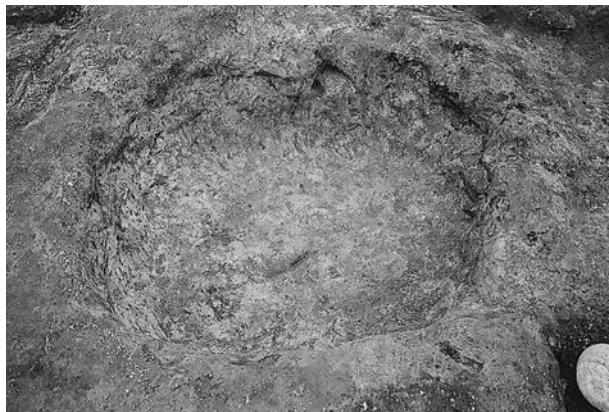
5 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₂埋土除去状態(南から)



6 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₃埋土除去状態(南から)



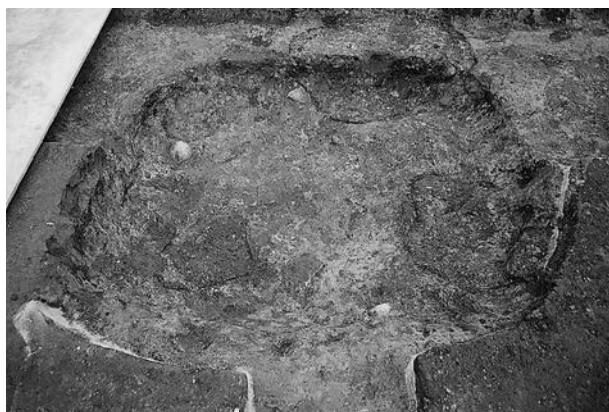
7 41トレンチ1号建物跡P₄埋土除去状態(南から)



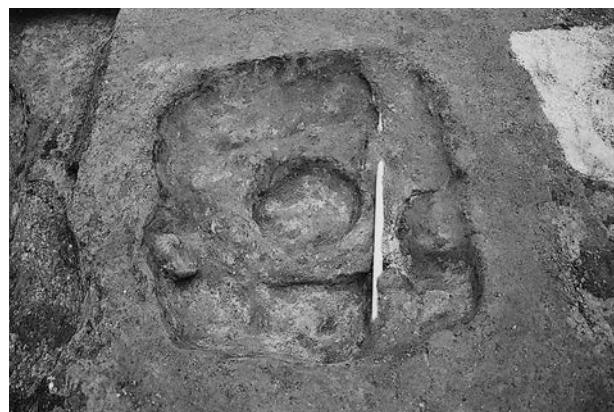
1 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₅埋土除去状態(南から)



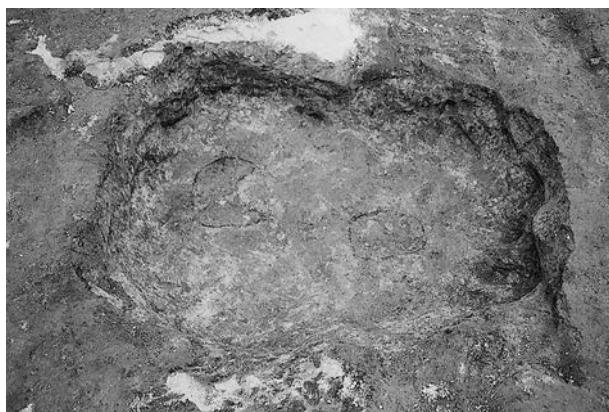
2 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₆埋土除去状態(南から)



3 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₇埋土除去状態(西から)



4 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₈埋土除去状態(南から)



5 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₉埋土除去状態(南から)



6 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₁₀埋土除去状態(南から)



7 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₁₁埋土除去状態(南から)



8 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₁₂埋土除去状態(南から)



1 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₁₃埋土除去状態(南から)



2 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₁₄埋土除去状態(南から)



3 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₁₅埋土除去状態(南から)



4 41トレンチ1号掘立柱建物跡P₁₆埋土除去状態(南から)



5 41トレンチ南辺西拡張部全景(南から)



6 41トレンチ南辺東拡張部全景(南から)



7 41トレンチ2号住居跡全景(西から)



8 41トレンチ風倒木痕?全景(南東から)



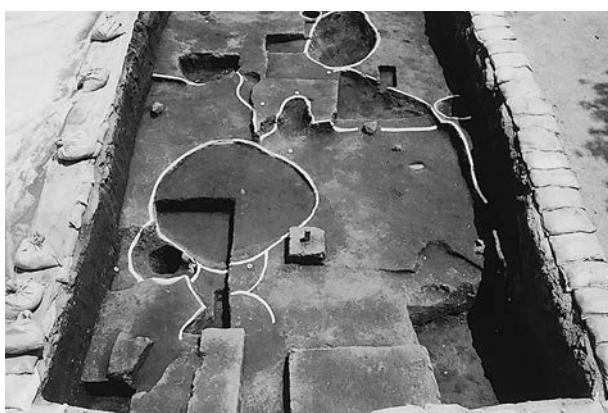
1 42トレンチ全景(西から)



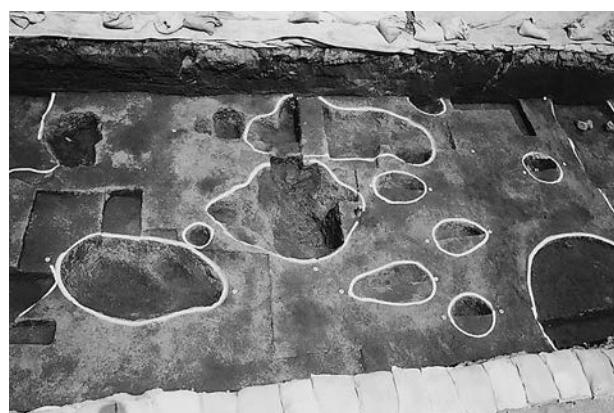
2 42トレンチから41トレンチを望む



3 42トレンチから21aトレンチを望む



4 42トレンチ1・2号住居・1号井戸跡全景(西から)



5 42トレンチ土坑・ピット群付近全景(南から)



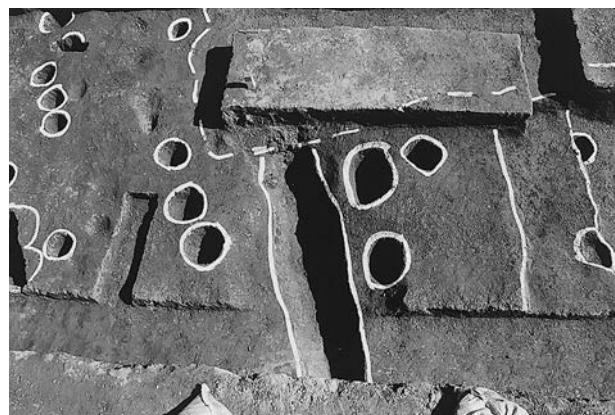
6 42トレンチ2号井戸・1号溝跡全景(南から)



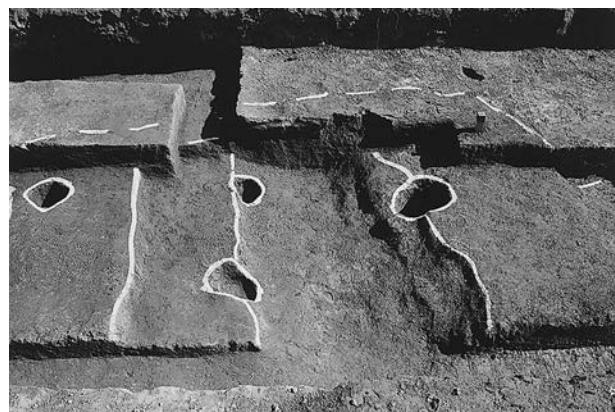
7 42トレンチ3号井戸跡全景(南から)



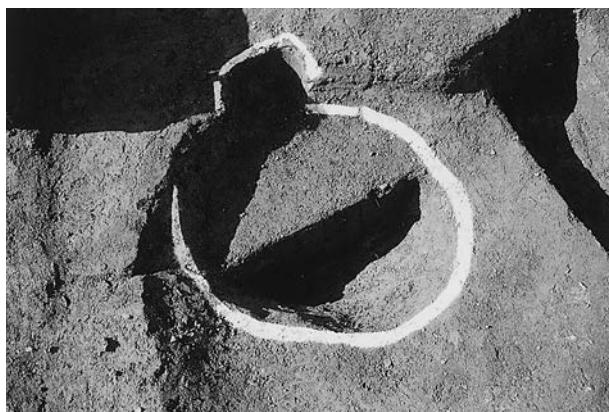
1 43トレンチ全景(北から)



2 43トレンチ1号溝跡付近全景(西から)



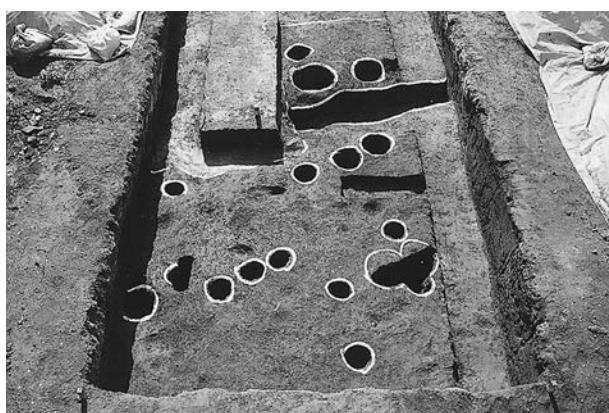
3 43トレンチ2号溝跡付近全景(西から)



4 43トレンチ2号土坑全景(東から)



5 43トレンチIII層上面遺構検出状態(北から)



6 43トレンチIV層上面遺構検出状態(北から)



7 44トレンチ遠景(北西から)



1 44トレンチ全景①(南から)



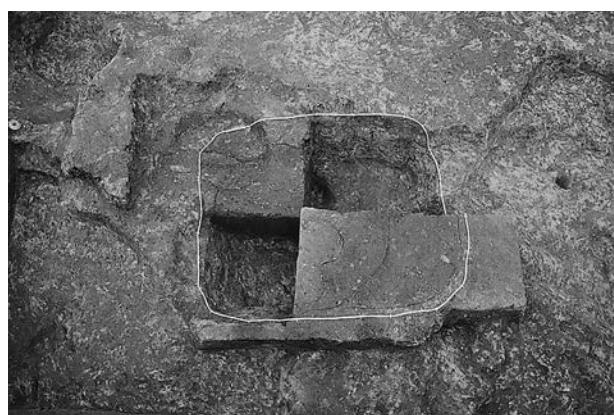
2 44トレンチ全景②西拡張部(南から)



3 44トレンチ全景③東拡張部(南から)



4 44トレンチ1号掘立柱建物跡P₁全景(東から)



5 44トレンチ1号掘立柱建物跡P₂全景(東から)



6 44トレンチ1号掘立柱建物跡P₃全景(東から)



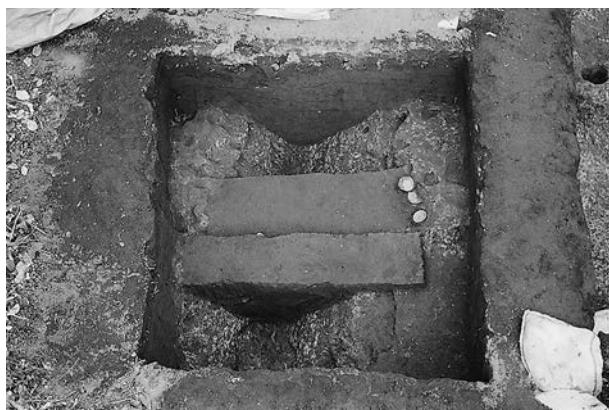
7 44トレンチ1号掘立柱建物跡P₄全景(東から)



1 44トレンチ1号P₄遺物出土状態①(南から)



2 44トレンチP₄遺物出土状態②(東から)



3 44トレンチ1号溝跡検出状態(南から)



4 44トレンチ1・3号土坑全景(南から)



5 44トレンチ4号土坑全景(東から)



6 44トレンチ5号土坑全景(東から)



7 44トレンチ2・7・8号土坑全景(東から)



8 44トレンチ6号土坑全景(東から)



1 44トレンチ9号土坑全景(東から)



2 44トレンチ10号土坑全景(北東から)



3 44トレンチ11号土坑全景(北西から)



4 44トレンチ1・2号ピット全景(東から)



5 44トレンチ3・4号ピット全景(南から)



6 44トレンチ1・2・3号落ち込み全景(南東から)



7 44トレンチ7号落ち込み全景(北から)



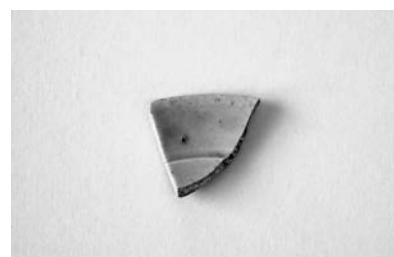
8 作業風景(35トレンチ)



35-1



35-3



35-4



35-5



35-6



36-1



36-2



36-4



36-5



36-6



36-8



36-10



36-11

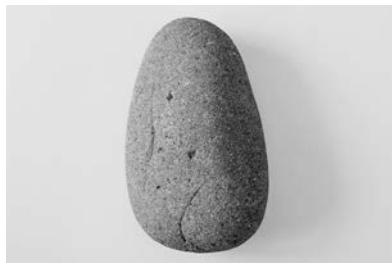


37-2



37-7

P L . 18



37-11



37-12



11-2



38-1



38-2



38-3



38-5



38-6



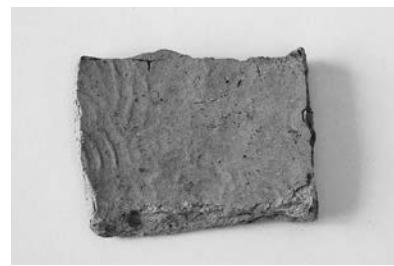
38-10



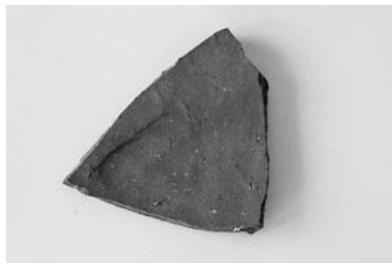
38-11



38-12



38-14



38-18



38-20



38-21



38-22-1



38-22-2



38-24



40-2



41-1



42-1



42-3-1



42-3-2



42-5



42-6



42-8



42-9



42-10



42-13



42-14

P L. 20



42-15



42-16



42-17



42-18



42-19



42-20



42-21



42-22



42-23



42-24



42-25



43-3



44-1



44-2



44-7



44-8



44-9



44-10



44-11



44-12



44-13



44-14-1



44-14-2



44-14-3



44-16



44-17



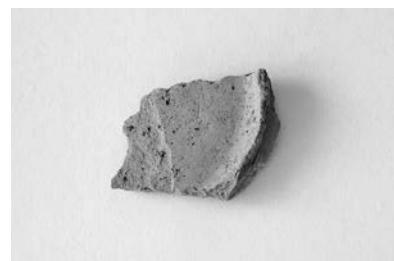
44-18



44-22



44-23-1



44-23-2

抄 錄

フリガナ	スイティコウズケコクフ
書名	推定上野国府
副書名	平成27年度発掘調査報告書
シリーズ名	上野国府等範囲内容確認調査報告書
シリーズ番号	V
編著者名	阿久澤智和
編集機関	前橋市教育委員会
編集機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町三丁目11-4
発行年月日	20170317

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位 置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 経			
スイティコウズケコクフ 推定上野国府	マエバシ シモトソウジヤ 前橋市元総社 町2127-1ほか	10201	27A147	36°23' 9 ° 36°23'23"	139°02' 4 ° 139°02'20"	20150525 20151222	668m ²	範囲内容確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な検出遺構	主な出土遺物	特記事項
推定上野国府	集落	古墳時代	住居跡 6	土師器、須恵器	牛池川右岸に立地する古墳時代の集落を検出。
	官衙、集落	奈良、平安時代	住居跡13、掘立柱建物跡2、溝跡6、井戸跡、土坑、ピット、落ち込み	土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器	元総社小学校校庭遺跡の1号掘立柱建物跡を再確認。
	城館	中世	溝跡4、井戸跡1、豎穴状遺構1、土壙跡、ピット	石製品、在地産土器類	蒼海城との関連が推定される土壙を検出。
	集落	近世以後	井戸跡1、土坑、ピット	陶磁器破片	屋敷で使われたムロと思われる穴を検出。

上野国府等範囲内容確認調査報告書 V

推定上野国府 平成27年度調査報告

2017年3月16日 印刷
2017年3月17日 発行

編集・発行／前橋市教育委員会文化財保護課
印刷／朝日印刷工業株式会社